東京都埋蔵文化財センター調査報告　第380集

世田谷区

殿竹遺跡（第4次調査）

―東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―

2023・11

東京都埋蔵文化財センター

殿竹遺跡（世田谷区 No.57 遺跡）の調査

殿竹遺跡（世田谷区遺跡 No.57）は世田谷区上北沢二丁目１番１号に所在し、地方独立行政法人東京都立病院機構東京都立松沢病院の敷地内に位置しています（第２図）。病院敷地内の南東部付近の赤堤通りに面して、現在成城警察署八幡山駐在所が位置していますが、その北西隣に並んで、今度は世田谷消防署上北沢出張所が改築され移転・設置されることとなりました。

この出張所改築計画について東京都埋蔵文化財センターでは、東京消防庁から委託を受けて、令和４年 12 月から令和５年３月まで、381㎡の範囲を発掘調査しました。

殿竹遺跡は武蔵野台地上に立地しています。武蔵野台地を解析しながらおおよそ北西から南東方向へ流れ、東京湾にそそぐ目黒川の流域に属しています。目黒川はその上流域の池尻付近で大きく烏山川と北沢川という二つの支流に分かれますが、遺跡はこの北沢川の源流域に位置します（第１図）。標高 44 ～ 45 ｍの北沢川右岸の台地上に立地し、目黒台と呼ばれる地形面（第４図）に含まれています。細かく見ると西側から東側へ緩やかに下る緩斜面に位置しています。

周辺には第１図 241 丸下遺跡、同図 277 丸下北遺跡、同図 242 新八山遺跡、同図 238 八幡山稲荷前遺跡、同図 53 八幡山遺跡などが位置し、主に縄文時代と中世以降の遺跡が主体となっています。

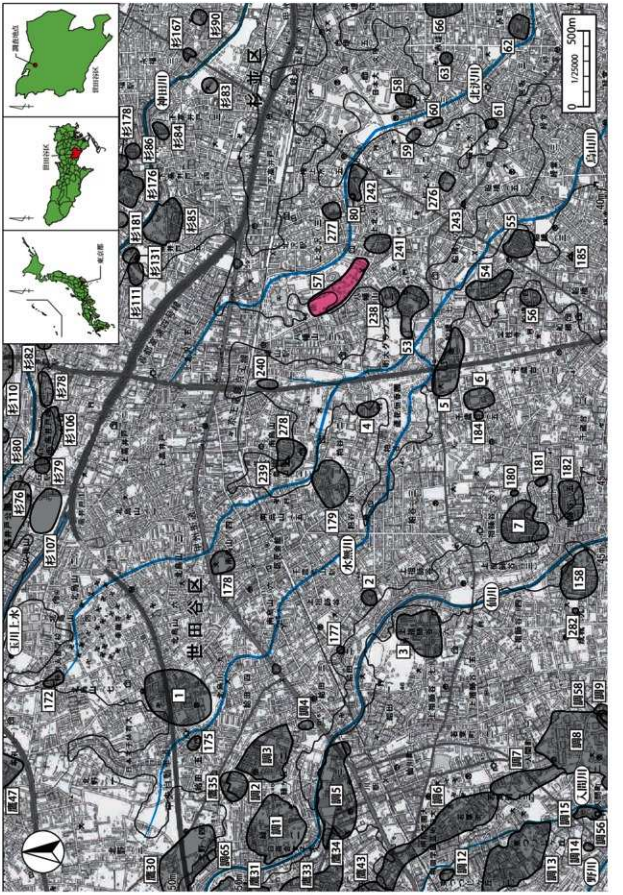
殿竹遺跡は今回の調査が第４次調査となります（第２図）。第１次調査は世田谷区教育委員会・殿竹遺跡調査会により昭和 61 年（1986）に 112㎡が調査されました。第２次調査は東京都埋蔵文化財センターによって平成 19 年（2007）から平成 21 年（2009）にかけて 5508.4㎡が調査されました。これは東京都医学系総合研究所の整備に伴う調査であります。この調査では縄文時代中期後半の住居跡７棟からなる集落、弥生時代後期の住居跡２棟、古墳時代後期の住居跡１棟、中世から近世にかけての遺構・遺物が検出され、大きな成果を得ることができました。また、近世の遺構の中には万治元年（1658）に玉川上水から分水された北沢上水（用水）が含まれており、注目されました。第３次調査は平成 21 年（2009）に松沢病院の外構整備工事及び公園整備工事に伴い 740㎡が調査されました。

今回の第４次調査は、第２次調査と第３次調査に挟まれた範囲にあたります（第２・３図）。この範囲は第２次調査で検出された縄文時代中期の集落範囲に隣接することから、集落の広がりが判明する可能性が高いとして注目されました。

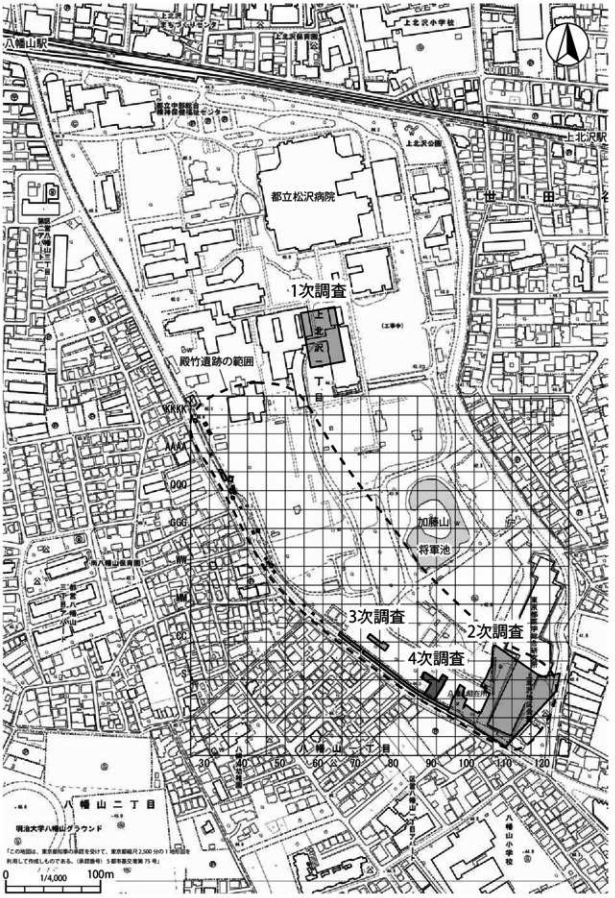
調査の結果、遺構はピットが 198 基、溝状遺構３基、土坑３基、不明遺構３基が検出されました。

残念ながら縄文時代の集落は検出されませんでしたが、予想外の旧石器時代の黒曜石の剥片を伴う礫群が検出（巻頭図版５）されたほか、縄文時代のピット群と遺物集中地点、古代以降のピット群が検出されました（第６図）。ピット群の主体は中世～近世にかけてと思われ、建物等の復元を目指しましたが、間尺や規模などうまく建物跡に復元できないことから、おそらく企画性の乏しい区画施設が何度も作り直されている可能性が高いと考えています。柵列のようなものと思われますが、調査範囲が狭いため、明確な方向や規模等は不明でした。

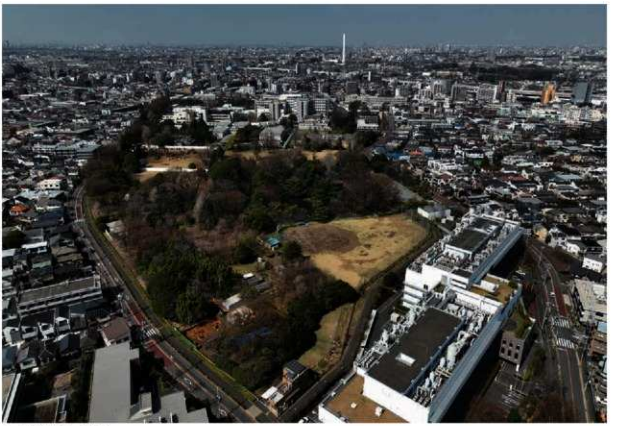
出土遺物では、旧石器時代の黒曜石製剥片（巻頭図版７左）と焼礫、縄文時代前期後半の諸磯ｂ式土器、中期後半の加曽利Ｅ３～４式の土器（巻頭図版８）が出土し、石器では完全な形の石匙が出土



第１図　周辺の遺跡（1/25,000）



第２図　調査範囲（1/4,000）



1. 遺跡遠景（南東）

2. 着手前全景（南東）

3. 伐採・除草後全景（南東）

4. 着手前全景（北西）

5. 表土剥ぎ（北東）

1. 1区全景（南東）

2. 2区全景（上方）

1. 3区全景中世以降面（北）

2. 3区全景縄文時代面（北）

1. 3区完掘全景（上方）

2. 土層断面（西）

1. 旧石器時代石器礫集中部（南）

2. 剥片・礫出土状況（北東）

3. 縦長剥片出土状況（西）

4. 礫群出土状況（西）

5. 礫群出土状況（北）

1. 旧石器トレンチ1北壁（南西）

2. 旧石器トレンチ3北壁（東）

3. 旧石器トレンチ4全景（東）

4. 旧石器トレンチ5全景（北）

5. 旧石器トレンチ6全景（北西）

6. 旧石器トレンチ7全景（南）

7. 旧石器トレンチ8全景（西）

8. 旧石器トレンチ9全景（西）

第３図　第２次・３次・４次調査全体図（第３次調査一部省略）（1/1,000）

しました（巻頭図版７右）。中・近世以降の陶磁器類・土器類・瓦・煉瓦などが出土しました。

旧石器時代の遺跡の発見は予想外としましたが、石器や焼礫の出土状態からは大勢の人が集まりキャンプを張ったような大規模なものではないようです。ひっそりと立ち寄っただけのほんの数人の訪問者であったと思われます。通常焼礫などが伴う場合は調理などが行われた場で、周囲から石器の作りかけやかけらの剥片などが出土しますが、今回は黒曜石の石器が２点出土したのみです。１点は石器になる前の剥片という素材です。もう一点は縦長の剥片で十分このままで使える石器です。しかしよく見てみると、石の表面にたくさんの傷がついているのがわかります。この石器の傷は２つの可能性が考えられます。一つは埋没後何らかの理由で傷がついた場合、もう一つは、埋没する前に傷がついた場合です。後者ですと以下のような推定が可能となります。この傷はこの場所で黒曜石を割って石器を作ったのではなく、他の別の場所で黒曜石を割り、その石器を皮などでできた袋や鞄のような入れ物に収めて持ち運んだということです。入れ物の中に入っていたために、他の入れ物の中の石器や革袋などと表面がこすれて、本来きれいに割れていた角などが少しずつ取れて、全体にざらざらとし、鋭利さを少し欠いているのです。このことは、この石器はこの場所で最後の使用を終えて、革袋にまたしまうことなく捨てられたもののようです。

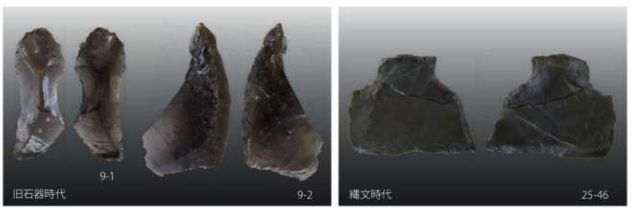
今回の調査では、縄文時代の集落は検出されませんでしたが、前期後半の諸磯ｂ式土器と中期後半の加曽利Ｅ式土器が出土しています。

弥生・古墳時代の遺物も今回は出土しませんでした。中世以降の遺物も陶磁器類の小片がわずかに出土したのみです。近世以降では瓦や煉瓦があり、瓦は江戸時代のものですが、その他の出土遺物は、ほとんどが松沢病院が巣鴨から移転してきた大正８年（1919）以降のもののようです。

なお、発掘調査は令和５年３月 15 日におおむね終了し、３月 31 日で事務所の撤収・現地の埋め戻し等の残務作業はすべて終了しました。４月以降は７月まで新たに千歳烏山駅前に整理作業所を借り整理作業を実施しました。その後編集作業を埋蔵文化財センター本部にて実施しました。

（及川）

巻頭図版７



旧石器時代・縄文時代の石器

25-1
25-2
25-3
25-4
25-5
25-6
25-7
25-8
25-9
25-10
25-11
25-12
25-13
25-14
25-15
25-16
25-17
25-18
25-19
25-20
25-21
25-22
25-23
25-24
25-25
25-26
25-27
25-28
25-29
25-30
25-31
25-32
25-33
25-34
25-35
25-36
25-37
25-38
25-39
25-40
25-41
25-42
25-43
25-44
25-45

縄文土器

Summary

Outline of the Tonotake Site Excavation #4

The Tonotake Site (Setagaya Ward Site No.57) is located at 2-1 Kamikitazawa, Setagaya Ward, Tokyo, on the premises of Tokyo Metropolitan Matsuzawa Hospital. The ruins belong to the Meguro River waters flowing through the Musashino Plateau into Tokyo Bay, and are located on the right bank of the headwaters of the Kitazawa River, a tributary of the Meguro River. With altitudes of approximately 43–45 m, the site is located on a gentle slope, which descends as it goes further east.

On a commission from the Tokyo Fire Department, we at the Tokyo Metropolitan Archaeological Center excavated a worksite of 381 square meters from December 2022 to March 2023 in preparation for rebuilding the Kami Kitazawa Fire Department buildings.

For the Tonotake Site, the present investigation was the fourth survey in a series of investigations. The first survey was conducted on a site of 112 square meters in 1986 by the Setagaya Educational Board and the Tonotake Site Investigation Board. The second survey was conducted on a site of 5508.4 square meters by the Tokyo Metropolitan Archaeological Center from 2007 to 2009. The survey was conducted in connection with the maintenance of the buildings for the Tokyo Metropolitan Institute of Medical Science. The third survey was conducted in 2009, on a site of 740 square meters in connection with the maintenance of the external structure and park of Matsuzawa Hospital.

The worksite of the fourth survey is sandwiched between the sites of the second and third surveys. The site is in contact with the range of a village from the middle Jomon period, which was revealed in the second survey, so it is in focus as a site that is highly likely to reveal how the village spread.

The excavation ended up revealing no village from the Jomon period. However, contrary to our initial expectations, the investigation unearthed a group of conglomerates containing obsidian flakes from the Paleolithic period, which were the first of their kind in this site. Among other findings were 198 pits, three ditch-like structures, three earthen piles, and three unidentified structures from the Jomon period and later eras.

Among the remains unearthed were obsidian flakes and baked conglomerates from the Paleolithic period, Moroiso b-type earthenware from the latter half of the early Jomon period, and Kasori E3- and E4-type earthenware from the latter half of the middle Jomon period. Among the stone tools found were stone scraper in their complete forms. Findings from the Middle Ages and later eras include pieces ceramicware and fragments of unglazed earthenware. Also excavated were ceramics from the Early Modern period and later eras.

This excavation revealed how people in the Paleolithic, Jomon, Yayoi, and Tumulus periods repeatedly used land near the sources of the Meguro River and how people in the Middle Ages, Early Modern period, and later eras continued to use the land. We can safely say that we have managed to obtain a great deal of archeological information from the hitherto little-investigated upstream waters of the Meguro River.

序　言

世田谷区殿竹遺跡は都立松沢病院の敷地内に位置しています。遺跡は武蔵野台地内を流れ東京湾にそそぐ中小河川である目黒川の水系に属し、そのさらに支流である北沢川の源流域の右岸に立地しています。遺跡の標高は 43 ～ 45 mを有します。

この遺跡の発掘調査は昭和 61 年に第 1 次調査が始まり、今回の調査で第 4 次調査となります。これまでの調査により、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代後期にかけての竪穴住居跡が見つかり、川の源流の湧水を利用した集落が作られ続けてきたことが判明していました。中世以降も土地利用が行われ、近世では玉川上水の分水である北沢上水（用水）の一部が検出され注目されていました。

今回実施した第 4 次調査は、東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所の改築・移転に伴うものです。調査は赤堤通りに面する北側の 381㎡の範囲を対象に実施し、旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物を発見することができました。

今回の調査で最も注目されるのは、旧石器時代の石器や焼礫がはじめて検出されたことです。また、期待された縄文時代中期の集落の続きは検出されず、縄文ムラの広がりは 2 次調査の範囲のより東側に収まることが判明しました。土器では縄文時代前期後半の諸磯 b 式土器と中期後半の加曽利 E 式土器が出土し、石器では完全な形の石匙が出土しました。

これらの成果をまとめた本報告書が多くの方々に活用され、地域の歴史を解明するための一助となることを期待し、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただければ幸いです。

発掘調査および本報告書の刊行に当たり、ご協力とご指導をいただきました東京消防庁、東京都教育庁地域教育支援部、世田谷区教育委員会、都立松沢病院に厚くお礼を申し上げるとともに、ご教示いただきました研究者の皆様、埋蔵文化財の調査にご協力をいただきました地域住民の方々に心より感謝申し上げます。

令和 5 年 11 月

公益財団法人　東京都教育支援機構
理事長　　坂東　眞理子

例言

1　本書は、東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事に伴う殿竹遺跡（世田谷区No.57）の発掘調査報告書（東京都埋蔵文化財センター調査報告第380集）である。

2　発掘調査事業は、東京消防庁の委託を受け、公益財団法人東京都教育支援機構（契約時は公益財団法人東京都スポーツ文化事業団）東京都埋蔵文化財センターが実施した。

3　試掘調査はパリノ・サーヴェイ株式会社により、令和4年6月1日～同年6月8日に実施された。

4　遺跡所在地：東京都世田谷区上北沢743番1号の一部（地名地番）
　　東京都世田谷区上北沢二丁目1番1号の一部（住居表示）

5　調査対象面積：381㎡　調査終了面積：381㎡

6　調査期間：令和4年12月5日～令和5年3月31日
　整理・報告書作成期間：令和5年4月1日～令和5年7月31日

7　本事業における事業者との事業調整等は、東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。
　課長代理　　鈴木徳子
　埋蔵文化財担当　石井香代子

8　調査担当者
　東京都埋蔵文化財センター　世田谷消防署上北沢出張所分室
　調査課担当課長　松崎元樹
　　調査担当　　山口慶一（令和4年12月1日～令和5年1月31日）
　　調査担当　　及川良彦（令和5年2月1日～令和5年11月30日）
　調査協力
　　株式会社　岩倉建設株式会社
　　テイケイトレード株式会社

9　本報告書の執筆：山口慶一・尾田識好・大網信良・大八木謙司・両角まり・及川良彦
　　編集：及川良彦

10　本報告の概要については、当センター発行の「東京都埋蔵文化財センター年報」によって報告されているが、本書の刊行をもって正式報告とする。

11　出土遺物及び発掘調査・整理に関わる図面・写真等の記録類は、世田谷区教育委員会が保管している。

12　本文用例等
・本書掲載・参照の地形図等は以下のとおりである。
　第1図　国土地理院1:25000地形図「吉祥寺」「東京西部」「東京西南部」「溝口」
　第2図　東京都2,500デジタル白地図「この地図は、東京都知事の承認を受けて、東京都縮尺2,500分の1地形図を利用して作成したものである。（承認番号）5都市基交著第75号」
　第4図　遠藤邦彦ほか2019　図4を参考にトレース・一部加工して作成
　第30～38図は国土地理院地図『地盤高図』をもとに石川・宮崎2012　第90図を参照し再ト

レース、一部改変

・土層の土色や含有物の面積割合、土器の色調等の表記には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行　2014 年）を用い、マンセル表記法で示している。

・出土遺物の注記記号は、殿竹遺跡が世田谷区№ 57 遺跡であることおよび今回の調査が第 4 次調査であることから「57-4- ○○○」とした。遺構番号は第 4 次調査で新たに遺構の種類ごとに 1 号から番号を与えた。なお、これまでの遺構数と遺構番号については第 7 表にまとめた。

・土器の焼成は概ね不良であるため、土器観察表上からは焼成の項目を省略している。

・挿図の縮尺については各図中に示した。

・図中の方位記号は公共座標（世界測地系）の第Ⅸ系座標軸に基づき、真北を示している。

・本書で使用した標高は TP（東京湾平均海水面）である。測量基準点の引き込み作業のうち、水準測量は AP 基準で引き込まれていた。そのため、過去調査との整合性を図るため、調査終了時に測量データや測量図面等はすべて TP に改め、本報告書もすべて TP で統一している。

13　発掘調査及び整理に関して、下記の方々と機関にご指導・ご協力を賜った。記して、深謝いたします（順不同・敬称略）。

品川裕昭、村上舞、箕浦絢、五十嵐　彰、東京消防庁、東京都教育庁、東京都立松沢病院、世田谷区教育委員会

14　本報告書の著作権は、公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターが保有する。

目　次

殿竹遺跡（世田谷区 No.57 遺跡）の調査
序言
例言
Ⅰ　発掘調査の概要
1　調査に至る経緯 …… 1
2　調査の方法 …… 1
3　調査の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の環境
1　地理的環境 …… 5
2　歴史的環境 …… 6
Ⅲ　調査区の地形と基本層序
1　殿竹遺跡の地形 …… 13
2　基本層序 …… 13
Ⅳ　遺構と遺物
1　旧石器時代 …… 16
1）遺構 …… 16
2）遺物 …… 16
2　縄文時代以降の遺構 …… 21
1）ピット …… 21
2）溝 …… 21
3）土坑 …… 34
4）不明遺構 …… 34
3　縄文時代以降の遺物 …… 38
1）縄文時代の土器と石器 …… 38
2）中世以降の遺物 …… 38
3）縄文時代以降の礫 …… 47
Ⅴ　調査の成果と課題
1　殿竹遺跡の既往調査と成果 …… 49
2　目黒川流域の遺跡分布について …… 51
3　北沢上水（用水）について …… 63
4　まとめ …… 66

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡（1/25,000）　ii
第２図　調査範囲（1/4,000）　iii
第３図　第２次・３次・４次調査全体図（第３次調査一部省略）（1/1,000）　x
第４図　武蔵野台地の地形　6
第５図　基本層序（1/60）　15
第６図　第４次調査全体図（1/200）　17
第７図　旧石器時代全体図（1/200）　18
第８図　旧石器時代の石器・礫集中部（1/80、1/40）　19
第９図　旧石器時代の遺物（2/3）　20
第10図　ピット（１）（1/40）　22
第11図　ピット（２）（1/40）　23
第12図　ピット（３）（1/40）　24
第13図　ピット（４）（1/40）　25
第14図　ピット（５）（1/40）　26
第15図　ピット（６）（1/40）　27
第16図　ピット（７）（1/40）　28
第17図　ピット（８）（1/40）　29
第18図　ピット（９）（1/40）　30
第19図　ピット（10）（1/40）　31
第20図　ピット（11）（1/40）　32
第21図　SD001 ～ 003（1/60）　33
第22図　SK001 ～ 003（1/60）　34
第23図　SX001 ～ 003（1/60）　35
第24図　遺構外遺物分布図（1/200）　39
第25図　縄文土器・石器（1/3、2/3）　40
第26図　中世以降の遺物（１）（1/3・1/4）　42
第27図　中世以降の遺物（２）（1/4）　44
第28図　中世以降の遺物（３）（1/6）　45
第29図　中世以降の遺物（４）（1/6）　46
第30図　目黒川流域の遺跡（全時期）　52
第31図　目黒川流域の遺跡（旧石器時代）　53
第32図　目黒川流域の遺跡（縄文時代）　55
第33図　目黒川流域の遺跡（弥生時代）　56
第34図　目黒川流域の遺跡（古墳時代）　58
第35図　目黒川流域の遺跡（奈良時代）　59
第36図　目黒川流域の遺跡（平安時代）　60
第37図　目黒川流域の遺跡（中世）　61
第38図　目黒川流域の遺跡（近世）　62

表 目 次

第１表　殿竹遺跡発掘調査・整理工程表　4
第２表　周辺の遺跡一覧表　11
第３表　旧石器時代の石器・礫一覧表　20
第４表　第４次調査検出遺構一覧表　36
第５表　遺物観察表　41
第６表　縄文時代以降の礫一覧　47
第７表　殿竹遺跡検出遺構番号一覧　48

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版１　1. 遺跡遠景（南東）　iv
2. 着手前全景（南東）
3. 伐採・除草後全景（南東）
4. 着手前全景（北西）
5. 表土剥ぎ（北東）
巻頭図版２　1. 1区全景（南東）　v
2. 2区全景（上方）
巻頭図版３　1. 3区全景中世以降面（北）　vi
2. 3区全景縄文時代面（北）
巻頭図版４　1. 3区完掘全景（上方）　vii
2. 土層断面（西）
巻頭図版５　1. 旧石器時代石器礫集中部（南）　viii
2. 剥片・礫出土状況（北東）
3. 縦長剥片出土状況（西）
4. 礫群出土状況（西）
5. 礫群出土状況（北）
巻頭図版６　1. 旧石器トレンチ1北壁（南西）　ix
2. 旧石器トレンチ3北壁（東）
3. 旧石器トレンチ4全景（東）
4. 旧石器トレンチ5全景（北）
5. 旧石器トレンチ6全景（北西）
6. 旧石器トレンチ7全景（南）
7. 旧石器トレンチ8全景（西）
8. 旧石器トレンチ9全景（西）
巻頭図版７　旧石器時代・縄文時代の石器　xi
巻頭図版８　縄文土器　xii

図 版 目 次

図版1　1. P001全景(南東)
2. P002全景(南東)
3. P003全景(南東)
4. P004全景(南東)
5. P005全景(南東)
6. P006全景(南東)
7. P007全景(南東)
8. P008全景(南東)
9. P009全景(南東)
10. P010・011全景(南東)
11. P012全景(南東)
12. P013全景(南東)
13. P014全景(南東)
14. P015全景(南東)
15. P016全景(南東)
16. P017・018全景(南東)
17. P019全景(南東)
18. P020全景(南東)

図版2　1. P021全景(南東)
2. P022全景(南東)
3. P023全景(東)
4. P024・025全景(東)
5. P026全景(東)
6. P027全景(東)
7. P028・064全景(南東)
8. P029全景(東)
9. P030全景(南東)
10. P031全景(南東)
11. P032・070(南西)
12. P033全景(南東)
13. P034・035全景(南東)
14. P036全景(南東)
15. P037全景(南東)
16. P038全景(北東)
17. P039全景(東)
18. P040・041(南)

図版3　1. P042全景(東)
2. P043全景(南東)
3. P044全景(南東)
4. P045全景(南東)
5. P046全景(南東)
6. P047全景(南東)
7. P048全景(南)
8. P049全景(南西)
9. P050全景(北西)
10. P051全景(南西)
11. P052全景(北西)
12. P053全景(南西)
13. P054全景(南東)
14. P055全景(南東)
15. P056全景(南)
16. P057全景(南東)
17. P058全景(北東)
18. P059全景(北東)

図版4　1. P060全景(北)
2. P061全景(東)
3. P062全景(南東)
4. P063全景(南東)
5. P065全景(南東)
6. P066全景(南東)
7. P067全景(南東)
8. P068全景(南東)
9. P069全景(南東)
10. P070全景(東)
11. P071全景(北西)
12. P072全景(南東)
13. P073全景(南東)
14. P074全景(北東)
15. P075全景(南東)
16. P076全景(南東)
17. P077全景(東)
18. P078全景(南東)

図版5　1. P079・082全景(南東)
2. P080全景(南東)
3. P081全景(南東)
4. P083全景(南西)
5. P084全景(南東)
6. P085全景(南東)
7. P086全景(南東)
8. P087全景(南東)
9. P088・089全景(南東)
10. P090全景(北西)
11. P091全景(南東)
12. P092全景(北西)
13. P093全景(南)
14. P094全景(南)
15. P095断面(南)
16. P096全景(東)
17. P097全景(南)
18. P098全景(南)

図版6　1. P099全景(東)
2. P100・101全景(東)
3. P102全景(北)
4. P103全景(東)
5. P104全景(東)
6. P105全景(東)

7. P106全景(北)
8. P107・111全景(南)
9. P108全景(南)
10. P109全景(西)
11. P110全景(西)
12. P112全景(北西)
13. P113全景(西)
14. P114全景(西)
15. P115全景(西)
16. P116全景(西)
17. P117全景(西)
18. P118全景(西)

図版7 1. P119全景(西)
2. P120・121全景(北西)
3. P122・127全景(北西)
4. P123・124全景(北)
5. P125全景(西)
6. P126全景(東)
7. P128全景(西)
8. P129全景(北西)
9. P130・132全景(東)
10. P129・131・135・136全景(東)
11. P133全景(西)
12. P134全景(西)
13. P137全景(東)
14. P138・139全景(東)
15. P140全景(南)
16. P141全景(東)
17. P142全景(南)
18. P143全景(南)

図版8 1. P145全景(南)
2. P146全景(南)
3. P147全景(南)
4. P148全景(南)
5. P149全景(西)
6. P150・151全景(北東)
7. P152・153全景(北東)
8. P154全景(北西)
9. P155断面(北西)
10. P156全景(西)
11. P157全景(西)
12. P158全景(西)
13. P159全景(西)
14. P160全景(西)
15. P161・162全景(南西)
16. P163・164全景(南西)
17. P165全景(南西)
18. P166全景(西)

図版9 1. P167全景(西)
2. P168全景(北東)
3. P169全景(北)
4. P170全景(西)
5. P171全景(北西)
6. P172全景(西)
7. P173全景(西)
8. P174・175・176・177全景(北西)
9. P178全景(西)
10. P179全景(西)
11. P180全景(西)
12. P181・182全景(東)
13. P183全景(西)
14. P184・186全景(南東)
15. P185全景(西)
16. P187全景(北)
17. P188・189全景(南東)
18. P190・191・192・193全景(南西)

図版10 1. P194・195全景(南東)
2. P196・197全景(南西)
3. P198全景(西)
4. SD001～003全景(南)
5. SD001～003全景(西)
6. SK002全景(南東)
7. SK002アップ(北東)
8. SK003全景(西)
9. SK003断面(西)
10. SX001全景(北)
11. SX002全景(西)
12. SX002断面A-A'(南東)
13. SX002断面B-B'(南西)
14. SX002断面C-C'(北東)
15. SX003全景(南東)

Ⅰ　発掘調査の概要

1　調査に至る経緯

今回調査を行った東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所地区は、周知の遺跡である「殿竹遺跡（世田谷区 No.57）」の範囲に含まれる。このため遺跡の取扱いについて、事業者である東京消防庁（以下、消防庁と略称）・東京都教育委員会（以下、都教委と略称）・世田谷区教育委員会（以下、区教委と略称）による協議が行われ、まずは事業地内の試掘調査が区教委指導の下、パリノ・サーヴェイ株式会社によって令和４年６月１日から同月８日にかけて実施された。試掘調査の結果、縄文時代に帰属する可能性の高い柱穴や土坑及び縄文土器や焼礫が包含層を伴って確認された。この結果に基づき、消防庁・都教委・区教委は本調査実施についての協議を行い、本調査は公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略称）が担当することとなった。

これを受けて、消防庁・都教委・埋文センターは埋蔵文化財調査実施に向けての調整・協議を行い、令和４年９月 22 日に東京消防庁消防総監・東京都教育委員会教育長・公益財団法人東京都スポーツ文化事業団理事長の３者名により、調査に関する協定書を締結し、令和４年 10 月 25 日に消防庁と財団とで調査委託契約書を取り交わした。なお、令和５年４月より、埋文センターは公益財団法人東京都スポーツ文化事業団を離れ、公益財団法人東京学校支援機構へ移管され、同年７月財団の名称変更があり、公益財団法人東京都教育支援機構となり現在に至っている。

本調査に係る埋文センターが提出した発掘届と都教委からの発掘調査の通知は、以下の通りである。

発 掘 届：　　４ス文事埋文第 2351 号　令和４年 11 月４日
発掘通知：　　４教地管理第 3371 号　　令和４年 11 月 29 日

2　調査の方法

本調査は世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事に伴う事前調査として実施された。調査の目的は事業地内の埋蔵文化財の記録保存であり、発掘・整理調査を通じて遺構・遺物の質的及び量的実態の把握・記録を行った。

殿竹遺跡の調査は今回で第４次調査となるが、第２・３次調査で採用した座標や調査基準を引き続き使用した（第２図）。グリッドは調査対象範囲を網羅する４ｍのグリッドを設定し行った。遺跡範囲をカバーするように東西方向を１からの数字、南北方向をＡからのアルファベットで表記した。基点の座標は、26-I 杭の位置とし、国土座標Ⅸ系 X=-37,324.000、Y = -19,448.000（世界測地系）とし、今回の調査対象範囲は 86 ～ 93―M ～ T グリッド内にあたる。

調査区は１～３区に分割し（第６図）、この順に調査を行った。各区では工程上の必要から１区で部分終了確認を実施し、２・３区については最終段階にあわせて終了確認を行った。

調査に伴う測量は、国土座標による平面直角座標系第Ⅸ系（世界測地系第Ⅸ系・日本測地系2011）を基準として行った。標高値は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした日本水準原点の標高値（測量法施行令第２条第２項）に基づく計測値を最終的に使用している（例言参照）。

遺構番号は、溝状遺構をSD、土坑をSK、性格不明遺構をSX、ピットをＰと省略し、検出した順番で番号を付けて記録した（第４・７表）。

現地表面から遺構確認面にいたるまでは重機により掘削し、遺構覆土や遺物包含層は人力で掘削した。遺構確認面は現地表面下約0.3～0.5ｍと、比較的浅い位置で検出された。

遺構の確認面は１・２区では削平が深く及んでいることから１面とし、基本層序Ⅲ層（ソフトローム）上面に設定した。３区はⅡ層（富士黒色土）上面で弥生時代以降の遺構確認を行い、次いでⅢ層上面で縄文時代の遺構確認を行った。なお、各調査区とも旧石器の有無確認のための深掘りトレンチ調査を行い、安全基準の垂直1.5ｍの深さまで掘り下げている。その結果、３区では旧石器時代の遺物が検出されたため、トレンチ周囲の拡張を行っている。

遺構確認面では、トータルステーションにより計測、記録した座標値及び標高値を元にコンターラインを作成し、地表面の形状を記録した。基本的に傾斜が緩いため10cmコンターとした。

検出遺構の図化は、トータルステーションによる機械測量とし、断面図・エレベーション図・遺物微細図については手描き実測図を作成した。

出土遺物は、遺構単位または調査区単位でトータルステーションシステムによる３次元位置の記録作業を行い、必要に応じて微細図を作成した。

遺構写真は35㎜フィルムカメラ（モノクロネガ・カラーリバーサルフィルム）で撮影を行い、一眼レフデジタルカメラによる撮影を併用して行った。デジタルカメラによる撮影データのファイル形式については、撮影時の設定により１・２区はJPEGのみ、３区についてはRAW及びJPEGとした。報告書作成に当たっては、デジタルカメラによる画像を主に用いている。

整理作業は一次と二次に分け、一次整理では遺物の洗浄・注記作業と測量データ類の整理作業を行った。二次整理作業では、各データ類の台帳作成や、遺物の接合・実測・写真撮影、遺構図の作成、報告書掲載図版・表の作成など、報告書刊行に係わる作業を行った。

編集作業にはAdobe InDesignを使用し、文字データ及び各図版などを割付けた。

３　調査の経過

１）周辺環境準備工

殿竹遺跡第４次発掘調査は、準備工を経て令和４年12月５日から令和５年３月31日まで実施した。今回の調査地点は地方独立行政法人東京都立病院機構松沢病院の敷地内に位置することから　消防庁・都教委・区教委、ならびに工事請負会社である岩倉建設株式会社との事前協議に加え松沢病院との事前調整を経て、調査を開始した。以下経過の概要を記す。

まず、令和４年11月14日より準備工を開始し、順次対象地内の草刈り、樹木の伐採や資材搬入などを行った。なお資材搬入に伴い、搬入ルート上の樹木の一部が支障となること、通路の一部が未舗装であり大型重機や事務所設営のための大型ユニック車の入退場に支障があることなどから、松沢病院と協議を行った。その結果、最低限の樹木の枝落としが可能であり、通路は通行時のみ敷き鉄板

とプラ敷を併用することとなった。11月21日にはまず敷鉄板とプラ敷を搬入敷設し、11月25日にはユニットハウスを搬入した。続いて12月5日にはバックホウ（0.25㎥級）と不整地運搬車を搬入した。11月26日～12月5日にかけては、調査区周囲のB型バリケードによる囲いの設置と現場事務所周りの環境整備を実施した。また、場内への測量基準点引込みや調査範囲の位置出しを行った。

なお、発掘調査発生土はすべて場内で仮置きし、調査終了後に埋め戻した。

2）発掘調査

調査地点では事務所用地と残土置き場及発掘調査用地の3者を同時に調査範囲内に収める必要があることから、調査区は1～3区に区分した（第6図）。まず、重機の搬入口に近い1区を調査区とし、2区を残土置き場に、3区を事務所用地とした。1区の表土剥ぎは令和4年12月6日から開始した。本来残土の運搬や残土山の移し替えは不整地運搬車を使用する予定であったが、調査区が狭すぎてかえって効率が落ちるため、当初のみ使用した。1区の遺構確認は12月7日より開始し、遺構調査終了後、旧石器調査の試掘トレンチを掘り下げたのち、調査は令和5年1月10日に終了した。

次に、1月11日より2区の残土山を1区に移動し、2区の発掘調査に着手することとした。事務所は3区に設置のままとした。2区の遺構確認は1月17日より開始した。2区のうち東側部分の調査を終了し、その後西側の部分について追加調査を行っている。2区の調査は1月31日に終了した。

2区の調査の終了に伴い、1区の残土置き場を整地し、3区のユニットハウスを1区に移設した。そして、3区の表土は重機で剥ぎ、この表土は2区へ移動しそこを排土置き場とした。

3区は土層の堆積状況が良好であることから、上層面と下層面の2面に分けて調査を行った。その後、さらに旧石器の試掘調査を行ったところ、黒曜石と礫群が検出されたため、この面を最下層面と呼称した。よって、3区は都合3面の文化層が存在することとなった。旧石器の調査は3月15日に終了し、同日終了確認を行った。終了確認は消防庁・都教委・区教委の立会のもと実施し、その後埋め戻しや撤収作業を3月26日まで行い現地調査を終了した。

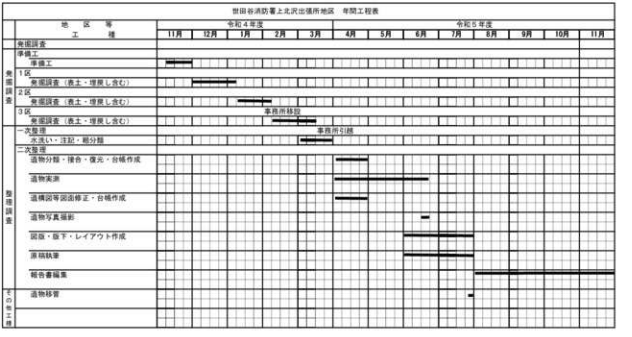
調査時は消防庁・都教委・区教委・埋文センターによる月1回を基本とする定例会を開催し、調査の進捗確認や懸案事項についての協議を行った。なお、調査期間中は調査区の南側が赤堤通りに面し、市民の関心も高いことから、広報掲示板を調査区境のフェンスに設置することとした。

3）整理作業

一次整理作業は、発掘調査と並行しながら令和5年3月1日～同年3月31日まで、遺物の水洗いと注記作業を中心に、図面修正や台帳類の確認など記録類整理作業を実施した。二次整理作業は、現地事務所を松沢病院内の敷地に確保することが難しいことから、現地事務所は撤収し、近隣に新たな事務所を求めることとした。二次整理作業は千歳烏山駅前賃貸住宅（世田谷区南烏山5丁目5-36-9号地内）において、令和5年4月1日～令和5年7月31日まで行った。作業内容は、遺物の接合・復元、分類、報告書掲載遺物の実測・拓本・トレース・写真撮影、遺構図面の整理・トレース、報告書掲載図版の作成、各種台帳類の整備と入力作業などである。併せて、出土遺物及び調査記録類を世田谷区教育委員会へ移管するための作業も実施し、令和5年7月28日に遺物・記録類を世田谷区宇奈根考古資料室へ運び移管を行った。

令和5年8月以降は埋蔵文化財センター本部にて原稿執筆・編集作業を進め、令和5年11月30日に報告書を刊行する運びとなった。（山口・及川）

第１表　殿竹遺跡発掘調査・整理工程表



Ⅱ　遺跡の環境

1　地理的環境

世田谷区は、北は杉並区、東は渋谷区、目黒区、大田区、西は三鷹市・調布市・狛江市、南は多摩川が区切り、神奈川県川崎市に接している。地形上は武蔵野台地南縁に当たり、多摩川が区域の南端部を画している。

殿竹遺跡は世田谷区の中北部に位置する。所在地は上北沢二丁目１番１号で、松沢病院内に相当する。松沢病院は、現在は地方独立行政法人東京都立病院機構東京都立松沢病院が正式名である。都立松沢病院は京王電鉄八幡山駅の南側に接して位置し、周辺は住宅街を形成している。巻頭図版１-１にみるように、この病院の敷地のみが住宅街に浮かぶ緑の島のような現況である。殿竹遺跡はこの病院の敷地内の南半の林に覆われた緑地帯内に位置する。

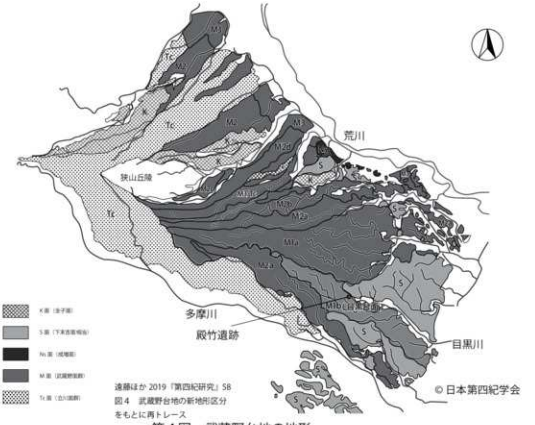
遺跡は武蔵野台地の南東部に相当し、武蔵野面（Ｍ２面）に相当すると位置づけされてきたが、近年の地理学上の新たな説では、目黒台を目黒面（Ｍ１ｂ面）と呼称されるようになった（第４図）（遠藤ほか 2019）。

区域の地形は多摩川の氾濫によって形成された下末吉段丘、武蔵野段丘、立川段丘、多摩川沖積低地で構成され、この４つの面が南向きの雛壇状を呈する。武蔵野段丘面と立川段丘面の境に見られる国分寺崖線は、立川市の北東から世田谷区二子玉川付近まで続いており、区域内での比高差は数mから 20m 程度の傾斜の崖線である。

これらの崖線際には多くの湧水が発達し、それらを集めて仙川、入間川、野川などの河川が、区域の北西から南東に流れ、区の中央から北部は目黒川が西から東へ流れる。仙川は三鷹市から流れ込み、市域の北東部を通った後、世田谷区鎌田三丁目で野川と合流する。入間川は仙川の南西を流れ、狛江市との市境付近で野川に合流する。野川は国分寺市に源流があり、小金井市、府中市、三鷹市、調布市、狛江市を流れ、世田谷区玉川三丁目で多摩川に注ぐ。

目黒川は武蔵野台地内に源流を有し東京湾に注ぐ、全長 7.82km の二級河川である。河口付近の呼び名は「品川」である。細かく見ると上流でいくつかの支流が合流し、目黒川となっている。目黒川水系に属するものは北沢川・烏山川・蛇崩川・水無川及び目黒川そのものの５河川である。本遺跡が立地するのは北沢川の源流域である。三田義春氏の『世田谷の河川と用水』（三田 1977）によると、「北沢川は、旧上北沢村の山谷・殿竹（松沢病院の構内）あたりの凹地にわずかばかり湧出していたであろう水が途中の湧水を集めて東南流し、赤堤村・松原村・代田村・下北沢村などからの細流と合していたものが原姿である。従って上北沢村あたりでは極めて水量の少ない細流であったものであろう。」と述べている。続けて、この北沢川の源流にさらに玉川上水からの水を落とす北沢上水（用水）が引かれて、様相が大きく変わる点を以下のように説明する。

「玉川上水が完成（承応３年…1654）してから４年後の万治元年（1658）上北沢村の地頭（旗本領主）中根壱岐守平十郎の家老長谷川団左衛門が、同村の富農鈴木左内・榎本文左衛門とはかって、村民の飲料水確保のため玉川上水の分水を出願して許可されたものであるが、多分寛文 10 年（1670）」玉



第４図　武蔵野台地の地形

川上水拡張工事直後の時点で農業用水にも転用されるようになったものである。/ 取り入れ口は、最初上北沢地内牛窪に設けられ、樋口１尺４寸、長さ９尺とあり、天明８年（1788）上高井戸村大字第六天前に移されて方１尺となり、明治４年（1871）玉川上水に通船が開設され、水路拡張工事の結果、久我山村に移された。』（79 ～ 80 頁）

とあり、当初は北沢川の源流部から直近の玉川上水付近に接続していたが、その後、取り入れ口がさらに上流側の北西方向に延びていることがわかる。

この北沢上水（用水）が遺跡内を自然勾配で流れていたことが判明している。北沢上水（用水）については第Ⅴ章において別途取り上げる。

2　歴史的環境

1）周辺の遺跡

本遺跡が位置する目黒川上流域の遺跡分布図を第１図に示した。目黒川の上流域の支流である北沢川と烏山川の源流域までを含めた範囲であり、目黒川の最上流域では神田川水系との分水界ともなるので、図の上位に位置する北側神田川水系の上流部の遺跡も示した。また図左側の西部では仙川や野川・入間川の流域の遺跡も含んでいる。まずこの範囲を概観したい。なお、第Ⅴ章に目黒川が流下する世田谷区・目黒区・品川区を中心とした全域の遺跡分布を時代ごとに示したので参照されたい。

第１図には旧石器時代から近世までの遺跡を示し、近代以降は省略している。図を一見して河川に臨む台地縁辺に遺跡が集中していることが一目でわかる。また、台地の内部に遺跡が広がることが少

ないことも読み取れる。これは目黒川上流域の大きな特徴である。

それでは、以下に旧石器時代から順に目黒川流域の遺跡を見ていくこととする。なお、遺跡は各河川の上流から下流の順に記載していくこととする。

A　旧石器時代

武蔵野台地に人々が生活の痕跡を残すのは約 35,000 年～ 38,000 年前である。本遺跡が位置する世田谷区では、この時期の遺跡は国分寺崖線沿いの嘉留多遺跡、堂ヶ谷戸遺跡、下山遺跡、瀬田遺跡などである。目黒川流域に最初に足を踏み入れたのはやや遅れ、約 25,000 年ほど前となる。仙川や、目黒川の支流である、烏山川・北沢川流域など武蔵野台地の内部を流れる河川上流域にも拡散するようになる。

この時期の遺跡には、本遺跡 (57)(番号は第 2 表を参照、以下番号のみは世田谷区№、杉は杉並区№、鷹は三鷹市№、調は調布市№の略) をはじめとした、北沢川流域では向山遺跡 (58)、赤堤中通遺跡 (63)、前谷戸遺跡 (図範囲になし) など、地形の屈曲点に位置する特徴が認められる。烏山川流域では、廻沢北遺跡 (5) で良好な石器のまとまりが出土している。このほかに、桜木遺跡 (図範囲になし)、烏山川の上流域の烏山南原遺跡 (278)、烏山遺跡 （1 ） などがある。烏山遺跡の谷を 1 ㎞北西方向さかのぼると、分水界を越えて神田川水系の井の頭池に達する。この神田川の上流域には御殿山遺跡 (図範囲になし) や高井戸東遺跡 (杉 110) などの遺跡が展開する。図中では向ノ原遺跡 (杉 76)、蛇場美遺跡 (杉 83)、下高井戸塚山遺跡 (杉 85)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、堂の上遺跡 (杉 181) などが該当し、濃密な分布を示す。

仙川流域では祖師谷大道北遺跡 (3)、仙川遺跡 (調 5)、中仙川遺跡 (鷹 33)、市立第五中学校遺跡 (鷹 31)、北野遺跡 (調 65・鷹 30) などがある。

入間川・野川流域では滝坂遺跡 (鷹 43)、若葉町遺跡 (調 6)、入間町城山遺跡 (調 8)、蟹沢遺跡 (調 9)、陵山遺跡 (調 15) などがある。

B　縄文時代

草創期　草創期の遺跡は目黒川上流域では野窪遺跡 (276) があるのみであるが、周辺を探ってみると、神田川水系では蛇場美遺跡 (杉 83)、鎌倉橋上遺跡 C 地点 (杉 178)、仙川流域では北野遺跡 (鷹 30) があり、入間川・野川流域は図の範囲では該当遺跡はない。

早期　早期は北沢川流域で丸下遺跡 (241)、新井遺跡 (62) 遺跡がある。烏山川流域では烏山遺跡 （1 ）、廻沢北遺跡 (5)、八幡山遺跡 (53)、八幡山稲荷前遺跡 (238)、船橋本村北遺跡 (54)、千歳遺跡 (55) が位置する。

神田川水系では上流からみると、向ノ原遺跡 (杉 76)、杉並区№ 80 遺跡 (杉 80)、杉並区№ 106 遺跡 (杉 106)、高井戸東遺跡 (杉 110)、堂の上遺跡 (杉 181)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、杉並区№ 86 遺跡 (杉 86)、杉並区№ 84 遺跡 (杉 84) など早期の遺跡が密集する。

仙川水系では北野遺跡 (鷹 30・調 65)、給田境遺跡 (鷹 35)、仙川遺跡 (調 5)、若葉町遺跡 (調 6)、大原遺跡 (調 7) がある。

前期　前期は目黒川下流域に比べると上流域は遺跡数が少なく、規模も小さい。北沢川流域では殿竹遺跡 (57)、烏山川流域では烏山遺跡 （1 ）、廻沢北遺跡 (5)、八幡山遺跡 (53)、船橋本村北遺跡 (54)、千歳遺跡 (55) がある。

神田川流域では上流より向ノ原遺跡 (杉 76)、高井戸東遺跡 (杉 110)、下高井戸塚山遺跡 (杉 85)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、杉並区№ 84 遺跡 (杉 84) 遺跡がある。

仙川流域では北野遺跡 (鷹 30・調 65)、市立第五中学校遺跡 (鷹 31)、仙川遺跡 (調 5) があり、入間川・野川流域では滝坂遺跡 (鷹 43) がある。

中期　中期は前期に比べると目黒川上流域も遺跡数が増え賑わいを見せる。北沢川流域では、殿竹遺跡 (57)、丸下遺跡 (241)、新八山遺跡 (242)、向山遺跡 (58)、東経堂団地 (60)、江下山遺跡 (61)、新井遺跡 (62)、後谷戸遺跡 (66) などがある。烏山川流域ではさらに支流の水無川で烏山遺跡 （１）、廻沢北遺跡 (5)、烏山川支流では烏山中学校遺跡遺跡 (178)、烏山南原遺跡 (278)、両者の合流点付近に八幡山遺跡 (53) と八幡山稲荷前遺跡 (238)、さらに下流に向かい、船橋本村北遺跡 (54)、千歳遺跡 (55)、船橋本村南遺跡 (56) が並ぶ。図の範囲から外れるが、桜木遺跡はこの流域の中心的な遺跡で、建て替えを含めると 400 棟以上の竪穴住居跡が検出されている。

神田川上流域でも遺跡は密集する。向ノ原遺跡 (杉 76)、杉並区№ 80 遺跡 (杉 80)、高井戸東遺跡 (杉 110)、杉並区№ 106 遺跡 (杉 106)、中袋遺跡 (杉 78)、杉並区№ 82 遺跡 (杉 82)、杉並区№ 111 遺跡 (杉 111)、下高井戸塚山遺跡 (杉 85)、堂の上遺跡 (杉 181)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、鎌倉橋上遺跡 C 地点遺跡 (杉 178)、杉並区№ 86 遺跡 (杉 86)、杉並区№ 84 遺跡 (杉 84)、蛇場美遺跡 (杉 83) があげられる。

仙川流域では、北野遺跡 (鷹 30・調 65)、市立第五中学校遺跡 (鷹 31)、中仙川遺跡 (鷹 33)、西山谷遺跡 (鷹 34)、仙川遺跡 (調 5)、世田谷区内に入ると祖師谷大道北遺跡 (3)、釣鐘池北遺跡 (7)、川本ゴルフ場遺跡 (180)、釣鐘池東遺跡 (181)、釣鐘池南遺跡 (182)、西台遺跡 (158) がある。

入間川・野川流域では、滝坂遺跡 (鷹 43)、若葉町遺跡 (調 6)、大原遺跡 (調 7)、入間城山遺跡 (調 8)、蟹沢遺跡 (調 9) と左岸側に連続し、右岸側では中台北遺跡 (調 12)、中台遺跡 (調 13)、陵山遺跡 (調 15) が位置する。

後期　後期になると人々は再び目黒川上流域から撤退したようで、遺跡数も極端に減少する。烏山川流域では烏山遺跡 （１）、粕谷八幡神社遺跡 (4)、八幡山遺跡 (53) を数えるのみである。

一方、神田川流域では遺跡の数を見る限り大きな減少とはなっていない。杉並区№ 107 遺跡 (杉 107)、高井戸東遺跡 (杉 110)、中袋遺跡 (杉 78)、杉並区№ 111 遺跡 (杉 111)、杉並区№ 131 遺跡 (杉 131)、下高井戸塚山遺跡 (杉 85)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、杉並区№ 86 遺跡 (杉 86)、杉並区№ 84 遺跡 (杉 84)、蛇場美遺跡 (杉 83) がある。

仙川流域では北野遺跡 (鷹 30・調 65)、祖師谷大道北遺跡 (3)、釣鐘池北遺跡 (7) がある。

入間川・野川流域は滝坂遺跡 (鷹 43)、中台遺跡 (調 13) が位置する。

晩期　晩期は後期よりもさらに遺跡数が大きく減少し、目黒川上流域にはこの時期の遺跡は検出されておらず、神田川流域の中袋遺跡 (杉 78)、仙川流域の釣鐘池北遺跡 (7) の２遺跡のみとなる。

C　弥生時代

殿竹遺跡で２棟の弥生時代後期の住居跡が検出されており、目黒川支流の北沢川最上流域の弥生時代集落である。北沢川流域では後谷戸遺跡 (66) がある。図の範囲から離れるが、北沢川流域には赤堤陣屋遺跡、前谷津遺跡、宮前遺跡などがあり、さらに下流には円乗院遺跡や下北沢本村遺跡などがある。烏山川流域では図の範囲外であるが桜木遺跡と大鶏山遺跡が位置する。円乗院遺跡は目黒川流

域に集中する弥生時代後期環濠集落の中でも最も上流域に位置し、河口より6km上流に位置する。殿竹遺跡はこの環濠集落からさらに3km上流に位置する。このことは第Ⅴ章でふれる通り、目黒川中流域の環濠集落の上流部開拓の方向性は、烏山川より北沢川の流域が選ばれていたようである。

神田川水系では鎌倉橋上遺跡(杉176)遺跡では後期の環濠集落が検出されている。このほか杉並区№131遺跡(杉131)がある。

南西方向の仙川流域では祖師谷大道北遺跡(3)が位置する。入間川流域では、この流域最大の集落である入間城山遺跡(調8)が位置する、中期後半の宮ノ台式から始まり、後期には大集落を形成する。

D　古墳時代

北沢川流域の古墳時代遺跡は少ない。集落は北沢川流域では殿竹遺跡のほかに、新八山遺跡(242)がある。烏山川流域では烏山遺跡(1)、船橋本村北遺跡(54)、図の範囲から外れるが桜木遺跡がある。墳墓は横穴墓として梅が丘横穴墓(78)が北沢川流域にあるのみである。目黒川を下っても古墳は少なく大塚山古墳がある程度である。

神田川水系では中袋(山中)遺跡(杉78)、杉並区№80遺跡(杉80)、杉並区№84遺跡(杉84)、高井戸東遺跡(杉110)、杉並区№167遺跡(杉167)、鎌倉橋上遺跡(杉176)、堂の上遺跡(杉181)などがある。

仙川流域では祖師谷大道北遺跡(3)、仙川遺跡(調5)、北野遺跡(鷹30)があげられる程度である。

野川・入間川流域では遺跡数も増え、蟹沢遺跡(調56)、入間城山遺跡(調8)、中台遺跡(調13)、陵山(調15)、滝坂遺跡(鷹34)、古墳は糟嶺神社古墳(56)、横穴は蟹沢横穴墓群(58)がある。入間城山遺跡は近年数度の大規模調査に伴い、古墳時代前期と後期にそれぞれピークを持つ中心集落であることが判明しつつある。

E　奈良時代

この時期の目黒川上流域の遺跡は古墳時代に引き続き非常に少なく、図中の烏山川流域では烏山遺跡(1)、船橋本村北遺跡(54)、右岸では給田南遺跡(175)のみである。

こうした状況は神田川上流域でも同様で、この時期は鎌倉橋上遺跡(杉176)があげられるのみである。

一方仙川流域や野川・入間川流域は遺跡が増え、仙川流域では祖師谷大道北遺跡(3)、市立第五中学校遺跡(鷹31)、西山谷遺跡(鷹34)、左岸では給田境・社田遺跡(鷹35・調2)、柳川遺跡(調3)、入間川・野川流域では滝坂遺跡(鷹43)、大原遺跡(調7)、入間町城山遺跡(調8)、蟹沢遺跡(調9)などが左岸側に並ぶ。

F　平安時代

この時期は目黒川上流域は引き続き集落は少ない。集落以外の生産地などとしての土地利用であった可能性もあろう。烏山遺跡(1)、烏山中学校遺跡(178)、右岸では給田南遺跡(175)、船橋本村北遺跡(54)などがあるのみである。

神田川流域の遺跡の分布も少なくなり、図示の範囲では当該時期の遺跡はなくなる。

一方、仙川流域ではこの時期も引き続き遺跡数が多く、鈴鐘池北遺跡(7)、市立第五中学校遺跡(鷹31)、西山谷遺跡(鷹34)、左岸では給田境・社田遺跡(鷹35・調2)、柳川遺跡(調3)、入間川・

野川流域では滝坂遺跡 (鷹 43)、入間町城山遺跡 (調 8) などが左岸側に並ぶ。

G　中世

中世には再び目黒川上流域もにぎやかさを取り戻す。目黒川上流域の北沢川支流では殿竹遺跡 (57)、新八山賀川遺跡 (80)、向山遺跡 (58) があり、烏山川支流では左岸はカネ塚 (239)、烏山城 (砦) 跡・烏山南原遺跡 (278)、児ヶ谷遺跡 (240)、八幡山遺跡 (53)、八幡山稲荷前遺跡 (238)、星野塚 (243)、右岸は泉沢寺遺跡 (179)、東覚院遺跡 (6)、船橋観音堂塚 (185) などがある。この烏山川の下流には東京都指定旧跡世田谷城跡が位置する。

北側の神田川流域でも遺跡数の増加は目覚ましく、向ノ原遺跡 (杉 76)、中袋 (山中) 遺跡 (杉 78)、高井戸東遺跡 (杉 110)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、蛇場美遺跡 (杉 83) などがある。

仙川流域では市立第五小学校遺跡 (鷹 31)、緑ヶ丘遺跡 (調 1)、社田遺跡 (調 2)、祖師谷大道北遺跡 (3)、釣鐘池北遺跡 (7)、下祖師谷前遺跡 (282) などがある。この流域の上流には中世の大遺跡である新川遺跡が位置する。

入間川・野川流域では大原遺跡 (調 7)、入間町城山遺跡 (調 8) がある。

H　近世

この時期の遺跡も非常に多く中世に開拓された地点を中心にさらに遺跡の広がりを認めることができる。目黒川上流域では北沢川支流では殿竹遺跡 (57)、丸下遺跡 (241) 、新八山遺跡 (242)、向山遺跡 (58)、江下山遺跡 (61)、後谷戸遺跡 (66) があり、烏山川支流では左岸はカネ塚 (239)、烏山城 (砦) 跡・烏山南原遺跡 (278)、児ヶ谷遺跡 (240)、八幡山遺跡 (53)、八幡山稲荷前遺跡 (238)、右岸は泉沢寺遺跡 (179)、水無川流域では烏山遺跡 (1)、給田北遺跡 (175)、廻沢北遺跡 (5)、東覚院遺跡 (6)、野島家遺跡 (184)、船橋観音堂塚 (185) などがある。

神田川流域では向ノ原遺跡 (杉 76)、高井戸東遺跡 (杉 110)、鎌倉橋上遺跡 (杉 176)、蛇場美遺跡 (杉 83) などがある。

仙川流域では左岸は北野遺跡 (鷹 30)、緑ヶ丘遺跡 (調 1)、給田境・社田遺跡 (鷹 35・調 2)、給田南遺跡 (177)、釣鐘池北遺跡 (7)、右岸は市立第五小学校遺跡 (鷹 31)、中仙川遺跡 (鷹 33)、西山谷遺跡 (鷹 34)、仙川遺跡 (調 5)、祖師谷大道北遺跡 (3) などがある。入間川・野川流域では滝坂遺跡 (鷹 43)、大原遺跡 (調 7)、入間町城山遺跡 (調 8)、蟹沢遺跡 (調 9) がある。

なお、殿竹遺跡が位置する上北沢村は、旗本伊丹氏、幕府領、旗本中根氏、幕府領、さらに増上寺領と支配が目まぐるしく変わり、増上寺領で明治をむかえる。

以上のように、時期ごとのの遺跡分布には非常に粗密があることがわかり、これが武蔵野台地内奥部の遺跡分布の特徴である。

2）殿竹遺跡の既往の調査

殿竹遺跡の調査は今回が第 4 次調査となる。第 1 次調査は世田谷区教育委員会と殿竹遺跡調査会によって昭和 61 年（1986）年に実施された（殿竹遺跡調査会 1987)。この調査はリハビリテーション棟建築に伴うもので、松沢病院内のいわゆる「加藤山と将軍池」の北方約 250 m に位置する。

第 2 次調査は都埋文センターにより平成 19 ～ 21 年（2007 ～ 2009）にかけて実施された（東京都埋蔵文化財センター 2010b)。東京都医学系総合研究所（仮称）整備に伴う調査で、遺跡の南東隅部分 5508.4㎡と広域な調査が行われ、縄文時代から近世にかけて良好な遺構遺物を検出し、特に縄

第２表　周辺の遺跡一覧表（１）

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	時代
#176	石ノ原遺跡	相原区久保山二丁目	縄文時代集落　縄文時代ユニット　礫群　縄文時代住居　炉穴　土坑	旧石器時代縄文時代(早期-中期)弥生時代古墳時代(中期)古墳時代(後期)
#178	中袋山中遺跡	相原区高井戸西一丁目	縄文時代住居跡　土坑　古墳時代住居跡　竪穴住居　炉	縄文時代(中期-後期)古墳時代(中期)
#179	相原区#79遺跡	相原区高井戸西一丁目		縄文時代(早期)
#180	相原区#80遺跡	相原区高井戸西二丁目		縄文時代(中期)古墳時代
#182	相原区#82遺跡	相原区高井戸東二丁目		縄文時代(中期)
#183	蛭塚遺跡	相原区相原下高井戸三丁目	縄文時代竪穴　炉中央　住居跡　溝状遺構	旧石器時代縄文時代(草創期-後　期)(中期)(後期)
#184	相原区#84遺跡	相原区下高井戸三丁目		縄文時代(中期-後期)古墳時代
#185	下高井戸城山遺跡	相原区下高井戸四丁目　下高井戸五丁目	縄文時代住居　集石　炉　土坑　ピット群	旧石器時代縄文時代(早期-後期)
#186	相原区#86遺跡	相原区鶴山一丁目		縄文時代(中期-後期)
#190	相原区#90遺跡	相原区南大沢一丁目		古墳時代
#106	相原区#106遺跡	相原区高井戸西一丁目		縄文時代(早期・中期)
#107	相原区#107遺跡	相原区久保山二丁目		縄文時代(後期)
#110	高井戸東遺跡	相原区高井戸西二丁目　高井戸東二丁目	旧石器時代ブロック　縄文時代陥し穴　古墳時代住居　竪穴住居　段状生活遺構　土坑　ピット　溝状遺構	旧石器時代縄文時代(草創期-後期)古墳時代(中世)近世
#111	相原区#111遺跡	相原区下高井戸五丁目		縄文時代(中期・後期)
#131	相原区#131遺跡	相原区下高井戸五丁目		弥生時代
#167	相原区#167遺跡	相原区南大沢二丁目		縄文時代(中期)古墳時代
#176	鎌倉橋２遺跡	相原区鶴山一丁目　鶴山五二丁目	旧石器時代礫群　ブロック　縄文時代住居　土坑　弥生時代住居　墓	旧石器時代縄文時代(早期-後期)弥生時代(後期)古墳時代(中世)近世
#178	鎌倉橋３遺跡Ｃ地点	相原区鶴山一丁目	縄文時代土坑　住居跡	縄文時代(草創期・中期)
#181	堂の下遺跡	相原区鶴山二丁目	旧石器時代ユニット　縄文時代住居跡	旧石器時代縄文時代(中期)
1	鶴山遺跡	鶴川市区北鶴山六-九丁目	ピット　掘穴　円形土坑　溝　畝　道路	旧石器時代縄文時代(早期-後期)古墳時代(弥生時代)平安時代(近世)
2	本伝寺遺跡	鶴川市区上組原谷一丁目　上組原谷二丁目		縄文時代（中期）]
3	鶴川谷大道北遺跡	鶴川市区上組原谷六丁目　上組原谷七丁目　鶴川一丁目	旧石器時代ブロック　縄文時代住居　竪穴　古墳時代住居　中世(後期)　近江焼甕式土坑　鶴瀬不明ピット　溝	旧石器時代縄文時代（中期-後期）弥生時代（後期）古墳時代(弥生時代平安時代(中世)近世
4	鶴谷八幡神社	鶴川市区鶴谷一丁目　鶴谷二丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
5	鶴沢北遺跡	鶴川市区鶴橋七丁目　千歳台四丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期-後期)近世
6	東宮殿遺跡	鶴川市区千歳台四丁目　千歳台五丁目	中世溝下式土師	中世(近世)
7	鶴瀬池北遺跡	鶴川市区上組原谷三丁目　組原谷六丁目	縄文時代住居　集石土坑　土坑　ピット（平安時代(中世)近世)弥穴ピット　土坑　溝　屑塚	縄文時代（早期-後期）且平安時代(中世)近世)
53	八幡山遺跡	鶴川市区八幡山一丁目　八幡山二丁目	縄文時代住居　近世焼窯　井戸　屑塚	縄文時代(早期-後期)中世(近世)
54	鶴橋本村北遺跡	鶴川市区鶴橋四丁目　鶴橋七丁目	縄文時代集石　炉穴跡　土坑　弥古時代住平安時代住居　井戸	縄文時代(早期-中期)古墳時代(弥古時代)平安時代
55	千歳遺跡	鶴川市区鶴橋三丁目	古墳　集落	縄文時代(早期-中期)
56	鶴橋本村南遺跡	鶴川市区鶴橋四丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
57	鶴竹遺跡	鶴川市区上北沢一丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
58	鶴山遺跡	鶴川市区鶴上水二丁目	縄文時代住居　竪穴　土坑　ピット　中世井戸　溝	旧石器時代縄文時代(中期)中世(近世)
59	鶴ヶ丘中学校遺跡	鶴川市区鶴上水二丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
60	東鶴空田遺跡	鶴川市区鶴上水一丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
61	江下山遺跡	鶴川市区鶴上水一丁目　宮坂三丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(中期)
62	新井遺跡	鶴川市区赤尾一丁目	近世溝	縄文時代(早期・中期)近世)
63	赤尾中遺遺跡	鶴川市区赤尾三丁目	古墳　包蔵地	旧石器時代
66	後谷戸遺跡	鶴川市区赤尾三丁目	近世溝	縄文時代(中期)弥生時代(近世)
80	新八山原田遺跡	鶴川市区鶴上水五丁目	古墳　包蔵地	(中世)
158	西台遺跡	鶴川市区成瀬九丁目	縄文時代住居　ピット	縄文時代（中期）]
172	高源院遺跡	鶴川市区北谷山五丁目	古墳　包蔵地	縄文時代]
175	原田北遺跡	鶴川市区原田五丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(近世)
177	原田南遺跡	鶴川市区原田二丁目	包蔵地	弥古時代(平安時代(近世)
178	鶴山中学校遺跡	鶴川市区南鶴山四丁目	古墳　集落	旧石器時代縄文時代(中期)
179	泉沢寺遺跡	鶴川市区南鶴山二丁目　鶴谷二丁目　鶴谷四丁目	墓地　社寺	(中世)近世)
180	川本ゴルフ場遺跡	鶴川市区鶴谷六丁目	包蔵地	縄文時代（中期）]
181	鶴瀬池東遺跡	鶴川市区鶴谷五丁目	包蔵地	縄文時代（中期）]
182	鶴瀬池南遺跡	鶴川市区鶴谷五丁目	包蔵地	縄文時代（早期・中期）]
184	野鳥家遺跡	鶴川市区下成谷五丁目	古墳　民家　近世鶴石下遺構　カマド	近世]
185	鶴橋船倉窯跡	鶴川市区鶴橋一丁目	瓦	(中世)近世]
238	八幡山福荷前遺跡	鶴川市区八幡山一丁目	縄文時代住居　ピット　中世近世溝　井戸　土坑　ピット	縄文時代(早期・中期)(中世)近世]
239	寺本塚	鶴川市区南鶴山二丁目	古墳　塚　径11m　高1.3m	(中世)近世]
240	蛇ヶ谷遺跡	鶴川市区八幡山三丁目	古墳　包蔵地	(中世)近世]
241	丸下遺跡	鶴川市区八幡山一丁目　上北沢一丁目	古墳　集落	縄文時代(早期-中期)近世]
242	新八山遺跡	鶴川市区上北沢一丁目　鶴上水五丁目	縄文時代ピット　近世溝　土坑　ピット	縄文時代(中期)古墳時代(近世]
243	矩野塚	鶴川市区鶴橋五丁目	古墳　塚　径13m　高0.9m	(中世)
276	野鳥遺跡	鶴川市区鶴上水二丁目	古墳　包蔵地	縄文時代(草創期)
277	丸下北遺跡	鶴川市区上北沢一丁目　上北沢三丁目　上水五丁目	古墳　包蔵地	縄文時代
278	鶴山城(野鳥)・鶴山南遺跡	鶴川市区南鶴山一丁目　南鶴山二丁目	旧石器時代ブロック　礫群　近世)溝状遺構　時期不明)溝	旧石器時代縄文時代(中期)中世(近世)
282	下祖原谷前遺跡	鶴川市区成瀬九丁目	包蔵地	(中世)
鶴30	北野遺跡	三鷹市北野四丁目	旧石器時代ユニット　礫群　縄文時代住居　集石　炉穴　土坑　溝状遺構　時代不明)集石土坑　ピット	旧石器時代縄文時代(早期-後期)古墳時代(近世)
鶴31	市立第五中学校遺跡	三鷹市新川一丁目　新川四丁目	旧石器時代ユニット　礫群　縄文時代住居　集石　集石　土坑　時代不明)土坑　溝状遺構	旧石器時代縄文時代(早期-中期)(弥生時代)古墳時代(弥古時代)平安時代(中世)近世)
鶴33	中仙川遺跡	三鷹市中原一丁目　新川一丁目	時代不明)溝状遺構	旧石器時代縄文時代(早期・中期)近世)
鶴34	西台谷遺跡	三鷹市中原一丁目		縄文時代(中期)(弥古時代)平安時代(近世)
鶴35	原田城遺跡	三鷹市北野四丁目		縄文時代(早期・中期)(弥古時代)平安時代(近世)
鶴43	蒲原遺跡	三鷹市中原一丁目　中原二丁目	旧石器時代ユニット　礫群　縄文時代住居　集石　炉穴　土坑　時代不明)ピット　溝状遺構	旧石器時代縄文時代(早期-後期)(弥生時代)古墳時代(弥古時代)平安時代(中世)近世)

第２表　周辺の遺跡一覧表（２）

遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	時代
第47	下本郷遺跡	調布市柴崎一丁目	包蔵地	[縄文時代（中期）近世]
2M1	緑ヶ丘遺跡	調布市緑ヶ丘一丁目　緑ヶ丘二丁目	[縄文時代]埋甕　[平安時代]火葬墓　[中世]近世[掘立柱建物	[縄文時代(中期)][平安時代][中世][近世]
2M2	狐山遺跡	調布市緑ヶ丘二丁目		[縄文時代][弥生時代][古墳時代][近世]
2M3	柳川遺跡	調布市緑ヶ丘三丁目	[弥生時代]竪穴[平安時代]ピット　[近世]溝状遺構	[縄文時代(中期)][弥生時代][平安時代]
2M4	仙川北遺跡	調布市緑ヶ丘三丁目		[縄文時代]
2M5	仙川遺跡	調布市仙川町二丁目　仙川町三丁目	[旧石器時代]礫群　[縄文時代]集石　土坑　[古墳時代]住居　[近世]溝	[旧石器時代][縄文時代(早期-中期)][弥生時代][古墳時代][近世]
2M6	若葉町遺跡	調布市若葉町一丁目　若葉町三丁目	[旧石器時代]現代物置小屋用　[縄文時代]住居　集石　土坑　ピット　[平安時代]溝状遺構	[旧石器時代][縄文時代（早期・中期）]
2M7	大原遺跡	調布市入間町一丁目	[中世]近世[溝状遺構	[縄文時代（早期・中期）][弥生時代][中世][近世]
2M8	入間町城山遺跡	調布市入間町一丁目　入間町二丁目　入間町三丁目	[旧石器時代]礫群　石器ブロック　[縄文時代]住居　炉穴　土坑　陥穴　[弥生時代]住居　土坑　[古墳時代]竪穴[弥生時代]住居　土坑　溝　墳穴墓　[中世]住居　地下式坑　溝　[時代不明]掘立柱建物	[旧石器時代][古墳時代][中世]
2M9	蟹沢遺跡	調布市入間町三丁目	[近世]土蔵跡	[旧石器時代][縄文時代（中期）][古墳時代][奈良時代][近世]
2M12	中台北遺跡	調布市東つつじヶ丘二丁目	包蔵地	[縄文時代（中期）]
2M13	中台遺跡	調布市東つつじヶ丘二丁目　東つつじヶ丘三丁目	[縄文時代]住居　敷石住居　集石　土坑　土蔵跡　埋甕　[古墳時代]住居	[縄文時代（中期-後期）][古墳時代]
2M14	中台南遺跡	調布市東つつじヶ丘三丁目	包蔵地	[旧石器時代][縄文時代]
2M15	鍋山遺跡	調布市入間町二丁目	包蔵地	[縄文時代（中期）][古墳時代]
2M16	穂積神社古墳	調布市入間町二丁目	古墳	[古墳時代]
2M18	蟹沢横穴墓群	調布市入間町三丁目	横穴墓群	[古墳時代]
2M25	芝野遺跡	調布市緑ヶ丘一丁目	[縄文時代]住居　小穴	[旧石器時代][縄文時代（早期・中期）]

文時代中期後半の集落の検出は注目された。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡７棟、土坑22、ピット269基、弥生時代後期の住居跡２棟、古墳時代後期の住居跡１棟、中世以降地下式坑１基、土坑51基、溝35基、井戸５基、ピット283基が検出された。遺物では縄文時代前期前半、前期後半、中期初頭の土器がわずかに出土しているほかは、主体は中期後半～末葉の土器である。石器は石鏃、削器、石錐、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石などが出土している。弥生時代後期の遺物は、出土した土器は網目状撚糸文を地紋とする縦区画系の壺やナデ甕が出土しており、東京湾沿岸系の後期後半でもより新しい段階の時期である。古墳時代後期は有稜坏が出土しており、７世紀前半頃と思われる。

中世以降では、13～14世紀の龍泉窯系の青磁をはじめ常滑産の甕が出土している。このほか出土陶磁器類では16世紀代の擂鉢、16世紀末代の瀬戸美濃産の長石釉皿があり、17世紀初頭の瀬戸美濃産の天目茶碗、さらに17世紀後半の肥前産磁器皿などが出土しており、中世以降断続的ながら土地利用が行われていることを示している。

溝は35条検出されているが、注目されるのはSD15とした水が流れた痕跡のある溝である。万治元年（1658）年に玉川上水から分水が許可された。北沢上水（用水）である。

第３次調査は同じく都理文センターにより平成21年（2009）に740㎡が調査された（東京都理蔵文化財センター2010a）。これは都立松沢病院外構整備工事及び公園整備工事に伴う調査で、赤堤通りに沿って、南東の交番脇付近から北西の正門付近まで細長いトレンチ調査が行われた。調査の結果縄文時代のピット19基、近世以降の土坑11基、溝９基が検出され、この他に耕作に伴う畝間溝と思われる並行する溝群が多数検出されている。出土遺物では縄文土器は中期後半の加曽利Ｅ３式が主体で出土している。

この３次調査から、２次調査で検出した縄文時代中期の集落は北東方向へは広がることはなく、また弥生時代後期や古墳時代後期の住居跡も検出されないどころが、土器片も検出されなかった。

なお、既往の調査の成果については、第４次調査も含め第Ⅴ章で若干であるが再論している。

（及川）

Ⅲ　調査区の地形と基本層序

1　殿竹遺跡の地形

殿竹遺跡の遺跡範囲の形状は、長楕円形を呈し、北西 - 南東方向の長軸で 500 m、南西 - 北東方向の短軸では 100 ～ 130 mの面積約５万㎡ほどである。遺跡の南西側の赤堤通側が現地表面で標高 45 mほどと高く、北東側が標高 43 mほどとやや低い緩傾斜面に位置する。本調査地点は遺跡の南東部に位置し、赤堤通りに面した範囲にあたる。基盤となるローム層上面の標高でもおおむね南東側に向かい傾斜する地形が検出されている。遺跡の北東側の部分は現在は埋め立てられている。この部分には、松沢病院の屋外作業療法の一環で作られた加藤山と将軍池が位置する。山は作業を指導した加藤普佐次郎医師、池は作業に参加した自称「将軍」草原金次郎にちなんだもので、大正 15 年（1926）に完成した人工の山と池である。

なお、殿竹遺跡が位置する武蔵野台地は、地表から２～４m付近のローム層中に宙水があり、本田 2022 では将軍池もこの宙水まで掘り下げてできた池であるという。以下の基本層序で記述するいわゆる水漬きロームの原因の一つにこの宙水の影響がある可能性が高い。

この遺跡の範囲は緩斜面のため後述する北沢上水（用水）が遺跡のほぼ中央を、北西から南東へ向かい流下していたようである。自然勾配を利用した流下である。第２次調査の 15 号溝が北沢上水(用水）に該当する。

2　基本層序

本遺跡の基本層序については、すでに１～３次調査において述べられているように、ローム層がいわゆる水漬きで一部還元化しており、部分的に褐鉄鉱の集積が認められこと、富士黒色土は地点により良好に堆積する部分と大きく削平される部分がはっきりしているとされている。今回の調査でもほぼ同様の特徴が認められた。

第５図をもとに概述したい。

Ⅰ層　Ⅰ層は中世以降から現代までの堆積層で、３区の調査では大きくａ～ｅ層に５細分した。

Ⅰ a:10YR5/1 褐灰色土　ロームと黒色土の横縞状の互層、盛土。

Ⅰ b:10YR5/1 褐灰色土　ロームと黒色土の横縞状の互層、締まり強い、転圧あり。

Ⅰ c:10YR4/1 褐灰色土　畑の耕作土、全体に粗粒Φ５～ 50㎜大のロームブロックを含む。

Ⅰ d:10YR4/2 灰黄褐色土　畑の耕作土、中に黄褐色ローム土ブロックを 10–20% 含む。

Ⅰ e:10YR3/2 黒褐色土　畑の耕作土、Φ５～ 20mm 大のロームブロックを 20% 含む。

Ⅰａ層とⅠｂ層は松沢病院の移転以降の盛り土と思われる。Ⅰｃ・Ⅰｄ層は耕作土で、松沢病院が大正８年に移転後も患者治療の一環として、作業療法が導入されており、上層の耕作土は病院時代のものであろう。下層の耕作土はローム塊が多く、地山ロームを掘り返した土が混入されている。おそらく病院移転以前の畑の耕作土であろう。Ⅰｅ層は下層のⅡ層由来の土を含むことから、中世以降の耕作土であろう。

Ⅱ層　Ⅱ層はａ～ｄの４層に細分した。

Ⅱ a:10YR6/4 にぶい黄橙色土　粗粒で色調明るい（多摩丘陵のⅡＹ層相当）

Ⅱ b:10YR5/3 にぶい黄褐色土　富士黒色土相当（多摩丘陵の黄色のⅢ層相当）Φ 10 ～ 100㎜大の軟質黄褐色ブロックを斑状に含む。

Ⅱ c:10YR3/3 暗褐色土　黒味強く、細粒（多摩丘陵のⅢ層相当）

Ⅱ d:10YR4/4 褐色土　締まり弱い（Φ 10 ～ 30㎜大の、ローム塊含む）漸移層。

Ⅱ層は富士黒色土相当であり、大きくａ～ｄ層の４細分した。Ⅱａ層はやや明るみのある土で、多摩地域の基本土層ⅡＹ層相当で、縄文時代後期から弥生時代頃にかけての土層である。厚い堆積層ではなく、部分的に認められる。Ⅱｂ層は縄文時代相当の土でやや黄色みのある富士黒色土である。Ⅱｃ層は黒味の強いいわゆる富士黒色土層で、縄文時代前期から中期の土層である。Ⅱｄ層は黒味が少なくなる層で、草創期から早期にかけての土である。

Ⅲ層　Ⅲ層は細分を行わなかった。

Ⅲ :10YR5/6 黄褐色土～ 10YR6/8 明黄褐色土　ソフトローム、Φ５～ 100㎜大のⅣ H 土塊を含む。やや明るい。

Ⅲ層はソフトロームである。厚さ 15 ～ 35cm ほどの堆積で、層中に下層のⅣ層ブロックを含む。大小の擬礫状であり、近隣で大規模なⅣ層のハードロームが削られ出水や大規模な風倒木のような自然の天地返しがあり、標高の低い下方へ転がり堆積したものであろう。

Ⅳ層　Ⅳ層はハードローム層の最上部である。大きく上下のａ・ｂ２層に分けた。

Ⅳ a:10YR6/4 にぶい橙色土　締まり弱い。

Ⅳ b:10YR6/ ８明黄褐色土　やや締まりあり。

旧石器の試掘トレンチでは、いわゆる水漬きの影響で細分ができなかった地点もある。その土層は以下のとおりである。

Ⅳ :10YR6/8 明黄褐色土　赤黒のスコリアを含む、硬質ロームブロックを含み、主体は軟質のやや灰色味土。

Ⅴ層　Ⅴ層は第一黒色帯で上下のａ・ｂの２層に細分した。

Ⅴ a:2.5Y5/4 にぶい橙色土　やや黄色味にかける。

Ⅴ b:2.5Y6/2 灰黄色土　黄褐色土のブロックと灰黄色のブロックが斑状に混じる。

Ⅵ層　Ⅵ層は明るい色調で、層内に AT パミスを含む。

Ⅵ :2.5Y5/4 黄褐色土　やや明るい色調。

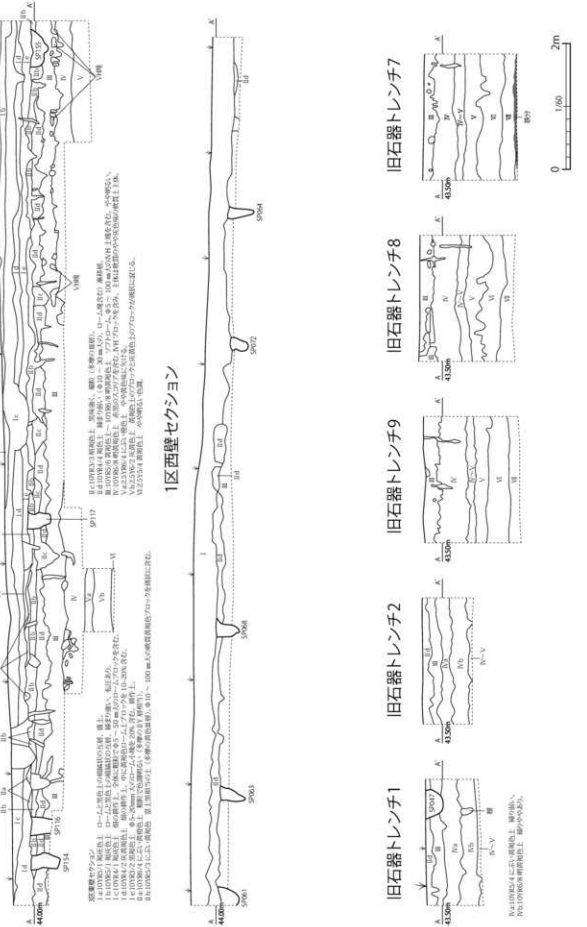
Ⅶ層は第２黒色帯である。2.5Y5/2 暗灰黄色土。

通常の武蔵野台地のⅦ層に比べて、黒味の少ない、あたかも脱色したような色調である。

掘削が可能であったのはⅦ層の上面まで（標高 42.2 m付近）であり、以下の層については今回の調査では明らかにしえなかった。２次調査の深掘調査では、Ⅸ層上面の高さは標高 41.7 mほどである。

なお、Ⅳ層付近から以下は１～３次調査の報告書でも水の影響を受けているという指摘があるが、今回の調査でも同様に鉄分の集積層や、色調の脱色、硬化度の減少などが認められた。

（山口・及川）


3区東壁セクション
1区西壁セクション
旧石器トレンチ1
旧石器トレンチ2
旧石器トレンチ9
旧石器トレンチ8
旧石器トレンチ7
0
1/60
2m

第５図　基本層序（1/60）

Ⅳ　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構と遺物は、次のとおりである。

旧石器時代　遺構：石器・礫集中部１箇所

遺物：縦長剥片、剥片、焼礫

縄文時代以降　遺構：ピット 198 基、土坑３基、溝状遺構３条、不明遺構３基

遺物：縄文土器（前期諸磯ｂ式、中期加曽利Ｅ式）、石器（石匙）

中・近世以降（陶磁器類、土器類、瓦、煉瓦）

1　旧石器時代

１）遺構

旧石器時代の文化層の有無確認のために、試掘トレンチを９箇所設定した（第７図、巻頭図版４- １、巻頭図版６）。１区で２か所、２区で２か所、３区で５ヶ所である。トレンチは２m四方のマスを基本とした。このうち８トレンチで黒曜石の縦長剥片を含む石器と礫の集中が認められた。そのため、周囲に調査範囲を拡張させた。その結果旧石器時代の調査面積は合計 64.75㎡となった。さらに、本調査前の試掘調査でもローム層中の調査が行われており、重複部分も含めて全体面積の 17.5％にあたる、66.75㎡が調査された。

遺物の出土はⅢ層（ソフトローム）下部のみであった。試掘トレンチは基本的に垂直掘り 1.5 mまでとしたため、調査区際以外はⅦ層まで掘り下げている。

A　石器・礫集中部部（第７・８図、巻頭図版５- １～５）

89・90-P 区の基本層序のⅢ層下部で、黒曜石片２点と礫 21 点を検出した。炭化物の集中等は認められなかった。集中する範囲は東西 6.0 m、南北 3.0 mの範囲から出土し、さらに細かく見ると西側の集中部１ａと東側の１ｂとに分かれる。１ａは 4.5 × 3.0m の範囲から、石器２点、礫 16 点が出土した。１ｂは１ａの東に 1.5 m離れて、５点の礫が出土した。

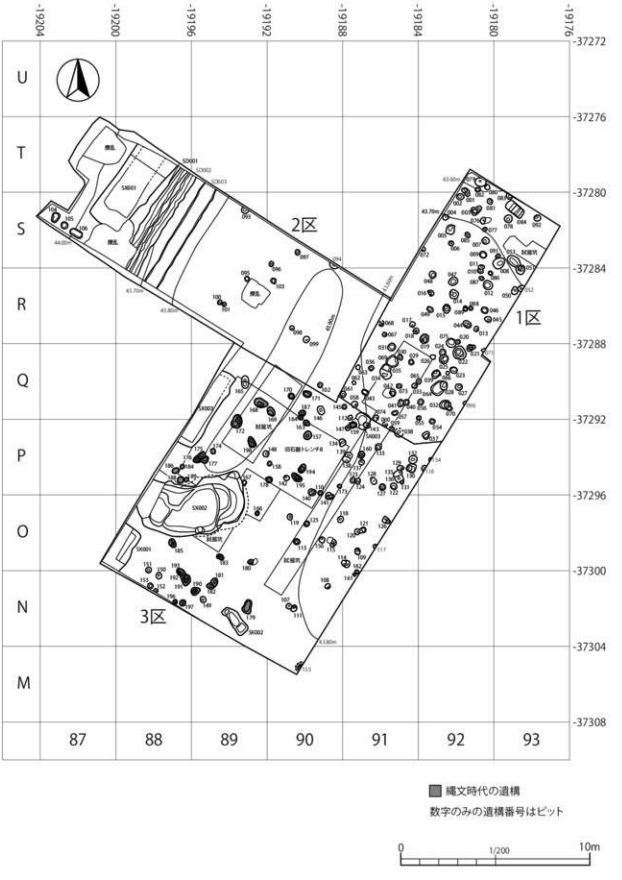
２）遺物

A　剥片（第９図、第３表、巻頭図版７左）

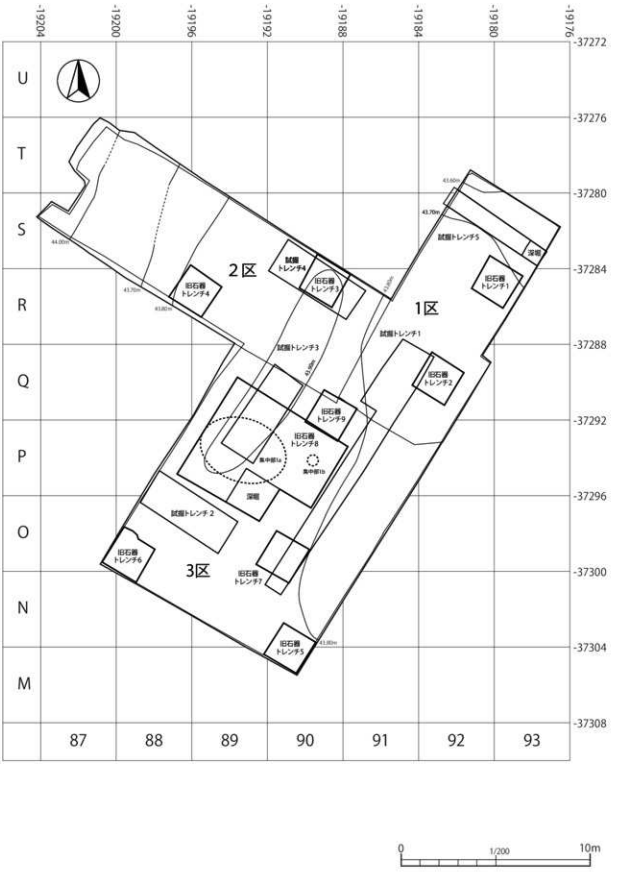
第９図１は縄文時代の遺構確認のために重機と人力で面下げ作業中にⅢ層のソフトローム下部から出土した。その後の旧石器調査で石器・礫集中部に含まれることが判明した。２は礫集中部調査中の検出である。

１（89-P　№ 208）は二次加工剥片である。黒色で透明度の高い黒曜石を用いる。縦長剥片を素材とするが、背面構成は主剥離面に対して横方向、逆方向であり、連続的に剥離されたというよりは偶発的に剥がれたものであろう。左側縁端部の裏面側に部分的に二次加工を施している。全体的に風化が進んでおり、稜線も顕著に磨耗している。運搬によるものか、埋没後の影響によるものか、判断は難しい。

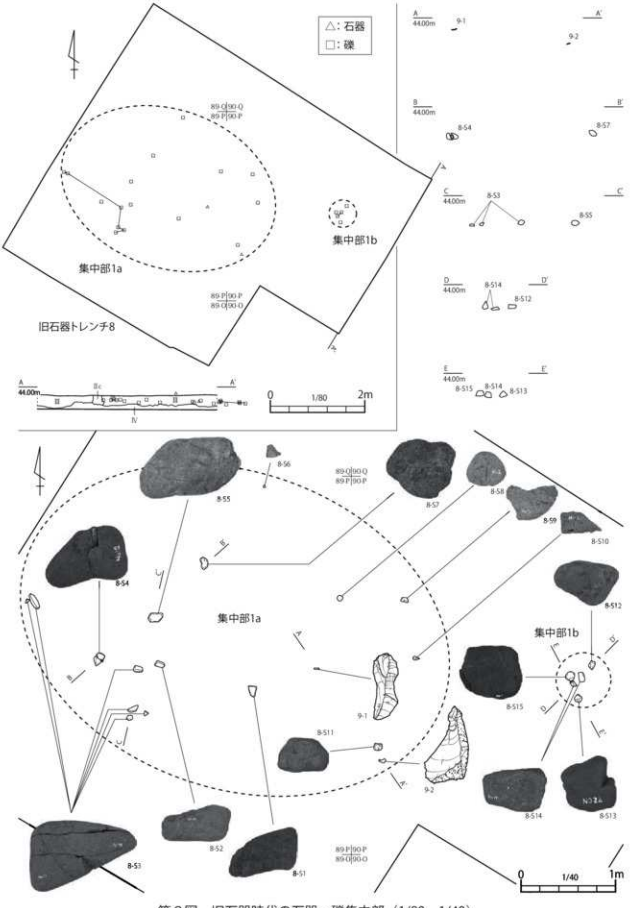
２（３区トレンチ８　№ 4）は黒曜石製の剥片である。石質は、黒色で透明度が高く、灰白色のかすんだ流理構造が入る。横長の剥片と思われ、左半部を折損している。右側縁側に亜角礫ないしは亜



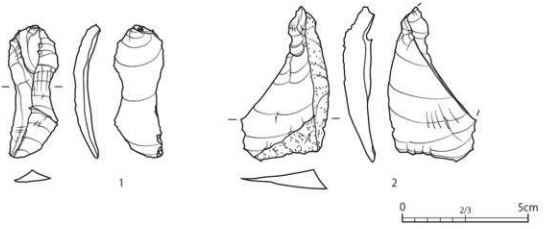
第６図　第４次調査全体図（1/200）



第７図　旧石器時代全体図（1/200）



第８図　旧石器時代の石器・礫集中部（1/80、1/40）



第９図　旧石器時代の遺物（2/3）

第３表　旧石器時代の石器・礫一覧表

掲載番号	遺物番号	出土位置	種別	時期	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量	石質	備考
8図S01	1	トレンチ8	礫	旧石器	12.24	6.45	4.8	575	赤チャート	被熱
8図S02	10	トレンチ8	礫	旧石器	11.21	4.81	5.84	440	砂岩	被熱
8図S03	11	トレンチ8	礫	旧石器	10.54	6.01	4.46	365	砂岩	被熱、№13、14、15、16、17と接合
8図S03	13	トレンチ8	礫	旧石器	5.25	3.38	2.26	40	砂岩	砕片、№11、14、15、16、17と接合
8図S03	14	トレンチ8	礫	旧石器	5.88	5.19	1.86	200	砂岩	砕片、№11、13、15、16、17と接合
8図S03	15	トレンチ8	礫	旧石器	11.6	4.98	2.89	50	砂岩	砕片、№11、13、14、16、17と接合
8図S03	16	トレンチ8	礫	旧石器	16.9	5.59	4.73	510	砂岩	砕片、№11、13、14、15、17と接合
8図S03	17	トレンチ8	礫	旧石器	4.56	2.32	2.28	30	砂岩	砕片、№11、13、14、15、16と接合
8図S04	12	トレンチ8	礫	旧石器	13.82	8.77	5.51	785	砂岩	砕片
8図S05	9	トレンチ8	礫	旧石器	15.6	9.1	5.46	1280	チャート	被熱
8図S06	7	トレンチ8	礫	旧石器	2.22	2.09	0.82	5	砂岩	砕片
8図S07	8	トレンチ8	礫	旧石器	10.43	9.02	4.77	610	チャート	被熱
8図S08	2	トレンチ8	礫	旧石器	6.24	5.55	2.55	110	砂岩	被熱
8図S09	3	トレンチ8	礫	旧石器	8	5.6	3.19	135	砂岩	被熱
8図S11	5	トレンチ8	礫	旧石器	7.91	5.41	3.25	200	砂岩？	被熱
8図S10	6	トレンチ8	礫	旧石器	6.66	3.64	2.81	75	砂岩	被熱
8図S12	18	トレンチ8	礫	旧石器	9.36	6.87	6.12	475	砂岩	砕片
8図S13	22	トレンチ8	礫	旧石器	8.42	7.45	5.14	475	砂岩	被熱
8図S14	19	トレンチ8	礫	旧石器	9.71	6.01	3.1	260	砂岩	被熱、№20と接合
8図S14	20	トレンチ8	礫	旧石器	8.93	7.01	4.61	290	砂岩	被熱、№19と接合
8図S15	21	トレンチ8	礫	旧石器	9.91	8.41	5.55	605	赤チャート	被熱
9図1	208	89-P	二次加工剥片	旧石器	5.18	2.01	0.61	5.79	黒曜石	器面風化
9図2	4	トレンチ8	剥片	旧石器	6.09	3.49	1.12	13.21	黒曜石	剥片

円礫面を残置する。　（尾田）

B　礫（第８図、第３表、巻頭図版５）

礫は 21 点出土した。いずれも被熱を伴う焼礫で、その出土状況は第８図の通りであり、このうち接合関係が認められたのは 11・13 ～ 17 である。接合の結果 1,635g の礫に復元された。

（及川）

2　縄文時代以降の遺構

1）ピット（第 10 ～ 20 図、図版 1 ～ 10-3）

ピットは総数 198 基検出された。計測値等は第 4 表にまとめた。土器が出土したのは P032、067、069、125、127、礫が出土したのは P029、031、034、069 である。

検出面　1・2 区のピットの検出面は 1 面で、3 区のみ上下の 2 面にわけた。3 区は南西部分を除くと堆積状況が良好であったため、上面で層序的には弥生時代以降から近現代までの遺構を確認、下面で縄文時代の遺構の確認を行った。

調査区の柱穴の密度から建物跡が復元可能と推定し、調査時の現地での検討、整理段階での図上の再検討を行った。しかし、結局建物跡の復元はできなかった。1 × 1 間の建物跡は復元できてもそれ以上の規模の梁行きや桁行などの柱筋の通る並びは認められなかった。調査範囲の問題もあるのかもしれない。一方柱穴の密度が高いわりに、対応する柱筋が見えないことは、建物跡ではなく、柵列などの構造物の一部である可能性も考えられた。しかし、柵列等と考えても並ぶ方向が確定できず、その復元も今後の調査を待つこととしたい。

柱穴の規模と覆土では、柱痕や抜き取り痕もなく浅いピットが主体である。柱痕跡と抜き取り痕などから、柱等の木材を埋設した可能性が高い柱穴は 70 基程度であり、抜き取り痕を残すものは少なく、柱が立ち腐れした柱穴がやや目立つ。

重複関係では、P028 は 064 より新、P032 は 070 より新、P034 は 035 より新、P126 は a・b に分かれ、a が b より新しい、P136 は P135・131 より古、P138 は 139 より新、P181 は 182 より新、P191 ～ 193 は、P192 → 193 → 191 の順に新しい。

P010 と 011、P020 と 075、P024 と 025、P040 と 041、P051 と 053、P175 と 177 は新旧不明であった。P143 と SK003 も新旧は不明であった。

2）溝（第 21 図、第 4 表、巻頭図版 2 - 2、図版 10- 4 ・ 5）

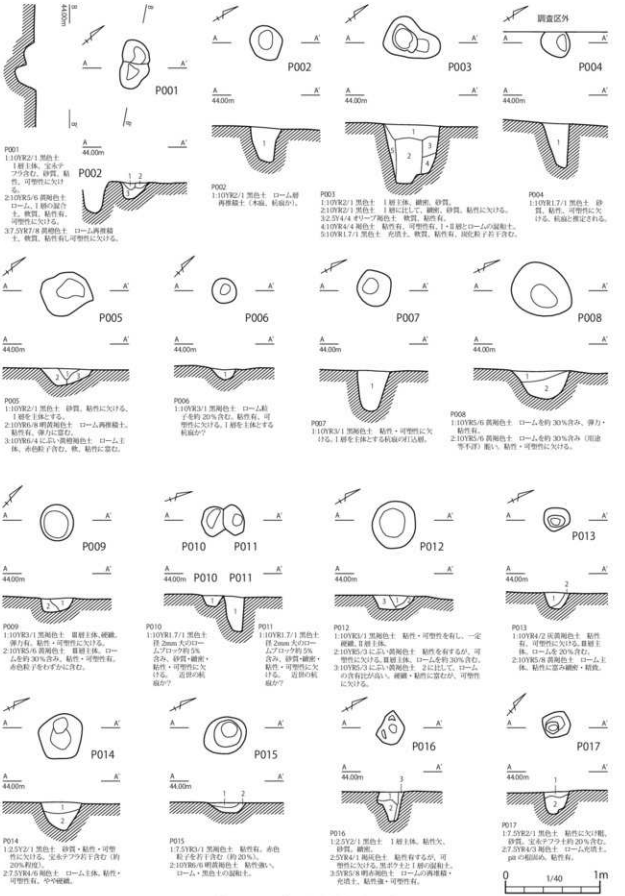
2 区の西端付近で 3 条の溝を検出した。これ以外に耕作に伴う南北方向の畝間溝多数を検出しているが、近現代であり今回の報告の対象とはしなかった

SD001

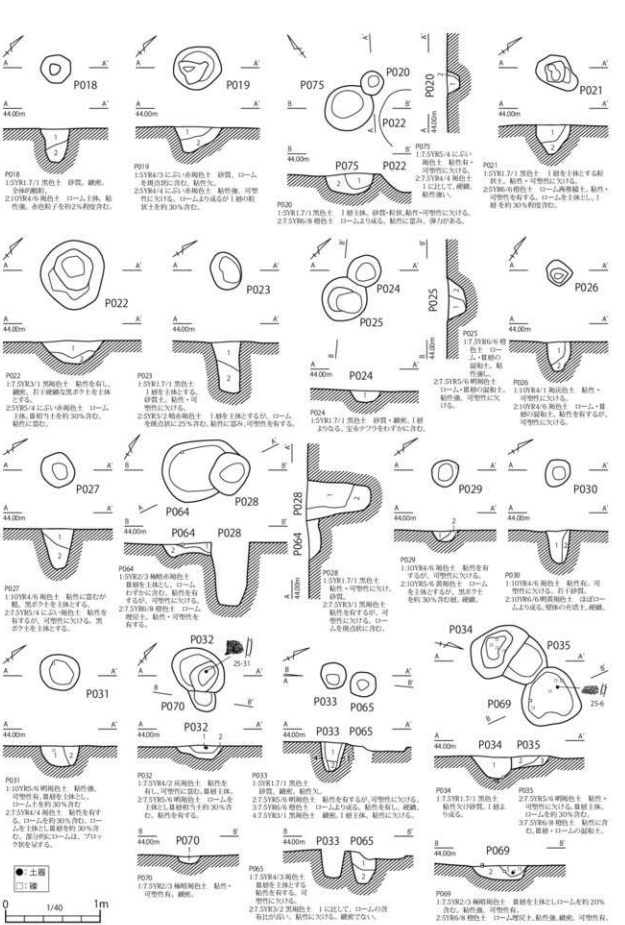
88-S・T 区に位置する。SD02 の西側に位置し、SD02 より古い。北東 - 南西方向に走る。幅は 45 ～ 55cm、深さは 50cm である。断面形は逆台形で底面は狭く幅 10 ～ 25cm である。堆積土は 2 層に分かれ上層の 1 層は黒味強く、下層の 1 層はローム土が目立つ。底面は鋤状の掘削具の痕跡がローム面に残る。標高はほぼ水平である。

SD002

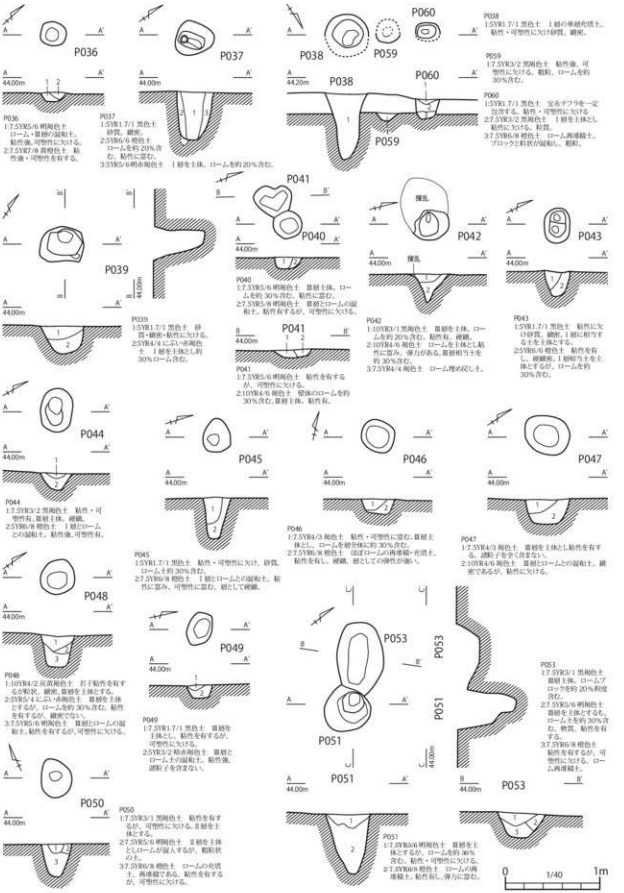
88-S・T 区に位置する。SD01 の東側に位置し、SD01 より新しい。北東 - 南西方向に走る。幅は 40 ～ 55cm、深さは 70 ～ 75cm である。断面形は逆台形で底面は狭く幅 10 ～ 25cm である。堆積土は 2 層に分かれ、上層の 1 層は黒味強くやや砂質、下層の 1 層はローム土が目立つがこれも砂質である。底面は鋤状の掘削具の痕跡がローム面に残る。底面の標高は南西で高く、北東にやや低い勾配である。全体に SD01 よりやや深く掘り込まれている。



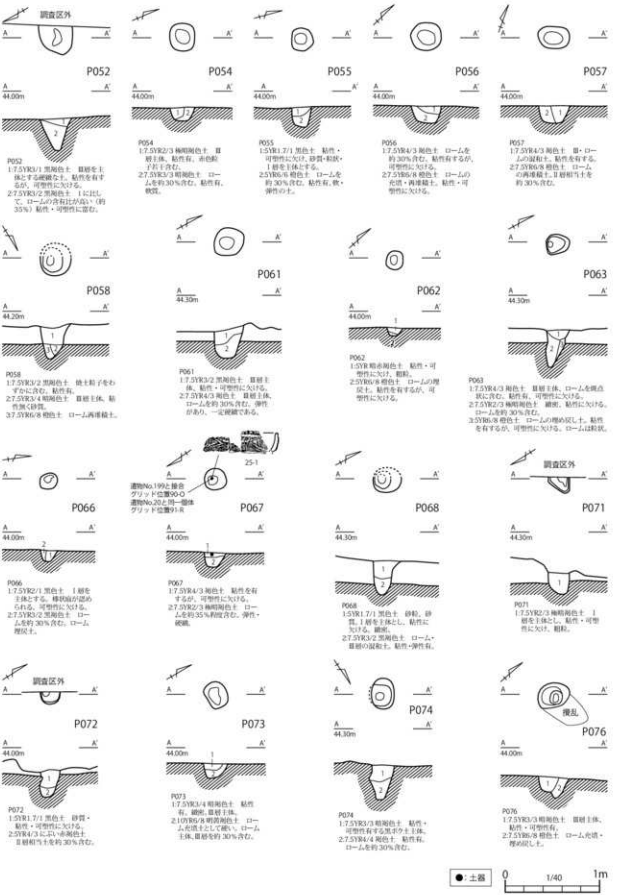
第10図　ピット（1）（1/40）



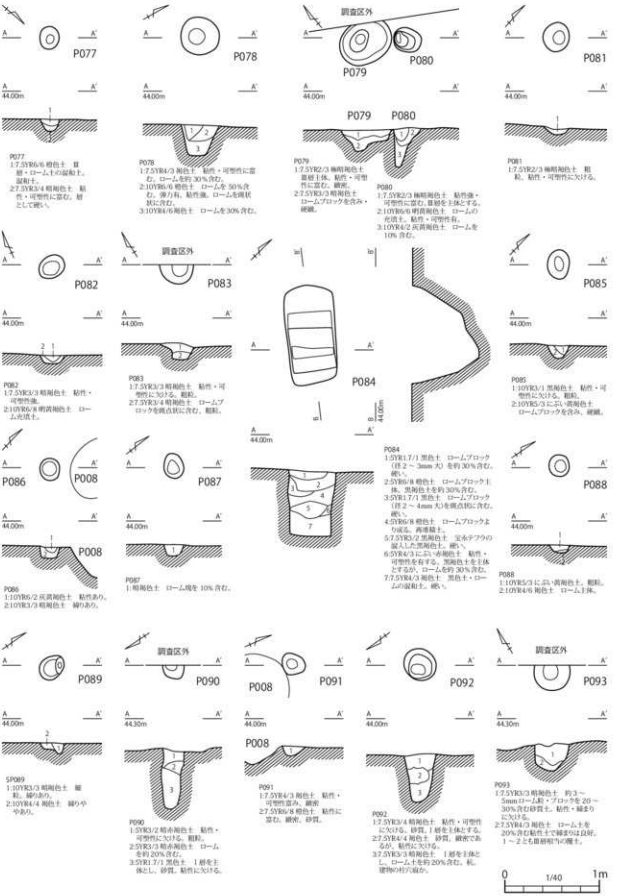
第 11 図　ピット（2）（1/40）



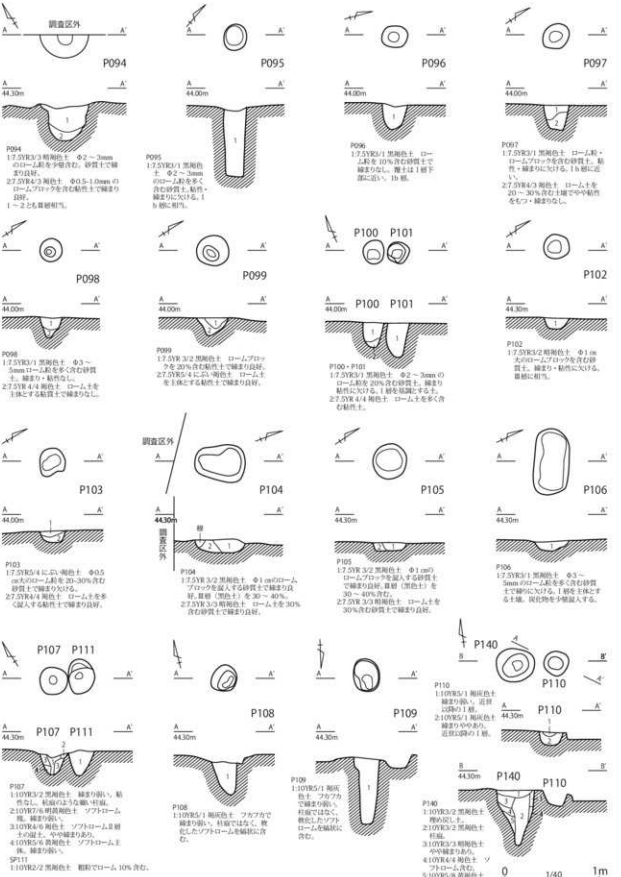
第12図 ピット（3）（1/40）



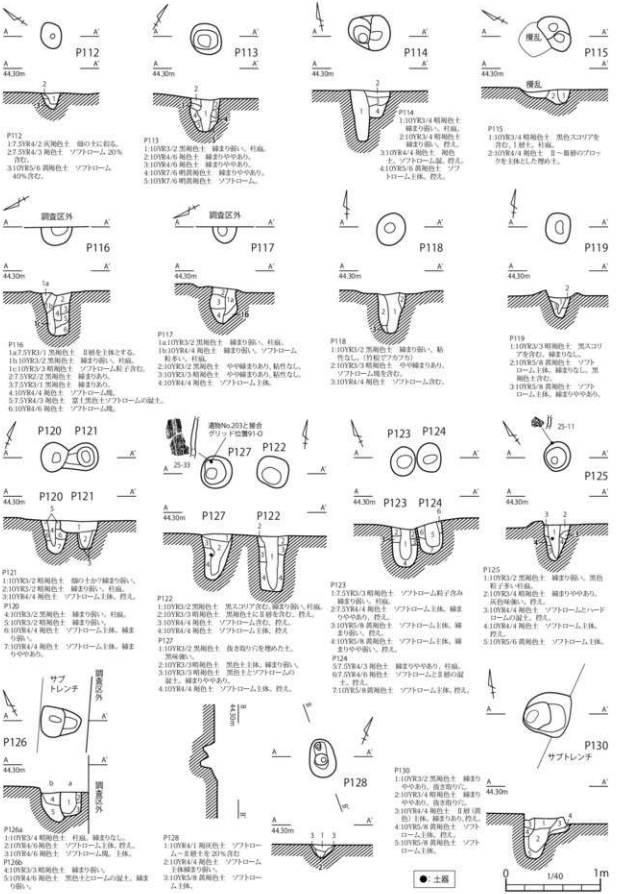
第13図　ピット（4）（1/40）



第 14 図　ピット（5）(1/40)



第 15 図　ピット（6）（1/40）



P112
1:7.5YR4/2 灰褐色土　砂の多じり石。
2:7.5YR4/3 褐色土　ソフトローム 20%含む。
3:10YR5/6 黄褐色土　ソフトローム 40%含む。

P113
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い、柱痕。
2:10YR4/6 褐色土　締まりややあり。
3:10YR4/6 褐色土　締まりややあり。
4:10YR7/6 明黄褐色土　締まりややあり。
5:10YR7/6 明黄褐色土　ソフトローム。

P114
1:10YR3/4 暗褐色土　締まり強い、柱痕。
2:10YR3/4 暗褐色土　締まり強い、焼土。
3:10YR4/4 褐色土　褐色土、ソフトローム混、焼土。
4:10YR5/6 黄褐色土　ソフトローム主体、焼土。

P115
1:10YR3/4 暗褐色土　黒色スコリアを含む、1 層と、柱痕。
2:10YR4/4 褐色土　3～4 層間のブロックを主体とした埋め土。

P116
1a:7.5YR3/3 黒褐色土　II 層を主体とする。
1b:10YR3/2 黒褐色土　締まり強い、柱痕。
1c:10YR3/3 暗褐色土　ソフトローム粒子含む。
2:7.5YR2/2 黒褐色土　締まりあり。
3:7.5YR3/1 黒褐色土　締まりあり。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム混。
5:7.5YR4/3 褐色土　富く黒色土ソフトロームの混土。
6:10YR4/6 褐色土　ソフトローム混。

P117
1a:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い、柱痕。
1b:10YR4/4 褐色土　締まり強い、ソフトローム粒多い、柱痕。
2:10YR3/2 黒褐色土　やや締まりあり、粘性なし。
3:10YR3/3 暗褐色土　やや締まりあり、粘性なし。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

P118
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり強い、粘性なし。(竹根ごつかケカラ)
2:10YR3/3 暗褐色土　やや締まりあり、ソフトローム混を含む。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム含む。

P119
1:10YR3/3 暗褐色土　黒スコリアを含む、締まりなし。
2:10YR5/6 黄褐色土　ソフトローム主体、締まりなし、黒褐色土含む。
3:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体、締まりややあり。

P120 P121
1:10YR3/2 暗褐色土　砂の十かず締まり強い。
2:10YR3/2 暗褐色土　締まり強い、柱痕。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、焼土。

P120
4:10YR3/2 黒褐色土　締まり強い、柱痕。
5:10YR3/2 暗褐色土　締まり強い。
6:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、締まり強い。
7:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、締まりややあり。

P122
1:10YR3/2 黒褐色土　黒スコリア含む、締まり強い、柱痕。
2:10YR3/2 暗褐色土　黒褐色土に II 層を含む、焼土。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム含む、焼土。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、焼土

P127
1:10YR3/2 黒褐色土　炭含南りの土焼めた土、黒褐色。
2:10YR3/3 暗褐色土　黒色土主体、締まり強い。
3:10YR3/3 暗褐色土　黒色土とソフトローム の混土、締まりややあり。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、焼土。

P123
1:7.5YR3/3 暗褐色土　ソフトローム粒子含み締まり強い、柱痕。
2:7.5YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、締まりややあり、焼土。
3:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体、締まり強い、焼土。
4:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体、締まりやや強い、焼土。

P124
5:7.5YR4/3 褐色土　締まりややあり、柱痕。
6:7.5YR4/6 褐色土　ソフトローム と II 層の混土、焼土。
7:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体、焼土。

P125
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり強い、黒色粒子多い柱痕。
2:10YR3/4 暗褐色土　締まりややあり、炭色味強い、焼土。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム とハードローム の混土、焼土。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、焼土。
5:10YR5/6 黄褐色土　ソフトローム主体。

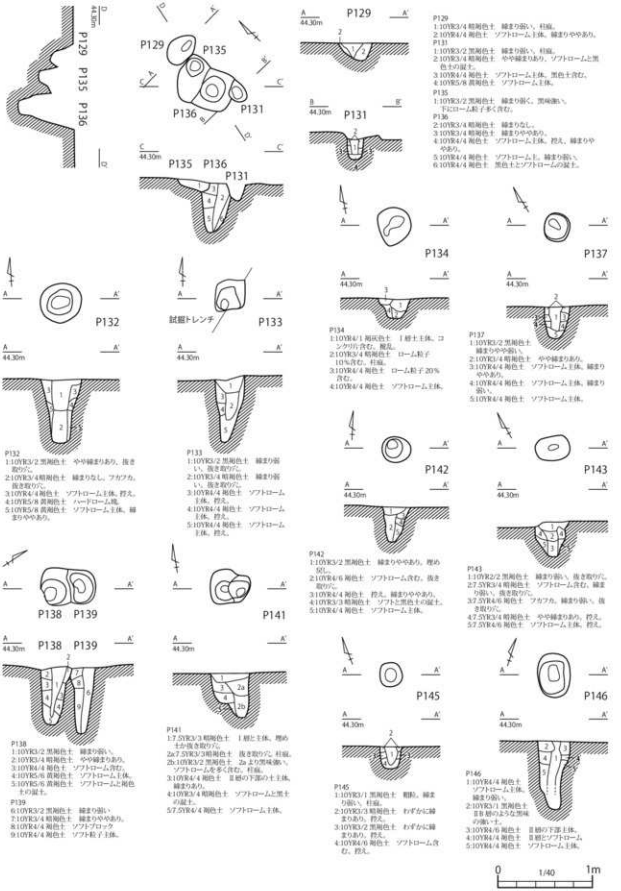
P126a
1:10YR3/4 暗褐色土　柱痕、締まりなし。
2:10YR4/6 褐色土　ソフトローム主体、焼土。
3:10YR4/6 褐色土　ソフトローム混、主体。

P126b
4:10YR3/3 暗褐色土　締まり強い。
5:10YR4/6 褐色土　黒色土とローム の混土、締まり強い。

P128
1:10YR4/1 黒灰色土　ソフトローム～II 層十を 20%含む
2:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体締まり強い。
3:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体。

P130
1:10YR3/2 黒褐色土　締まりややあり、炭含南りで。
2:10YR3/4 暗褐色土　締まりややあり、炭含南りで。
3:10YR4/4 褐色土　II 層(黄色)主体、締まりあり、焼土。
4:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体、焼土。
5:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体。

第 16 図　ピット（7）(1/40)



P129
1:10YR3/4 褐灰色土　締まり弱い、柱痕。
2:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、締まりややあり。
P131
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い、柱痕。
2:10YR3/4 褐灰色土　やや締まりあり、ソフトロームと黒色土の混土。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、黒色土含む。
4:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体。
P135
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱く、黒味強い。
下にコーム粘子多く含む。
P136
2:10YR3/4 褐灰色土　締まりなし。
3:10YR3/4 褐灰色土　締まりややあり。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体、焼土、締まりややあり。
5:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。締まり弱い。
6:10YR4/4 褐色土　黒色土とソフトロームの混土。

P134
1:10YR4/1 褐灰色土　1 層土主体。コンクリ含む。撹乱。
2:10YR3/4 褐灰色土　ローム粒子10%含む。柱痕。
3:10YR4/4 褐色土　ローム粒子20%含む。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

P137
1:10YR3/2 黒褐色土　締まりややあり。
2:10YR3/4 褐灰色土　やや締まりあり。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。締まりややあり。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。締まり弱い。
5:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

P132
1:5YR3/2 黒褐色土　やや締まりあり、抜き取りかく。
2:10YR3/4 褐灰色土　締まりなし。フカフカ。抜き取りかく。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。焼土。
4:10YR5/8 黄褐色土　ハードローム塊。
5:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム主体。締まりややあり。

P133
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い、抜き取りかく。
2:10YR3/4 褐灰色土　締まり弱い、抜き取りかく。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。焼土。
4:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。焼土。
5:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。焼土。

P142
1:10YR3/2 黒褐色土　締まりややあり。埋め石。
2:10YR4/6 褐色土　ソフトローム含む。抜き取りかく。
3:10YR4/4 褐色土　焼土。締まりややあり。
4:10YR3/3 暗褐色土　ソフトと黒色土の混土。
5:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

P143
1:10YR2/2 黒褐色土　締まり弱い。抜き取りかく。
2:7.5YR3/4 暗褐色土　ソフトローム含む。締まり弱い。抜き取りかく。
3:7.5YR4/6 褐色土　フカフカ。締まり弱い。抜き取りかく。
4:7.5YR3/4 暗褐色土　やや締まりあり。焼土。
5:7.5YR4/6 褐色土　ソフトローム主体。焼土。

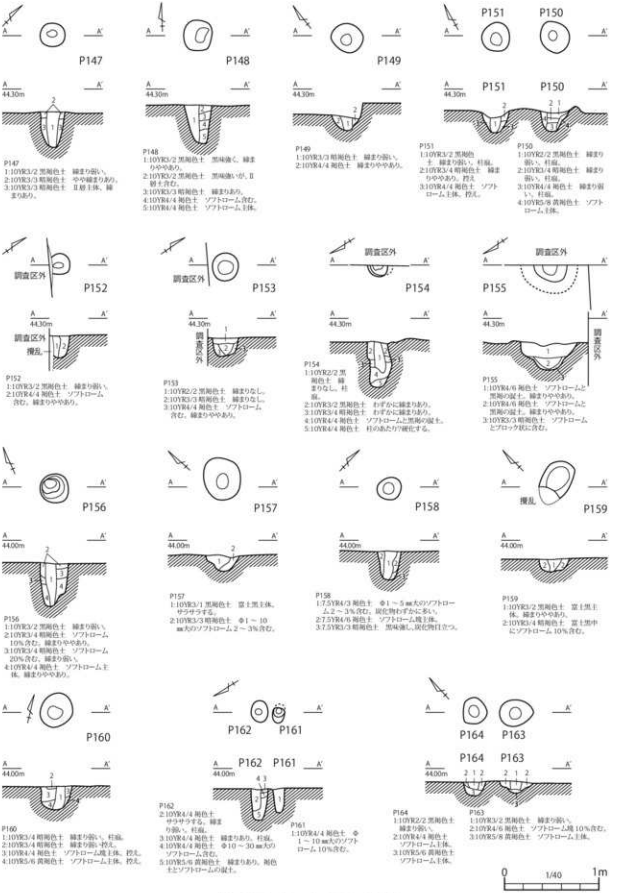
P138
1:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い。
2:10YR3/4 暗褐色土　やや締まりあり。
3:10YR4/4 褐色土　ソフトローム含む。
4:10YR5/6 黄褐色土　ソフトローム主体。
5:10YR5/8 黄褐色土　ソフトローム土と褐色土の混土。
P139
6:10YR3/2 黒褐色土　締まり弱い。
7:10YR3/4 暗褐色土　締まりややあり。
8:10YR4/4 褐色土　ソフトブロック
9:10YR4/4 褐色土　ソフト粒子主体。

P141
1:7.5YR3/3 暗褐色土　1 層土主体。埋め土か抜き取りかく。
2a:7.5YR3/3暗褐色土　抜き取りかく。柱痕。
2b:10YR3/2黒褐色土　2a より黒味強い。ソフトローム を多く含む。柱痕。
3:10YR4/4 褐色土　主穴の下部の土主体。締まりあり。
4:10YR3/4 暗褐色土　ソフトローム と黒土の混土。
5:7.5YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

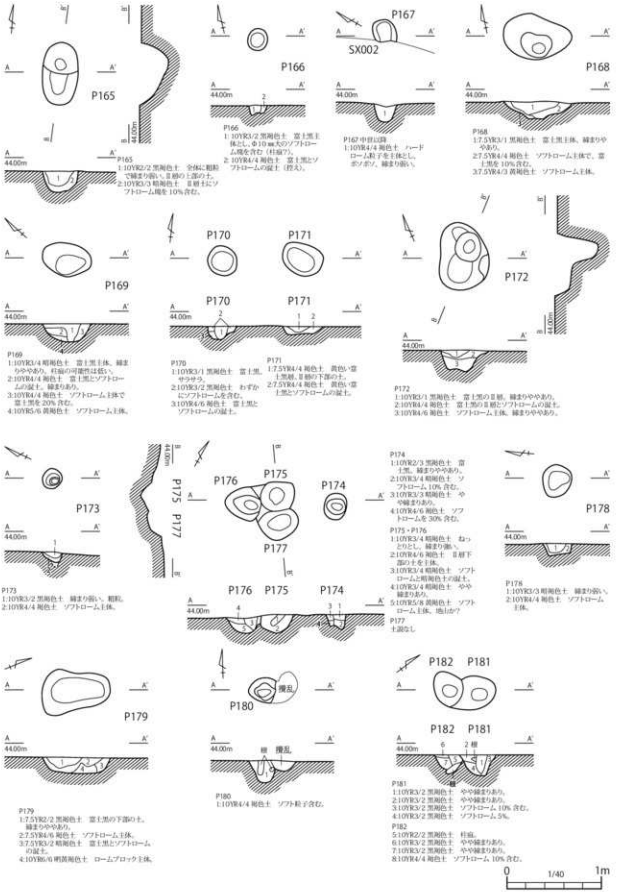
P145
1:10YR3/1 黒褐色土　粗粒。締まり弱い。柱痕。
2:10YR3/3 暗褐色土　わずかに締まりあり。焼土。
3:10YR3/2 黒褐色土　わずかに締まりあり。焼土。
4:10YR4/6 褐色土　ソフトローム含む。焼土。

P146
1:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。締まり弱い。
2:10YR3/1 黒褐色土　主穴 底のような黒味の強い土。
3:10YR4/6 褐色土　主穴の下部主体。
4:10YR4/4 褐色土　主穴にソフトローム
5:10YR4/4 褐色土　ソフトローム主体。

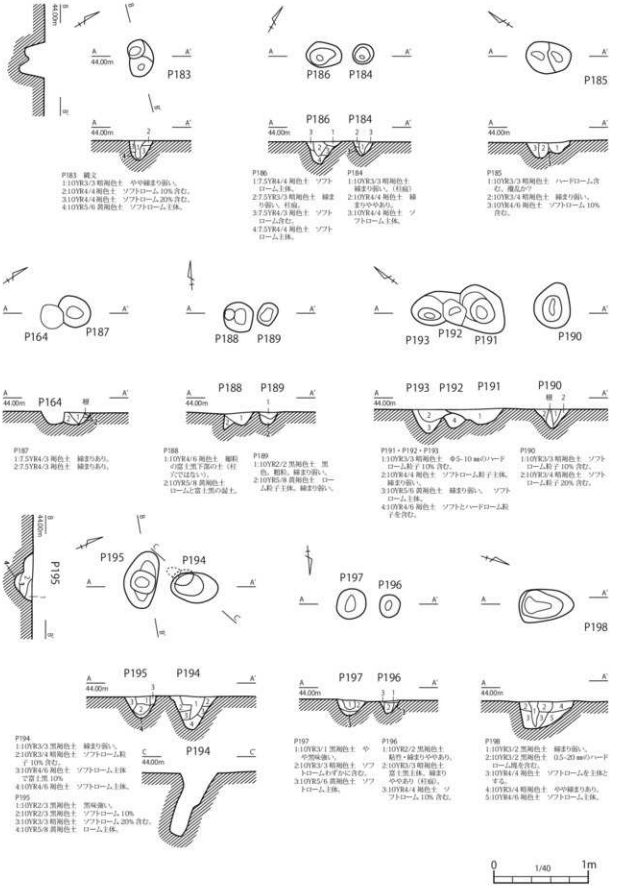
第17図　ピット（8）（1/40）



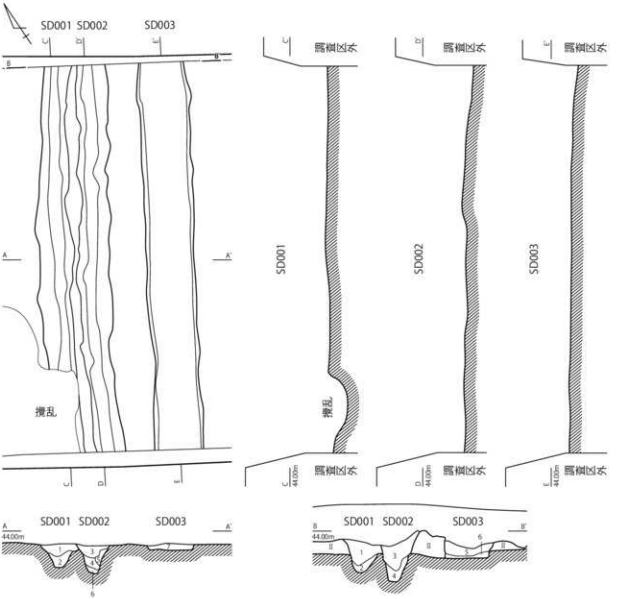
第18図　ピット（9）（1/40）



第 19 図　ピット（10）（1/40）



第 20 図　ピット（11）（1/40）



SD001
1:5YR3/1黒褐色土　Φ1～2mmのローム粒を20%混入する。粘性・締まりに欠け、土壌粒子は粗い。表土層を主体的に含む。
2:7.5YR4/2灰褐色土　ローム土を多く含む砂質土。締まりに欠ける。土壌には Φ2mm大のローム粒を20%混入。

SD002
3:7.5YR5/3にぶい褐色土　Φ1～2mmのローム粒子を30%混入する砂質土。締まりに欠ける。表土層を主体。
4:7.5YR3/3暗褐色土　Φ0.5cm大のロームブロックを多く混入する砂質土。締まりなし。
5:7.5YR5/6明褐色土　Φ1cm程のロームブロックを多く含む砂質土。締まりに欠ける。溝上部のウネの盛土か?
6:7.5YR3/4暗褐色土　Φ1～1.5cmのロームブロックを多く含む砂質土。締まりなし。Ⅳ層よりは色調は明るい。

SD003
7:7.5YR3/2黒褐色土　Φ2～3mmのローム粒子を20～30%混入する砂質土。締まりは弱い。土壌粒は全体に粗く、表土層に近い土質。

北壁セクション
SD001
1:7.5YR3/3暗褐色土　ローム粒を多く含む砂質土。締まりなし。Ⅰ層相当。
2:7.5YR5/4にぶい褐色土　Φ2～3cmのロームブロックを多く含む砂質土。締まりなし。

SD002
3:7.5YR3/2黒褐色土　Φ1～2mmのローム粒を含む砂質土。締まりを欠く。
4:7.5YR3/3暗褐色土　ローム土を多く混入する砂質土。締まりなし。

SD003
5:7.5YR3/2黒褐色土　Φ3～5mmローム粒、ブロックを10%含む砂質土。締まり、粘性なし。
6:7.5YR2/2黒褐色土　ロームブロックを多く含む砂質土。締まり、粘性なし。Ⅰb層に近い土。

0　1/60　2m

第 21 図　SD001 ～ 003（1/60）

SD003

88・89-R・S 区に位置する。SD02 の東側に位置し、ほぼ並行する。北東 - 南西方向に走る。幅は 70 ～ 90cm、深さは 20 ～ 25cm である。断面形は箱形で底面は幅 70cm でほぼ一定である。堆積土は 2 層に分かれ上層の 1 層は黒味強く、下層の 1 層はローム土が目立つ。底面の標高は南西で高く、北東にやや低い勾配である。

3）土坑（第 22 図、第 4 表、図版 10- 6 ～ 9）

SK001

87・88-O 区に位置する。調査区範囲の際に位置するため、壁面が崩壊する可能性があるため、調査区境までの掘削は見合わせた。そのため、規模等は不明で、現状で長軸 2.40 m以上、幅 1.00 m以上、深さは 1.10 mである。底面は平である。堆積土は I 層土主体である。

SK002

89-N 区に位置する。当初攪乱と判断し掘り下げた際に、動物骨の一部が出土したため、骨を残すように掘り上げたところ、骨の位置と土坑のプランが一致しないことが判明した。古い土坑と重なるように動物埋葬用の穴が掘られた可能性が高そうであったが明確にはできなかった。

平面形は不整隅丸長方形で、規模は長軸 1.65 m、短軸 0.60 m、深さ 0.35 mである。底面はわずかに二段掘り状である。堆積土は記録しなかったが、ローム塊を主体としていた。

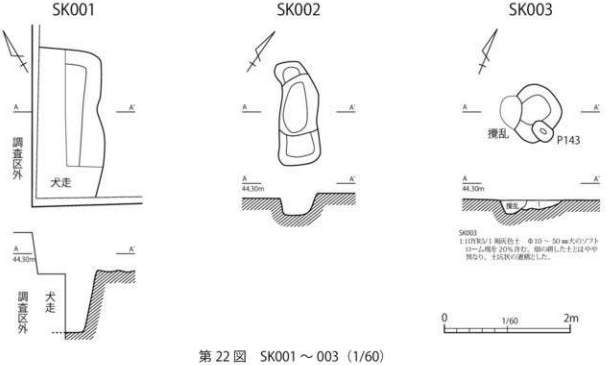
SK003

91-P・Q 区に位置する。P 143 より新しい。平面隅丸方形で、規模は 0.95 × 0.90 m、深さは 0.10 m、断面形は浅い皿状である。堆積土は I 層土主体である。

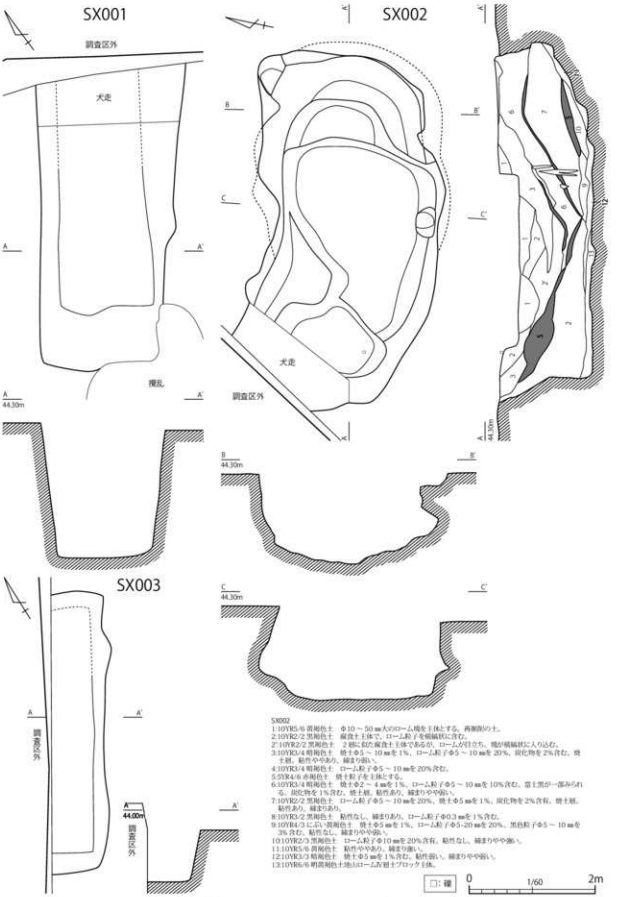
4）不明遺構（第 23 図、第 4 表、図版 10-10 ～ 15）

SX001

87・88-S・T 区に位置する。調査区範囲の際に位置し、北東側は調査区外に延びていく。規模は、



第 22 図　SK001 ～ 003（1/60）



第 23 図　SX001 ～ 003（1/60）

第４表　第４次調査検出遺構一覧表（1）

遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	時間	備考
P001	92·S·T	52	30	22	N-43°-W	第10期	
P002	92·S	39	33	40	N-89°-W	第10期	
P003	92·S	60	42	66	N-52°-E	第10期	
P004	92·S	33	29	51	N-88°-E	第10期	
P005	92·S	56	49	20	N-53°-E	第10期	
P006	92·S	27	26	13	N-87°-W	第10期	
P007	92·S	40	37	43	N-87°-W	第10期	
P008	92·93·R·S	66	54	35	N-55°-E	第10期	
P009	92·S	38	35	20	N-46°-W	第10期	
P010	92·R	31	27	13	N-48°-W	第10期	P011と重複不明
P011	92·R·S	33	23	38	N-79°-W	第10期	P010と重複不明
P012	92·R	50	46	15	N-53°-W	第10期	
P013	92·R	28	25	17	N-27°-E	第10期	
P014	92·R	51	47	33	N-38°-W	第10期	
P015	92·R	48	39	11	N-0°-E	第10期	
P016	92·R	34	25	35	N-30°-W	第10期	
P017	91·R	28	26	25	N-31°-E	第10期	
P018	91·92·R	32	30	39	N-33°-E	第11期	
P019	92·R	50	45	31	N-19°-E	第11期	
P020	92·Q·R	25	24	17	N-42°-E	第11期	P075と重複不明
P021	92·Q	47	33	34	N-63°-E	第11期	
P022	92·Q	72	65	25	N-28°-W	第11期	
P023	92·Q	40	32	57	N-70°-W	第11期	
P024	92·Q	34	(34)	12	N-9°-W	第11期	P025と重複不明
P025	92·Q	46	49	25	N-25°-E	第11期	P024と重複不明
P026	92·Q	26	24	31	N-84°-W	第11期	
P027	92·Q	37	33	45	N-88°-E	第11期	
P028	92·Q	44	37	67	N-2°-W	第11期	P064より新
P029	91·Q	30	28	12	N-7°-E	第11期	礎1
P030	91·Q	31	26	35	N-20°-W	第11期	
P031	91·Q	42	37	22	N-50°-E	第11期	礎1
P032	92·Q	60	47	16	N-82°-E	第11期	縄文1 P070より新
P033	91·Q	27	27	30	N-68°-W	第11期	
P034	91·Q	67	47	31	N-43°-W	第11期	礎4　P035より新
P035	91·Q	(36)	50	10	N-18°-E	第11期	P034より古
P036	91·Q	27	25	10	N-56°-E	第12期	
P037	92·P	39	37	55	N-57°-E	第12期	
P038	91·P	46	(45)	70	N-59°-W	第12期	
P039	92·Q	47	38	55	N-54°-E	第12期	
P040	91·Q	30	28	13	N-5°-W	第12期	P041と重複不明
P041	91·Q	39	35	9	N-56°-E	第12期	P040と重複不明
P042	91·Q	41	(33)	31	N-12°-W	第12期	
P043	91·Q	37	27	30	N-65°-W	第12期	
P044	92·R	46	34	21	N-51°-W	第12期	
P045	92·R	36	29	43	N-77°-W	第12期	
P046	92·R	36	32	15	N-76°-W	第12期	
P047	92·R	50	41	29	N-56°-E	第12期	
P048	92·R	38	36	40	N-40°-W	第12期	
P049	92·R	36	25	14	N-60°-W	第12期	
P050	93·R	42	34	34	N-8°-E	第12期	
P051	93·R·S	50	49	65	N-25°-E	第12期	P053と重複不明
P052	93·R	(34)	36	34	N-72°-W	第13期	
P053	93·S	(77)	50	26	N-51°-W	第12期	P051と重複不明
P054	92·P·Q	29	26	14	N-66°-W	第13期	
P055	91·92·P·Q	24	23	25	N-73°-W	第13期	
P056	91·92·Q	33	29	19	N-47°-E	第13期	
P057	91·Q	34	23	18	N-73°-E	第13期	
P058	91·Q	(35)	33	38	N-34°-E	第13期	
P059	91·P	25	(25)	10	N-57°-W	第12期	
P060	91·P	26	(19)	22	N-57°-W	第12期	
P061	90·91·Q	35	30	34	N-5°-W	第13期	
P062	91·Q	20	18	10	N-37°-W	第13期	
P063	91·Q	25	21	40	N-24°-E	第13期	
P064	92·Q	83	63	21	N-50°-E	第11期	P028より古
P065	91·92·Q	30	28	34	N-5°-W	第11期	
P066	92·Q	20	17	16	N-26°-W	第13期	
P067	91·R	24	23	16	N-25°-W	第13期	縄文1
P068	91·R	30	(26)	36	N-26°-E	第13期	
P069	91·Q	63	60	16	N-59°-W	第11期	縄文1、礎5
P070	92·Q	(27)	26	9	N-56°-W	第11期	P032より古
P071	92·Q	(23)	21	24	N-89°-W	第13期	
P072	92·S	(18)	22	28	N-58°-W	第13期	
P073	91·Q	28	23	16	N-86°-W	第13期	
P074	91·P·Q	32	24	37	N-33°-E	第13期	
P075	92·Q·R	53	47	22	N-68°-W	第11期	P020と重複不明
P076	92·S	33	27	24	N-43°-E	第13期	
P077	92·S	24	20	13	N-53°-E	第14期	
P078	93·S	41	40	33	N-40°-E	第14期	
P079	92·T	58	45	27	N-82°-W	第14期	
P080	92·T	30	25	41	N-34°-W	第14期	
P081	92·S	31	28	12	N-32°-W	第14期	
P082	92·T	29	23	9	N-77°-E	第14期	
P083	93·S	36	(21)	16	N-58°-W	第14期	
P084	93·S	106	53	14	N-50°-W	第14期	
P085	92·S	31	23	17	N-48°-W	第14期	
P086	92·R	23	21	15	N-46°-W	第14期	
P087	92·R	27	21	13	N-67°-W	第14期	
P088	92·R	23	21	12	N-59°-W	第14期	
P089	92·R	29	23	14	N-7°-W	第14期	
P090	92·Q	(14)	23	64	N-58°-W	第14期	
P091	93·S	26	23	10	N-53°-E	第14期	
P092	93·S	36	32	51	N-72°-E	第14期	
P093	89·S	(28)	38	29	N-30°-E	第14期	
P094	90·R·S	(50)	(20)	38	N-58°-W	第15期	
P095	89·R	28	24	75	N-36°-W	第15期	
P096	90·S	28	24	28	N-5°-W	第15期	
P097	90·S	31	26	28	N-5°-W	第15期	
P098	90·R	25	23	23	N-46°-W	第15期	
P099	90·R	34	33	19	N-58°-E	第15期	
P100	89·R	26	23	28	N-44°-E	第15期	
P101	89·R	22	22	38	N-43°-W	第15期	
P102	90·Q	27	26	13	N-30°-E	第15期	
P103	90·R	32	29	14	N-33°-W	第15期	
P104	87·S	53	40	13	N-30°-E	第15期	
P105	87·S	38	35	9	N-47°-W	第15期	
P106	87·S	70	38	12	N-59°-W	第15期	
P107	90·N	30	30	26	N-14°-W	第15期	
P108	90·N	29	26	41	N-47°-E	第15期	
P109	91·O	35	28	77	N-4°-W	第15期	
P110	90·O·P	25	25	15	N-33°-E	第15期	
P111	90·N	37	28	27	N-27°-E	第15期	
P112	91·P·Q	29	23	19	N-31°-E	第16期	
P113	90·O	36	32	37	N-78°-W	第16期	
P114	90·91·O	45	38	55	N-68°-W	第16期	
P115	90·O	42	(30)	24	N-16°-E	第16期	
P116	92·P	(19)	33	46	N-59°-W	第16期	
P117	91·O	17	25	39	N-58°-W	第16期	
P118	90·91·O	35	30	43	N-27°-E	第16期	
P119	90·O	32	26	32	N-2°-E	第16期	
P120	91·O	31	28	40	N-26°-E	第16期	
P121	91·O	(40)	29	35	N-68°-E	第16期	
P122	91·P	34	31	60	N-73°-W	第16期	
P123	91·P	31	26	45	N-30°-E	第16期	
P124	91·P	31	25	40	N-12°-E	第16期	
P125	90·O	32	28	42	N-37°-E	第16期	縄文1
P126	91·O	43	33	38	N-61°-W	第16期	126a新 126b古
P127	91·P	34	32	50	N-5°-E	第16期	縄文1
P128	91·P	41	28	19	N-30°-W	第16期	
P129	91·P	37	25	25	N-80°-E	第17期	
P130	91·P	(48)	46	49	N-70°-W	第16期	
P131	91·P	(23)	18	27	N-2°-E	第17期	P136より新
P132	91·P	45	41	67	N-80°-E	第17期	
P133	91·P	(33)	(33)	74	N-88°-E	第17期	
P134	90·91·P	39	34	21	N-5°-W	第17期	
P135	91·P	51	(31)	36	N-62°-E	第17期	P136より新
P136	91·P	43	(39)	60	N-61°-E	第17期	P131、135より古
P137	91·P	30	27	36	N-41°-E	第17期	
P138	90·91·P	(40)	(33)	58	N-51°-W	第17期	P139より新

第４表　第４次調査検出遺構一覧表（２）

遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	掛図	備考
P139	91-P	(36)	(32)	70	N-52°-W	第17図	P138より古
P140	90-O・P	40	35	59	N-82°-W	第15図	
P141	90-O・P	43	38	50	N-75°-W	第17図	
P142	90-P	31	27	38	N-86°-W	第17図	
P143	91-P	36	26	39	N-68°-W	第17図	SK03重複不明
P144	-	-	-	-	-	-	欠番
P145	90・91-Q	25	24	29	N-13°-E	第17図	
P146	90-Q	47	34	73	N-21°-W	第18図	
P147	91-P	26	25	39	N-46°-E	第18図	
P148	89・90-P	32	30	41	N-8°-E	第18図	
P149	89-N	33	29	33	N-24°-W	第18図	
P150	88-N	35	30	26	N-8°-E	第18図	
P151	88-N・O	31	30	26	N-59°-E	第18図	
P152	88-N	(19)	22	23	N-30°-E	第18図	
P153	88-N	29	27	24	N-60°-W	第18図	
P154	92-P	21	(11)	49	N-32°-E	第18図	
P155	90-M	60	28	31	N-31°-E	第18図	
P156	90-O	32	31	47	N-17°-W	第18図	
P157	90-P	45	39	25	N-36°-E	第18図	
P158	90-P	27	23	32	N-20°-E	第18図	
P159	91-P	37	31	14	N-74°-E	第18図	
P160	91-P	37	33	25	N-16°-E	第18図	
P161	91-N	16	13	33	N-50°-W	第18図	
P162	91-N・O	22	18	24	N-57°-W	第18図	
P163	90-P	36	28	14	N-55°-W	第18図	
P164	90-P・Q	28	26	16	N-23°-E	第18図	
P165	89-Q	66	38	32	N-0°-E	第19図	
P166	89-O	23	21	13	N-30°-E	第19図	
P167	89-P	26	24	22	N-43°-E	第19図	
P168	89・90-Q	73	49	23	N-76°-W	第19図	
P169	90-Q	53	35	23	N-30°-W	第19図	
P170	90-Q	33	30	16	N-58°-W	第19図	
P171	90-Q	44	33	13	N-75°-W	第19図	
P172	89-P・Q	72	56	47	N-10°-E	第19図	
P173	90-P	22	20	15	N-76°-W	第19図	
P174	89-P	29	23	28	N-17°-W	第19図	
P175	89-P	(36)	31	24	N-56°-E	第19図	
P176	89-P	(38)	35	17	N-72°-E	第19図	
P177	89-P	42	(32)	18	N-40°-E	第19図	
P178	89・90-P	35	31	16	N-79°-W	第19図	
P179	89-N	73	48	19	N-16°-E	第19図	
P180	89-O	(29)	27	24	N-88°-W	第19図	
P181	89-N	(51)	36	25	N-26°-E	第19図	P182より新
P182	89-N	(38)	32	18	N-89°-W	第19図	P181より古
P183	89-O	39	26	30	N-66°-W	第20図	
P184	88-P	23	21	17	N-25°-E	第20図	
P185	88-O	48	34	18	N-33°-W	第20図	
P186	88-P	38	27	26	N-67°-E	第20図	
P187	90-Q	36	31	13	N-63°-E	第20図	
P188	88-P	34	32	16	N-41°-W	第20図	
P189	88-P	24	19	13	N-32°-E	第20図	
P190	88・89-N	48	39	22	N-65°-E	第20図	
P191	88-N	59	(50)	16	N-13°-E	第20図	P192・193より新
P192	88-N	(31)	(24)	20	N-25°-E	第20図	P191・193より古
P193	88-N・O	(55)	35	26	N-48°-W	第20図	P191より古P192より新
P194	90-P	50	32	21	N-31°-E	第20図	
P195	90-P	61	34	68	N-55°-W	第20図	
P196	88-N	24	22	15	N-24°-E	第20図	
P197	88-N	33	31	17	N-31°-E	第20図	
P198	89-P	58	35	31	N-23°-W	第20図	

遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	掛図	備考
SD001	88-R・S・T	(612)	88	45	N-32°-E	第21図	SD002より古
SD002	88・89-R・S・T	(609)	(68)	55.5	N-32°-E	第21図	SD001より新
SD003	88・89-R・S・T	609	82	17	N-32°-E	第21図	

遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	掛図	備考
SK001	87・88-N・O	(239)	(117)	108	N-33°-E	第22図	
SK002	89-N	164	73	36	N-40°-W	第22図	イヌ埋葬？
SK003	91-P・Q	93	(73)	26	N-18°-W	第22図	P143と重複不明

遺構名	グリッド	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	長軸方向	掛図	備考
SX001	87・88-S・T	(490)	237	222	N-37°-E	第23図	
SX002	88・89-O・P	(570)	(318)	161	N-85°-E	第23図	
SX003	88・89-P・Q	449	(104)	100	N-31°-E	第23図	

現状で長軸 4.70 m以上、幅 2.00 ～ 2.25 m、深さは 2.20 mである。底面は平である。堆積土は I 層土主体である。底面付近には焼土や炭化物が堆積し、焼却が行われているようである。

SX002

88・89-O・P 区に位置する。遺構確認段階で中世の地下式坑の天井が落ちた後、ごみ穴に転用された可能性が高いと想定して調査を開始した。壁面がオーバーハングするなどし、その可能性は高いと思われたが、覆土上層から出土した近世瓦が床面からも出土することから、地下式坑とは言えず、土取穴であろうと判断した。

平面形は不整隅丸長方形で、西壁は調査区外に延びている。この部分は安全のため壁際までは調査せず段を残した。その断面確認では、本跡をさらに切り込む遺構が認められていたが、この遺構も壁際のため調査していない。

遺構の規模は、現状で長軸 5.70 m、幅は中央付近で 3.00 m、深さは 1.50 mである。底面は中央付近は平坦であるが、両端付近や壁際では段差が認められ、壁面はオーバーハングする部分もあり、また壁面が崩落する部分もある。

堆積土は基本的には人為的な埋め戻しであるが、瓦などのごみを投棄しながら埋めていたものであろう。土層は 13 層に分かれ、5 層が焼土や炭化材を含む層で、同一番号の土層としたが堆積時期は

異なる。他の土層は腐食土とローム塊の混土で、その割合による分層である。基本は窪地内に不定方向から土砂が投棄されている。火災に伴うゴミ処理と土取を兼ねた穴であろう。

SX003

88・89-P・Q 区に位置する。調査区範囲の際に位置し、北西側は調査区外に延びていく。規模は、長軸 4.40 m、幅は現状で 0.90 m、深さは 0.90 mである。底面は平坦である。堆積土は I 層土主体である。陶芸用の粘土や網などが投棄されている。ごみ穴として掘られたものであろうか。調査以前に窪みとなっていた。（及川）

3　縄文時代以降の遺物

出土位置を３次元で計測したものについては、第 24 図に出土位置を示した。小礫が集中する１区の南部付近に、縄文前期と中期の土器片がやや集中するが、接合例は少なく、復元率も極めて低い。

１）縄文時代の土器と石器

A　縄文土器（第 25 図１～ 45、第５表、巻頭図版８）

縄文土器は 45 点出土した。第 25 図１～ 15 は縄文時代前期諸磯 b 式土器である。１・２は深鉢の口縁部片である。胴部より内湾気味に立ちあがる口縁部を有し、口唇部は瘤状の粘土粒を貼付する。外面は２本一単位の浮線文を施し、浮線文上には斜位のキザミを施す。３～ 15 は胴部から底部にかけての破片である。５は胴部径推定で上端は 18cm、下端は推定で 14cm、10 は底部で底径は推定で 8.4cm である。

第 25 図 16 ～ 45 は中期の土器である。無文で細別が不明のものもあるが、ほぼ加曽利Ｅ３式土器で占められている。16 ～ 28 は沈線による横位波状文や懸垂文を施すものである。16 は口縁部片で口唇部は肥厚して丸く収める。外面に単節縄文 LR を斜位に施文する。17 ～ 24・26・27 は縄文を地紋とし縦位の懸垂文を施す。17・18・20 は２本一単位の懸垂文である。25・28 は蕨手状懸垂文である。29 は無節 R 縦位施文、30 は単節縄文 LR を縦位施文する。

第 25 図 31 ～ 39 は地紋に条線文を持つもので、31 ～ 35 は縦位の波状条線文、36 ～ 39 は縦位直線の条線文である。33 は２本一単位の縦位懸垂文、34 は横位の沈線文を施す。40・41 は無文の口縁部片で加曽利Ｅ式であろう。42 は斜位の集合沈線をもち、加曽利Ｅ３式かと思われる。43 ～ 45 は無文であるが、胎土等からみて中期の土器であろう。（大綱・及川）

B　石器（第 25 図 46、巻頭図版７右）

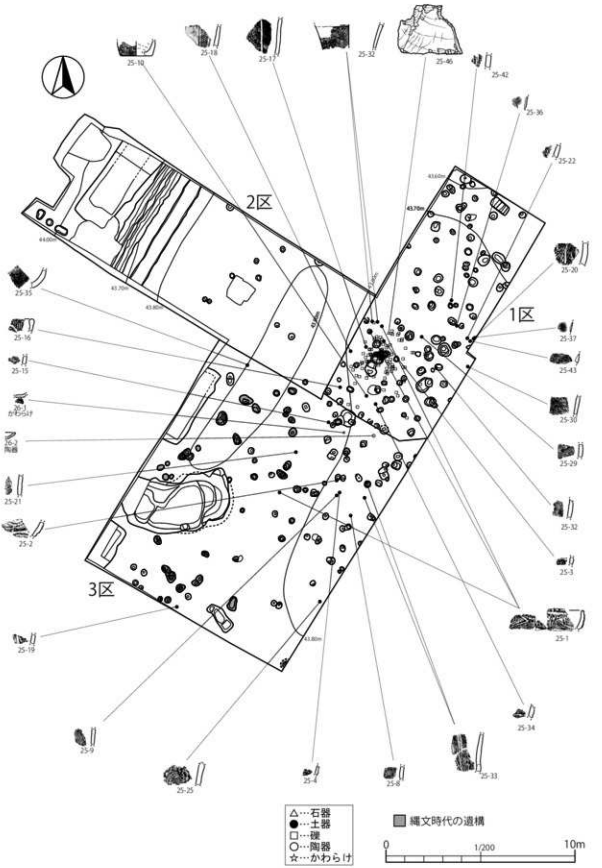
第 25 図 46 は石匙である。暗緑灰色で、黒色の筋が入るチャートを用いる。横長剥片を素材とし、右側縁の一端を折り取って成形している。つまみは刃部の方向に対して直交する。刃部は右側を中心に表裏面に加工を施しており、中央部はやや抉れている。刃部角は、加工のある範囲で 10 ～ 12 度、無加工の範囲で６～８度である。長さ 4.11cm、幅 5.30cm、厚さ 1.09cm、重さ 18.95g である。（尾田）

２）中世以降の遺物

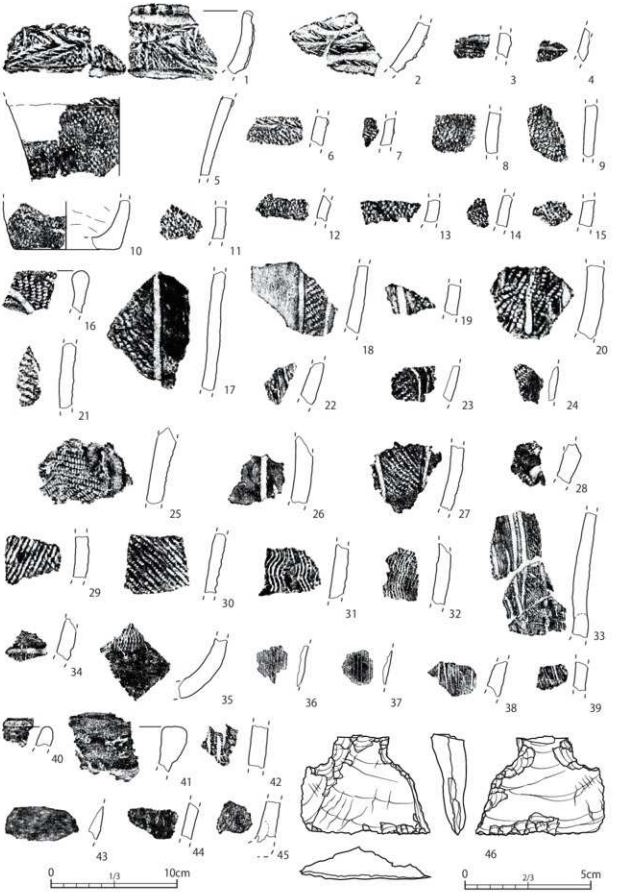
A　陶磁器類（第 26 図２～４、第５表）

陶器　第 26 図２・３は陶器皿の口縁～胴部片で底部を欠失する。内外面に白濁した長石釉が施されるいわゆる志野皿。美濃産で 16 世紀末～ 17 世紀前葉であろう。

磁器　第 26 図４は色絵磁器小碗。推定口径 9.1cm の深形碗（長佐古 2007）で、後述する文様か



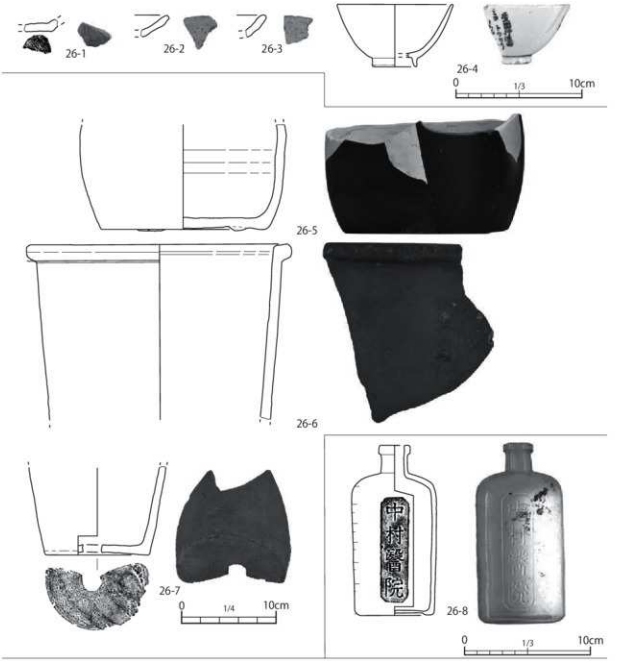
第 24 図　遺構外遺物分布図（1/200）



第 25 図　縄文土器・石器（1/3・2/3）

第５表　遺物観察表（１）

掲図番号	写真番号	出土位置	時期1	時期2	型式	器種	部位	胎土	焼成	文様要素	備考
25	1	土7	91-R	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	口縁部	チャート/片岩/長石/石英	普通	上辺に縦状の粘土粒貼付・単節縄文/2本一単位の浮線文/浮線文上に斜位の刻み	土33と同一個体
25	1	土33	P067	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	口縁部	チャート/片岩/長石/石英	普通	単節縄文/2本一単位の浮線文/浮線文上に斜位の刻み	土7と同一個体
25	2	土35	91-P	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	口縁部～胴部	チャート/長石/石英	普通	横位および弧状の浮線文/浮線文上に斜位の刻み	
25	3	土9	91-Q	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	胴部	チャート/片岩/長石	普通	横位浮線文/浮線文上に斜位の刻み	
25	4	土31	91-O	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	片岩/チャート/石英	普通	単節縄文LR	
25	5	土32	91-R	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	胴部	チャート/片岩/長石/石英	普通	単節縄文LR/横位施文/横位浮線文/浮線文上に斜位の刻み	
25	6	土11	P069	縄文時代	前期後葉	諸磯bx式	深鉢	胴部	片岩/チャート/石英/長石	普通	単節縄文LR/横位施文/横位浮線文/浮線文上に斜位の刻み	
25	7	土37	試掘坑1	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	チャート/長石	普通	横位浮線文/浮線文上に単節縄文押圧	
25	8	土25	91-O	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	チャート/片岩/長石/石英	普通	単節縄文LR/横位施文	
25	9	土30	91-O	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	片岩/チャート/石英/長石	良好	単節縄文LR/横位施文	
25	10	土18	91-Q	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	底部	片岩/チャート/石英/長石	普通	単節縄文LR/横位施文	
25	11	土21	P125	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	チャート/片岩/長石/石英	良好	単節縄文LR/横位施文	
25	12	土41	試掘坑1	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	片岩/長石	普通	単節縄文LR/横位施文	
25	13	土39	試掘坑1	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	片岩/チャート/長石	普通	単節縄文LR/横位施文	
25	14	土36	試掘坑1	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	チャート/片岩/長石	普通	単節縄文	
25	15	土23	91-P	縄文時代	前期後葉	諸磯式	深鉢	胴部	片岩/チャート/長石	普通	単節縄文	
25	16	土12	91-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	口縁部	チャート/石英/角閃石	普通	横位波状沈線/単節縄文LR/粗位施文	
25	17	土13	91-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/石英/砂粒	良好	単節縄文LR/横位施文/2本一単位の縦位懸垂文	
25	18	土14	91-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/石英/長石	良好	単節縄文RL/横位施文/2本一単位の縦位懸垂文	
25	19	土28	89-N	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	細砂粒	良好	単節縄文RL/横位施文/縦位懸垂文	
25	20	土15	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/石英	良好	単節縄文RL/横位施文/2本一単位の縦位懸垂文	
25	21	土26	90-P	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/長石	普通	単節縄文RL/横位施文/縦位懸垂文	
25	22	土3	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式か	深鉢	胴部	長石/角閃石/細砂粒	良好	縦位沈線	
25	23	土19	遺構外一括	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式か	深鉢	胴部	細砂粒	良好	単沈線による区画文/区画文に単節縄文RL縦位施文	
25	24	土22	遺構外一括	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/角閃石	良好	単節縄文RL/横位施文/縦位懸垂文	
25	25	土24	90-N	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/黒色粒子	普通	蕨手状懸垂文/単節縄文LR	
25	26	土38	試掘坑1	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/細砂粒	良好	縦位懸垂文	
25	27	土43	試掘坑3	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/長石/石英/角閃石	良好	単節縄文LR/横位施文/縦位懸垂文	
25	28	土44	試掘坑3	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/石英/長石	良好	横位沈線・蕨手状懸垂文	
25	29	土6	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/黒色粒子/細砂粒	良好	無節縄文LR/粗位施文	
25	30	土17	92-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/石英/チャート	良好	単節縄文LR/粗位施文	
25	31	土8	P032	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/石英	良好	縦位波状条線文	
25	32	土5	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/石英	良好	縦位波状条線文	
25	33	土34	P127	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	細砂粒	良好	2本一単位の縦懸垂文/縦位波状条線文	
25	34	土10	91-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	鉢	口縁部～胴部	チャート/長石	良好	横位沈線/縦位条線文	
25	35	土29	89-Q	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	鉢	胴部	石英/長石/雲母	良好	縦位波状条線文	
25	36	土2	92-R	縄文時代	中期後葉か	加曽利E3式か	深鉢	胴部	長石	普通	縦位条線文	
25	37	土16	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式か	深鉢	胴部	長石	良好	縦位条線文	
25	38	土20	遺構外一括	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	長石/チャート	良好	縦位条線文	
25	39	土46	試掘坑3	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式	深鉢	胴部	チャート/石英/長石	良好	縦位条線文	
25	40	土42	試掘坑1	縄文時代	中期後葉	加曽利E式か	深鉢	口縁部	チャート/長石	良好	無文	
25	41	土47	遺構外一括	縄文時代	中期		浅鉢	口縁部	細砂粒	良好	無文	
25	42	土1	92-R	縄文時代	中期後葉	加曽利E3式か	深鉢	胴部	石英/長石	良好	斜位集合沈線	
25	43	土4	92-Q	縄文時代	中期	不明	不明	胴部	チャート/細砂粒	普通	横位ミガキ	
25	44	土40	試掘坑1	縄文時代	中期後葉	加曽利E式か	深鉢	胴部	長石/石英	良好	無文	
25	45	土45	試掘坑3	縄文時代	中期後葉	加曽利E式	深鉢	底部	長石/石英	良好	無文	
26	1	27	91-P	近世以降			皿	底部	粉っぽい	良好	回転糸切離し	江戸在地系
26	2	陶01	91-P	中～近世	16ｃ末～17ｃ前葉		皿	口縁部			長石釉/志野皿	美濃産
26	3	陶02	試掘坑1	近世以降	16ｃ末～17ｃ前葉		皿	口縁部			長石釉/志野皿	美濃産



第 26 図　中世以降の遺物（1）（1/3・1/4）

第 5 表　遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版番号		出土位置	時期1	時期2	型式	器種	部位	胎土	焼成	文様要素	備考
26	4		表採	近代以降	昭和12～20		小碗	口～底部		良好	ゴム田と黒・黄・青顔料による上絵付	赤色顔料による絵付と造出象嵌
26	5		表採	幕末～近代			火消壺	底部		良好	外面丁寧なヘラミガキ	三足は円盤粘土
26	6		表採	近代以降			植木鉢	口縁部～胴部		良好 焼し	土縁更厚玉縁	
26	7		表採	近代以降			植木鉢	胴～底部		普通	外底面金属線利用回転糸切離し痕（左）	鉢底穴は内面から穿孔
26	8		表採	近代以降			瓶口瓶	完形	型作り	普通	中村製薬院角枠エンボス 瓶口は逆刀	医療用薬瓶
27	1	コンロ01	表採	近代以降	大正？		煙炉	箱部	粘土板成形	普通	戸袋面に隅丸方形枠の刻印「三州コンロ/中山特製/生田興（カ）吉」	正面に空気取り入れ窓，上面に三点支持の掛け口　大正煙炉
27	2	コンロ02	表採	近代以降	大正？		煙炉	煙受		良好	前面切り落とし風口	27-1と同一個体

ら所謂「子ども茶碗」である。外面には、ゴム印と黒・黄・青色顔料を用いた上絵付により旗を振る子供が描かれ、赤色顔料により「愛国行進曲／ミヨ　トウカイノ／ソラア（以下欠損）」の唱歌が記される。高台脇には赤色の圏線が巡る。瀬戸・美濃産で、昭和12（1937）～昭和20（1945）年迄の所産であろう。

B　近世以降の土器類（第26～27図、第5表）

かわらけ　第26図1は近世以降と思われるかわらけ皿底部である。小片であるが外底面に回転糸切り離し痕が残る。内面には人為的と捉えられる断面V字形の刻みが3条認められる。尖端工具の研磨痕の可能性が考えられる。器面は粉っぽい。江戸在地系の製品である。

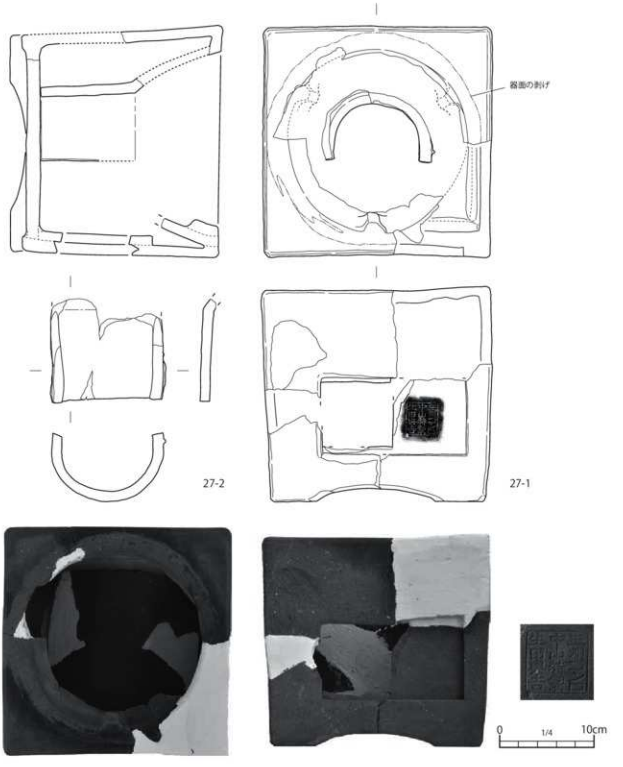
火消壺　第26図5は瓦質火消壺で、三足付きの胴丸形を呈する。内外面は燻され黒色処理されている。外面はミガキで滑沢をもつ。三足は円盤状の粘土塊貼付けである。使用により、内面にはススが付着し、三足の下面は水平になるほど磨り減っている。在地系で、幕末期（19世紀）から近代の所産である。

植木鉢　第26図6は燻しの瓦質植木鉢である。口縁部は外方へ肥厚した玉縁で、内面は平滑に作出される。胎土はやや砂質を帯びる。第26図7は酸化炎焼成の土師質植木鉢である。桶形で、欠失により口縁形態は不明である。外底面は回転糸切離し痕（左）が残り、非常に細かく金属線を使用している。底面中央に直径2cmの鉢底穴をもち、内側から穿孔している。6・7ともに在地系で、近代以降である。

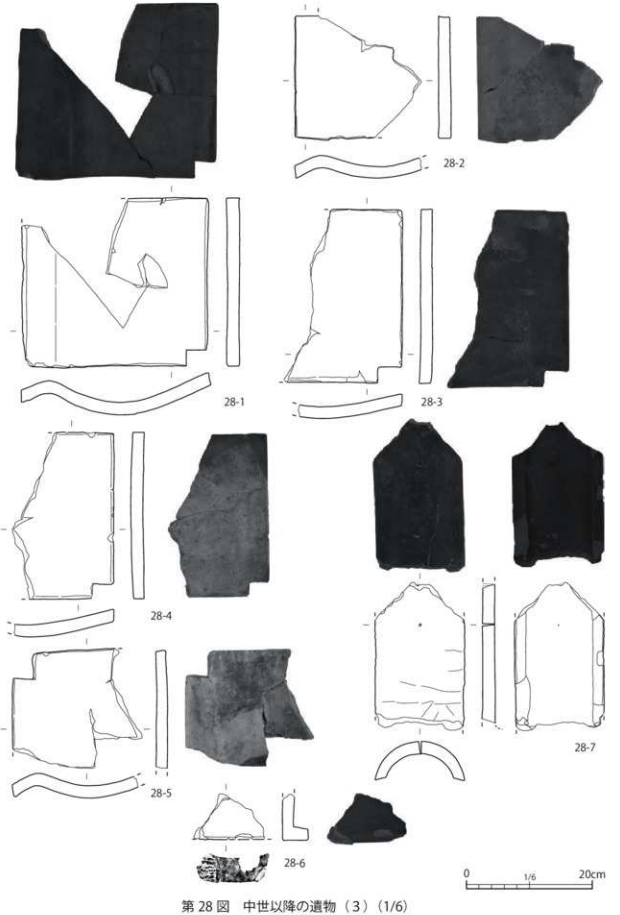
焜炉　第27図1は箱形の土師質焜炉で、いわゆる「大正焜炉」と呼ばれるものである。粘土板成形で、上面形は24.4×24.2cmの方形（8寸角）で、高さは外法で22.2cm、内法で高さ19.0cmである。正面には空気取り入れ口の窓があり、まず粘土板の側板を内法7.0×15cmの横長の長方形に切り抜き、上下に引き戸用の、鴨居と敷居と戸袋を粘土板貼付けで作り出している。貼り付けは内面貼付けで、断面三角の敷居溝を作り出し空気戸の開け閉めの際の走りとしている。戸袋裏の部分に刻印があり「三州コンロ / 中山特製 / 生田興（カ）吉」の三行を隅丸方形の枠で囲む。上面の掛け口は平面円形で直径19cm、3個の支点を貼り付けて、鍋・釜受としている。内部には断面漏斗状の炭受けと空気穴があり（第27図2）、下部は前面側が切り落とされ風口となっている。内部の炭受けは現状では接合しないので、断面では推定の位置を示している。底部は四辺の中央を窓状に切り欠き、切高台状となる。

C　瓦（第28図）

瓦は117点、32,690g出土した。すべて近世以降の瓦である。SX002からそのほとんどが出土した。第28図1～5のうち3・4は桟部を欠失するが、いずれも桟瓦と判断した。第28図6は軒桟瓦、同図7は軒丸瓦である。1～5は右下と左上に方形の切り欠きをもつ燻し瓦で、一枚板づくりである。1は胎土に白色粒子を少量含む。2は胎土には細砂を含む。4の胎土には黒色粒子を含む。瓦5は裏面に8条一単位の櫛目が見られる。東海系で近代以降の所産であろう。2・4・5は二次被熱を受けているのか、燻し銀の色調が取れて、土師質様の褐色を呈している。2は裏面が赤化し、中央には粒状にタールの付着が見られる。3は上面が被熱しタールが固着する。4は3に比べると被熱の程度は低いが全体に赤化し端部の一部にタールが付着する。いずれも火災による被熱とは判断し難く直火を被る用途に転用された可能性も考えられる。1は幅29.3cm、長さ26.7cm、厚さ2.0cmであ



第 27 図　中世以降の遺物（2）（1/4）



第 28 図　中世以降の遺物（3）（1/6）

る。本来 31.8cm 以上の幅の粘土板を型に乗せ、左右を切り落とす。右下の切り欠きは 3.3 × 2.6cm の長方形である。現状の重さ 2020.0g である。２は上端の切り欠き部を欠くが現状で長さ 19.3cm、重さは 852.0g である。３は長さ 27.4cm、1090.0g である。3.7 × 2.6cm の切り欠き、４は長さ 26.4cm で、重さは 980g である。3.3 × 2.4cm の切り欠きがある。５の平面規模は欠損のため不明で、重さは 840g である。4.2 × 3.0cm の切り欠きを持つ。

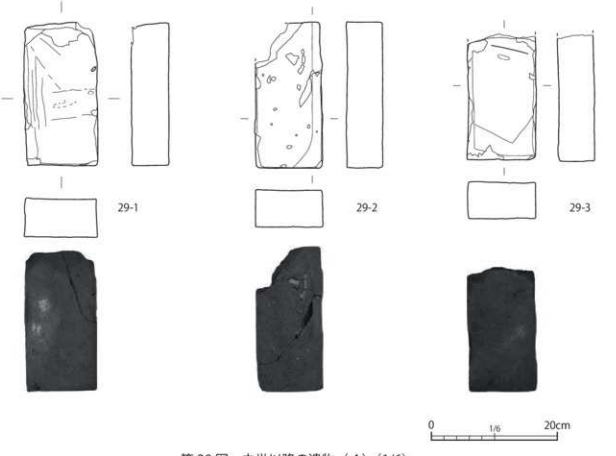
６は厚 2.5cm の軒平部を本体の平瓦部の下端に貼り付け、全体で幅 4.0cm の軒平面を作り出している。さらにこの軒平面から左に連続する軒丸部の文様帯は剥落しカキヤブリの刻みが残る。顎はほぼ直角である。内外面ともに平滑に作出される。

７は下端の破面を見るとわずかに顎の痕跡のカーブがのこることから、本来軒丸瓦であった可能性が高い。体部中央には縦位２箇所に釘穴を有する。内面を含め全体的に平滑に作出された燻し瓦である。江戸在地産ではない可能性が考えられる。現状で幅 10.2cm である。

このほか未図化の細片資料には、内面布目を有する丸瓦と廻隅瓦の細片がある。いずれも江戸在地系で近世の所産の可能性が高い。

D　煉瓦（第 29 図）

煉瓦は 44 点、38,180g 出土した。このうち比較的形状のわかる３点を図示した。第 29 図１～３は赤褐色の焼成赤煉瓦である。長さは 22.6 ～ 23.0cm、幅は 10.6 ～ 11.2cm、厚さは 5.8 ～ 6.0cm である。サイズからは普通煉瓦である。１は現状 2157.5g、２は現状 2080.0g、３は 2139.0g である。



第 29 図　中世以降の遺物（４）（1/6）

焼成は良好だが、胎土は混和剤や練など雑で、特に２は５～ 10mm 大のシャモットを混ぜ入れている。１・２は６面中、表裏の２面と１側面が未整形で、いわゆるワイヤーカットの縮れ面が残り、他の３側面は丁寧な仕上げ整形が行われている。３は表裏面が未整形でワイヤーカットの縮れ面が残り、３側面は丁寧な仕上げ整形が行われている。いずれも二次被熱を受けており、窯やカマドなどに使用されていた部材の一部であろう。

E　ガラス（第 26 図）

第 26 図８は型作りのガラス製の細口瓶で、医療用薬瓶である。無色透明、細口で首部は短く、肩部形状はいかり肩、胴部横断面は楕円形を呈する。体部の正面に「中村醫院」のエンボスがあり、その周りを隅切長方形の角枠で囲む。側縁には目盛りが刻まれている。

（大八木・両角・及川）

３）縄文時代以降の礫

礫は 166 点出土した（第６表）。このうち 91-Q 区を中心に礫が比較的集中して出土し、これは試掘調査の際に小礫が多く出土することが注目されていた。本調査でも礫がまとまって出土したが、土坑状の掘り込みを伴うものではないため、遺構としての集石の扱いとはしなかった。

礫の比較的まとまる範囲は４×６ｍほどの範囲である（第 24 図）。この範囲を超えると、急激に密度を減じる。この地点で使用されたというより、他地点で使用されたものが廃棄された可能性が高い。この範囲のビット等からの出土例を含めると、礫は 150 点出土し、合計 3,590g、最大は 98g、最小は 2.5g、平均で 23.9g となる。通常の集石に比べて非常に小さく軽いのが特徴である。ほぼすべてが被熱しており、小さくてこれ以上使用できなくなったものを選んで別の場所へ廃棄したような出土状態であった。出土層位からは縄文時代前期から中期の土層中に主に含まれており、周囲から中期の土器がまとまることから、この礫の時期も中期後半であろう。

（及川）

第６表　縄文時代以降の礫一覧（１）

出土位置	遺物番号	種別	時期	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
91-R	12	礫	縄文	3.17	2.26	2.06	25	被熱
91-R	13	礫	縄文	5.23	2.2	1.79	20	被熱
91-R	14	礫	縄文	3.16	1.59	0.97	5	被熱
91-R	15	礫	縄文	2.49	2.3	1.65	10	被熱
91-R	16	礫	縄文	2.77	1.69	1.34	10	被熱
91-R	17	礫	縄文	2.28	2.19	2.1	15	被熱
91-R	18	礫	縄文	5.38	3.01	2.66	30	被熱
91-R	19	礫	縄文	2.56	2	1.05	5	被熱
91-R	22	礫	縄文	4.28	2.55	1.98	30	被熱
91-R	24	礫	縄文	4.27	2.97	1.73	20	被熱
91-R	25	礫	縄文	4.41	2.84	1.64	25	被熱
92-Q	26	礫	縄文	3.74	2.06	1.49	10	被熱
92-Q	27	礫	縄文	2.63	1.98	1.78	10	被熱
92-Q	28	礫	縄文	5.18	3.36	1.46	30	被熱
91-Q	29	礫	縄文	4.88	2.01	1.76	30	被熱
91-Q	30	礫	縄文	3.34	2.56	1.76	20	被熱
91-Q	31	礫	縄文	2.56	1.51	1.38	10	被熱
91-Q	32	礫	縄文	3.95	3	2.04	25	被熱
91-Q	33	礫	縄文	4.21	4.08	2.35	55	被熱
91-Q	34	礫	縄文	3.94	2.88	0.96	15	被熱
91-Q	35	礫	縄文	2.6	2.54	0.96	10	被熱
91-Q	36	礫	縄文	5.39	5.06	2.11	65	被熱
91-Q	38	礫	縄文	4.08	2.95	1.06	10	被熱
91-Q	39	礫	縄文	3.91	3.09	1.53	30	被熱
91-Q	40	礫	縄文	2.78	2.65	1.56	10	被熱
91-Q	41	礫	縄文	4.49	3.11	2.25	40	被熱
91-Q	42	礫	縄文	3.6	2.82	2.38	30	被熱
91-Q	43	礫	縄文	2.49	1.89	1.49	10	被熱
91-Q	44	礫	縄文	3.5	3.28	1.32	25	被熱
91-Q	45	礫	縄文	3.69	3.49	1.79	30	被熱
91-Q	46	礫	縄文	3.17	2.44	1.37	25	被熱
91-Q	47	礫	縄文	5.53	3.88	1.09	30	被熱
91-Q	48	礫	縄文	3.33	2.92	1.5	25	被熱
91-Q	49	礫	縄文	5.45	3.54	2.37	55	被熱
91-Q	50	礫	縄文	3.77	2.64	1.66	20	被熱
92-Q	51	礫	縄文	3.41	2.75	1.25	15	被熱
92-Q	52	礫	縄文	4.75	2.38	1.45	25	被熱
92-Q	53	礫	縄文	2.14	1.15	1.13	10	被熱
92-Q	54	礫	縄文	3.03	2.6	1.26	15	被熱
91-Q	55	礫	縄文	4.14	3.23	1.87	25	被熱
92-Q	56	礫	縄文	4.51	2.11	1.5	20	被熱
91-Q	57	礫	縄文	5.38	2.77	2.38	30	被熱
91-Q	58	礫	縄文	4.99	3.52	1.4	35	被熱
91-R	60	礫	縄文	2.53	2.23	1.2	10	被熱
91-Q	61	礫	縄文	4.34	29.6	2.01	25	被熱
91-R	62	礫	縄文	2.7	1.99	1.32	15	被熱
91-R	63	礫	縄文	2.95	2.77	1.3	20	被熱
91-Q	64	礫	縄文	2.79	1.73	1.2	10	被熱
91-R	65	礫	縄文	3.35	2.12	1.29	10	被熱
91-Q	66	礫	縄文	4.1	3.66	1.97	40	被熱
91-Q	67	礫	縄文	2.58	1.34	1.18	5	被熱
91-Q	68	礫	縄文	3.8	2.55	1.47	15	被熱
91-Q	70	礫	縄文	3.59	2.6	2.08	15	被熱
91-Q	71	礫	縄文	3.52	2.65	1.86	20	被熱
91-Q	72	礫	縄文	5.7	3.85	2.13	30	被熱
91-Q	73	礫	縄文	2.96	2.52	1.72	55	被熱
91-Q	74	礫	縄文	2.96	2.52	1.72	15	被熱
91-Q	75	礫	縄文	3.87	2.93	1.46	15	被熱
92-P	76	礫	縄文	3.15	1.59	0.74	25	被熱
91-Q	78	礫	縄文	2.52	2.4	1.46	10	被熱
91-Q	80	礫	縄文	3.07	2.04	1.3	10	被熱
91-Q	81	礫	縄文	6.4	3.68	2.02	60	被熱

第６表　縄文時代以降の礫一覧（１）

出土位置	遺物番号	種別	時期	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
91 Q	82	礫	縄文	8.1	2.61	1.84	35	焼熱
91 Q	83	礫	縄文	3.38	2.63	2	20	焼熱
91 Q	84	礫	縄文	3.97	2.61	1.33	15	焼熱
91 Q	85	礫	縄文	3.64	2.43	2.2	20	焼熱
91 Q	86	礫	縄文	4.3	2.65	1.71	20	焼熱
91 Q	87	礫	縄文	3.64	3.47	2.72	35	焼熱
91 Q	89	礫	縄文	3.52	3.39	2.17	30	焼熱
91 Q	90	礫	縄文	3.96	1.73	1.44	15	焼熱
91 Q	91	礫	縄文	2.52	1.98	1.54	15	焼熱
91 Q	93	礫	縄文	3.1	2.36	1.9	20	焼熱
91 Q	94	礫	縄文	3.9	2.6	1.78	20	焼熱
91 Q	95	礫	縄文	3.66	1.87	1.47	10	焼熱
91 Q	96	礫	縄文	4.48	1.5	1.17	15	焼熱
91 Q	97	礫	縄文	3.17	2.66	1.7	15	焼熱
91 Q	98	礫	縄文	4.72	4.48	2.13	40	焼熱
91 Q	99	礫	縄文	5.02	4.09	2.34	45	焼熱
91 Q	100	礫	縄文	5.56	2.93	2.12	30	焼熱
91 Q	101	礫	縄文	3.38	2.42	2	15	焼熱
91 Q	102	礫	縄文	5.83	4.12	2.79	70	焼熱
91 Q	103	礫	縄文	4.43	4.14	1.83	40	焼熱
91 Q	104	礫	縄文	3.93	2.57	1.7	20	焼熱
91 Q	105	礫	縄文	3.89	2.13	1.33	20	焼熱
91 Q	106	礫	縄文	4.99	3.33	2.08	45	焼熱
91 Q	107	礫	縄文	4.37	3.16	2.67	40	焼熱
91 Q	108	礫	縄文	4.61	2.9	1.89	35	焼熱
91 Q	109	礫	縄文	3.18	2.97	1.52	20	焼熱
91 Q	110	礫	縄文	4.39	2.56	1.93	25	焼熱
91 Q	111	礫	縄文	2.87	2.65	1.08	10	焼熱
91 Q	112	礫	縄文	2.67	2.03	1.01	10	焼熱
91 Q	113	礫	縄文	3.8	3.78	2.1	20	焼熱
91 Q	114	礫	縄文	4.19	2.5	1.72	20	焼熱
91 Q	115	礫	縄文	2.68	2.1	2.03	10	焼熱
91 Q	116	礫	縄文	3.49	2.59	1.45	15	焼熱
91 Q	117	礫	縄文	3.49	2.59	1.45	15	焼熱
91 Q	118	礫	縄文	3.43	2.25	1.07	10	焼熱
91 Q	119	礫	縄文	2.2	1.45	0.99	5	焼熱
91 Q	120	礫	縄文	3.04	2.49	2.15	20	焼熱
91 Q	121	礫	縄文	4.76	3.14	2.23	40	焼熱
91 Q	122	礫	縄文	2.6	2.3	2	10	焼熱
91 Q	123	礫	縄文	4.28	3.67	1.91	20	焼熱
91 Q	124	礫	縄文	4.97	2.08	1.69	20	焼熱
91 Q	125	礫	縄文	4.45	2.67	1.99	20	焼熱
91 Q	126	礫	縄文	4.1	3.9	2.53	55	焼熱
91 Q	127	礫	縄文	6.58	3.91	2.47	55	焼熱
91 Q	128	礫	縄文	4.55	4.09	2.03	40	焼熱
91 Q	129	礫	縄文	4.42	2.9	2.11	30	焼熱
91 Q	130	礫	縄文	4.55	2.79	1.31	20	焼熱
91 Q	131	礫	縄文	3.92	2.53	1.02	15	焼熱
91 Q	132	礫	縄文	2.09	1.22	1.05	2.5	焼熱
91 Q	133	礫	縄文	3.27	2.7	1.99	20	焼熱
91 Q	134	礫	縄文	2.08	1.66	1.42	5	焼熱
91 Q	135	礫	縄文	3.31	1.99	1.67	15	焼熱

出土位置	遺物番号	種別	時期	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	備考
91 Q	136	礫	縄文	4.73	3.09	3	45	焼熱
91 Q	137	礫	縄文	3.78	2.87	2.54	35	焼熱
91 Q	138	礫	縄文	3.8	3.31	2.54	25	焼熱
91 Q	139	礫	縄文	5.67	3.5	2.19	50	焼熱
91 Q	140	礫	縄文	2.11	1.79	1.42	10	焼熱
91 Q	141	礫	縄文	3.63	2.09	1.91	20	焼熱
91 Q	142	礫	縄文	4.58	2.3	1.12	15	焼熱
91 Q	143	礫	縄文	3.78	2.45	1.96	15	焼熱
91 Q	144	礫	縄文	5.97	3.22	2.65	60	焼熱
91 Q	145	礫	縄文	1.99	1.19	0.86	5	焼熱
91 Q	146	礫	縄文	5.14	3.11	2.59	45	焼熱
91 Q	147	礫	縄文	5.04	4.49	1.79	40	焼熱
91 Q	148	礫	縄文	4.76	2.94	2.61	40	焼熱
91 Q	149	礫	縄文	3.55	2.92	2.72	25	焼熱
91 Q	150	礫	縄文	5.07	3.88	1.62	35	焼熱
91 Q	151	礫	縄文	4.17	2.42	1.72	15	焼熱
91 Q	152	礫	縄文	3.12	1.52	1.21	10	焼熱
91 Q	153	礫	縄文	3.35	2.27	2.13	25	焼熱
91 Q	154	礫	縄文	4.71	2.85	2.32	25	焼熱
91 Q	155	礫	縄文	1.8	1.29	0.53	5	焼熱
91 Q	156	礫	縄文	2.28	1.66	1.25	5	焼熱
91 Q	157	礫	縄文	1.77	1.34	0.85	10	焼熱
91 Q	163	礫	縄文	4.52	2.88	1.45	20	焼熱
91 Q	164	礫	縄文	3.81	2.91	2.11	25	焼熱
91 Q	166	礫	縄文	2.04	1.85	0.94	5	焼熱
91 P	167	礫	縄文	5.81	4.27	3.51	96	焼熱
91 Q	168	礫	縄文	4.02	2.66	2.31	35	焼熱
91 Q	169	礫	縄文	3.55	2.99	2.45	35	焼熱
91 Q	170	礫	縄文	5.41	3.4	2.43	60	焼熱
91 Q	171	礫	縄文	3.43	2.26	1.02	10	焼熱
91 Q	172	礫	縄文	2.79	1.82	1.74	10	焼熱
91 Q	187	礫	縄文	2.7	2.43	1.44	15	焼熱
91 Q	188	礫	縄文	3.64	3.08	2.76	30	焼熱
91 Q	189	礫	縄文	3.29	2.43	1.76	15	焼熱
91 Q	190	礫	縄文	4.38	2.59	2.53	30	焼熱
91 Q	192	礫	縄文	4.42	2.73	1.69	15	焼熱
SP029	1	礫	縄文	3.39	2.19	1.96	15	焼熱
SP031	1	礫	縄文	4.79	3.64	2.92	55	焼熱
SP034	1	礫	縄文	3.62	3.16	2.33	25	焼熱
SP034	2	礫	縄文	3.79	2.62	1.39	15	焼熱
SP034	3	礫	縄文	2.96	2.26	1.61	10	焼熱
SP034	4	礫	縄文	4.55	2.49	1.72	20	焼熱
SP064	1	礫	縄文	5.53	3.98	3.14	70	焼熱
SP060	1	礫	縄文	4.35	2.79	1.91	25	焼熱
SP069	2	礫	縄文	3.42	1.97	1.62	15	焼熱
SP069	3	礫	縄文	3.76	2.98	1.69	15	焼熱
SP069	4	礫	縄文	2.69	2.03	1.87	10	焼熱
SP069	6	礫	縄文	4.16	3.66	3.18	35	焼熱
SK002	1	礫	近代	3.33	2.53	0.94	5	発掘
試掘区1	№1	礫	不明	—	—	—	9.9	重量のみ
試掘区1	№15	礫	不明	—	—	—	4.9	重量のみ
試掘区1	1 群一括	礫	不明	—	—	—	270.4	2点の礫合計

第７表　殿竹遺跡検出遺構番号一覧

住居遺し番号	調査次	調査番号
住居1	2次縄文	JS01
～	～	～
住居7	2次縄文	JS07
住居8	2次弥・古	SI01
～	～	～
住居10	2次弥・古	SI03

井戸遺し番号	調査次	調査番号
井戸1	2次	SE01
～	～	～
井戸4	2次	SE04

祠遺構遺し番号	調査次	調査番号
祠1	3次	祠1
～	～	～
祠46	3次	祠46

ピット遺し番号	調査次	調査番号
ピット1	2次1期	JP01
～	～	～
ピット74	2次1期	JP74
ピット75	2次2期	JP201
～	～	～
ピット269	2次2期	JP365
ピット270	2次中近世	中・近世P1
～	～	～
ピット552	2次中近世	中・近世P283
ピット553	3次	501号ピット
～	～	～
ピット571	3次	510号ピット
ピット572	4次	P001
～	～	～
ピット769	4次	P198

土坑遺し番号	調査次	調査番号
土坑1	1次	土坑貯蔵穴1
～	～	～
土坑8	1次	土坑貯蔵穴8
土坑9	2次縄文	JSK01
～	～	～
土坑30	2次縄文	JSK22
土坑31	2次中世以降	SK01
～	～	～
土坑81	2次中世以降	SK51
土坑82	3次	52号土坑
～	～	～
土坑92	3次	62号土坑
土坑93	4次	SK001
～	～	～
土坑95	4次	SK003

溝遺し番号	調査次	調査番号
溝1	2次	SD01
～	～	～
溝35	2次	SD35
溝36	3次	36号溝
～	～	～
溝44	3次	44号溝
溝45	4次	SD001
～	～	～
溝47	4次	SD003

不明遺構遺し番号	調査次	調査番号
不明遺構1	2次	SX01
不明遺構2	4次	SX01
～	～	～
不明遺構4	4次	SX03

Ⅴ　調査の成果と課題

今回の調査は殿竹遺跡の第４次調査であり、非常に狭い範囲の調査であったが、過去の第２・３次調査区に挟まれた範囲のため、遺構・遺物の分布範囲がより明確になるとともに、新たに旧石器時代の石器・礫群を検出することができた。以下にまず、１～３次調査の成果をまとめ、次に目黒川流域を中心とした武蔵野台地南部の遺跡分布について、時代ごとに簡単な検討を行い、さらに北沢上水（用水）についても触れ、最後に第４次調査を含めてまとめ、成果と課題としたい。

１　殿竹遺跡の既往の調査と成果

第１次調査は世田谷区教育委員会と殿竹遺跡調査会によって昭和61年（1986）に実施された（殿竹遺跡調査会 1987）。この調査は松沢病院のリハビリテーション棟建築に伴うもので、いわゆる「加藤山と将軍池」の北方約250ｍに位置する（第２図）。調査は７本のトレンチを設定し、そのうちE-5グリッドのトレンチで８基の土坑状遺構を検出し、縄文時代中期の「曽利系土器」と「加曽利ＥⅡ～Ⅲ式」の土器が出土している。この際の調査では、調査地点が大正８年ころ工事された「加藤山と将軍池」より以前から存在した湧水池の近辺に位置しており、湿地帯に位置している可能性を指摘している。土層も水の影響を受け、基本層序のⅡ層の下部付近から酸化や還元化とシルト化が認められるという。

第２次調査は都埋文センターにより平成19～21年（2007～2009）にかけて実施された（東京都埋蔵文化財センター 2010b）。東京都医学系総合研究所整備に伴う調査で、遺跡の南東隅部分5508.4㎡と広域な調査が行われ、縄文時代から近世にかけて良好な遺構遺物を検出し、特に縄文時代中期後半の集落の検出は注目された。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡７棟、土坑22、ピット269基、弥生時代後期の住居跡２棟、古墳時代後期の住居跡１棟、中世以降地下式坑１基、土坑51基、溝35基、井戸５基、ピット283基が検出された。遺物では前期前半、前期後半、中期初頭の土器がわずかに出土しているほかは、主体は中期後半～末葉の土器である。石器は石鏃、削器、石錐、打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石などが出土している。

縄文時代の土坑の中には縄文時代早期の可能性が高い陥し穴土坑２基があり、そのうちのJSK22の底面付近からは打製石鏃が１点出土している。このことは、本遺跡の土地利用が縄文時代早期から始まっていることを示している。中期の集落は東西95ｍ、南北50ｍほどの範囲に７棟と散漫な分布を示している。北側は谷に向かって傾斜しており、これ以上の広がりはないと思われる、一方東・西方向や南側についてはさらに広がる可能性が残されている。なお、集落の北側は北沢川の谷筋から南に向かう浅い谷が伸びており、先ほどの縄文中期の集落もこの谷を挟んで東西二つの小集落に分かれるかもしれない。

弥生時代は隅丸長方形で４本主柱の竪穴住居が２棟検出され、大形のSI01と中形のSI02が約10ｍ離れて検出された。この弥生時代後期の集落も調査区のより東側寄りに展開することから、集落の範囲の主体は東側の丸下遺跡の方向に広がる可能性が高い。しかし、大規模な集落ではなく、あと数

棟程度であろう。出土した土器は網目状撚糸文を地紋とする縦区画系の壺やナデ甕が出土しており、東京湾沿岸系の後期後半でもより新しい段階の時期である。目黒川下流域の集団による上流部開発(水源地)が後期でも後半と遅れ、しかも単発であった可能性が高い。

古墳時代後期はカマドを持つ竪穴住居跡がこれも調査区の東寄り付近で検出された。推定3×4mほどの小形の住居跡で東カマドである。この住居跡1棟のみの集落とは考え難いことから、この時期の集落もより東側の調査区外に展開する可能性が高い。土器は有稜坏が出土しており、7世紀前半頃と思われる。上流域の開拓に係る集落であろう。

中世以降ではSX01とした地下式坑の検出が注目される。遺物でも13～14世紀の龍泉窯系の青磁をはじめ常滑産の甕が出土している。このほか出土陶磁器類では16世紀代の擂鉢、16世紀末代の瀬戸美濃産の長石釉皿があり、17世紀初頭の瀬戸美濃産の天目茶碗、さらに17世紀後半の肥前産磁器皿などが出土しており、中世以降断続的ながら土地利用が行われていることを示している。17世紀後半は後述する北沢上水(用水)が玉川上水から分水された時期であり注目される。

溝は35条検出されているが、注目されるのはSD15とした水が流れた痕跡のある溝である。最上層からビニールなどが出土することから現代のものかと思われたが、その位置が明治時代にさかのぼる地図にも水流として位置が示されていること、この流れの下流には水車のマークがあることなどから、用水路である可能性が高くなった。ちょうど下流の丸下遺跡で調査された水車堀の遺構と一連のもので北沢上水(用水)の一部であると判明した。

北沢上水(用水)は、玉川上水から分水された用水である。江戸時代の承応3年(1654)に完成した玉川上水は、主に江戸市中の飲料水対策として掘削された。取水口は多摩川の羽村、終点は四谷大木戸、総延長はおよそ13里52㎞である。北沢上水(用水)は、万治元年(1658)に玉川上水から分水が許可された。当時の上北沢村の地頭であった旗本中根壱岐守の家老長谷川団左衛門が、当村の富農鈴木左内・榎本文右衛門と図って、幕府に許可を得たもので、住民の飲料水確保を理由とした。寛文10年(1670)には玉川上水の拡張工事が行われ灌漑用にも使用できるようになり、北沢分水は北沢上水(用水)として下流の村々も利用できるようになった。このことから、玉川上水完成後4年で早くも分水が行われており、その後は何度か水口の位置を変えているようである。しかも、17世紀後半以降という北沢上水の年代と、第2次調査で検出された中世から近世初頭の遺物の年代観とに接点を見ることができる。もともと中世以来当地が断続的に利用され続けてきたが、16世紀後半から17世紀後半にも当該時期の陶磁器類が出土していることから、ある程度開けていた地点が北沢上水(用水)の通水ルートとして選ばれていた可能性が高い。第2次調査では時期は明確にはできていないが、井戸や土坑群、柱穴なども検出されており、また、溝類の多くは北沢上水(用水)の流れに直交するなど、集落やその周辺の耕地内を流れる水の姿を知ることができる。

なお、廃絶時期は統制陶器が出土することから第二次世界大戦頃と思われ、また排水用の陶管が接続されていることから、用水だけでなくある時期から排水の機能に切り替わったようである。

なお、北沢上水(用水)については別項でもう少し触れることとしたい。

第3次調査は同じく都埋文センターにより平成21年(2009)に740㎡が調査された(東京都埋蔵文化財センター2010a)。これは都立松沢病院外構整備工事及び公園整備工事に伴う調査で、赤堤通りに沿って、南東の交番脇付近から北西の正門付近まで細長いトレンチ調査が行われた。調査

の結果、縄文時代のピット 19 基、近世以降の土坑 11 基、溝 9 基が検出され、この他に耕作に伴う畝間溝と思われる並行する溝群が多数検出されている。出土遺物では縄文土器は中期後半の加曽利Ｅ３式が主体で出土している。この３次調査から、２次調査で検出した縄文時代中期の集落は北東方向へは広がることはなく、また弥生時代後期や古墳時代後期の住居跡も検出されないどころか、土器片も検出されなかった。このことから、弥生・古墳時代の集落も北西方向には広がらないことが判明した。また、土層の遺存状態も、南東部はⅡ層がほとんどなく、北西に向かうにつれてⅡ層の遺存度は良好となっていくが、全体の遺物量も北西方向に向かうにつれ非常にまれになることが判明した。つまり、遺跡範囲の北西方向は遺跡の密度がやや低くなり、遺構や遺物が集中する遺跡の重心が遺跡の南東部あたりにあることが判明した。

2　目黒川流域の遺跡分布について

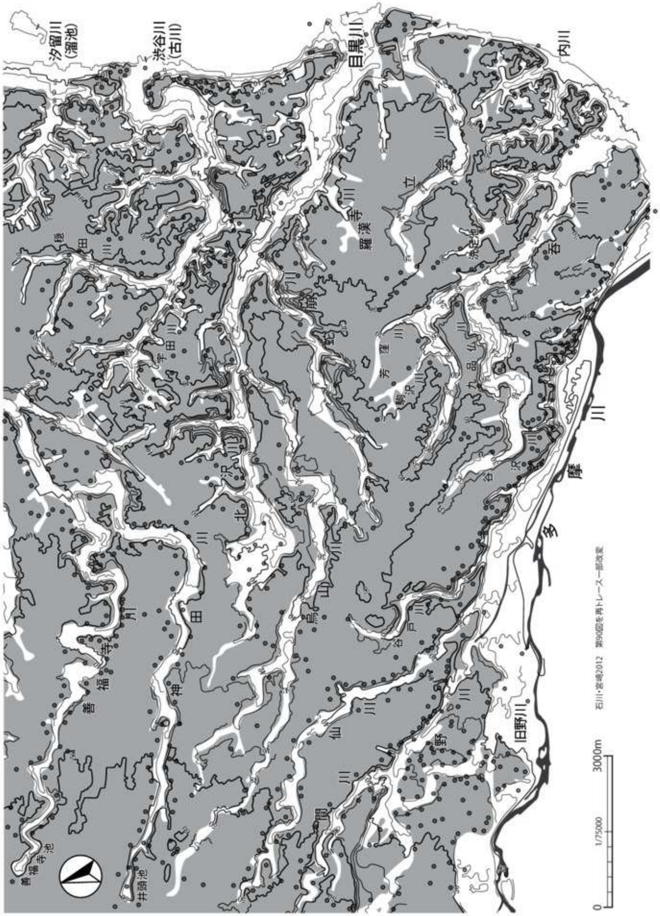
第 30 図に目黒川が図の中央になるような配置で、旧石器から近世までの遺跡を点で示した。目黒川が西から東へ流れるように配置してあるため、図の天は北ではなく、やや振れている。国土地理院地図『地盤高図』をもとに石川博行・宮崎博の第 90 図を参照し再トレースしたものである（石川・宮崎 2012）。図示範囲は南は多摩川沿い、東は東京湾岸、北は神田川水系、西は井の頭池付近までである。図の点は東京都遺跡地図情報インターネット提供サービスをもとに作成した。なお、いわゆる江戸朱引き線内の江戸遺跡については点落としを省略した。

図を眺めてみると河川に臨む台地縁辺に遺跡が集中していることが一目でわかる。また、台地の内部にはあまり遺跡が広がることが少ないことも読み取れる。

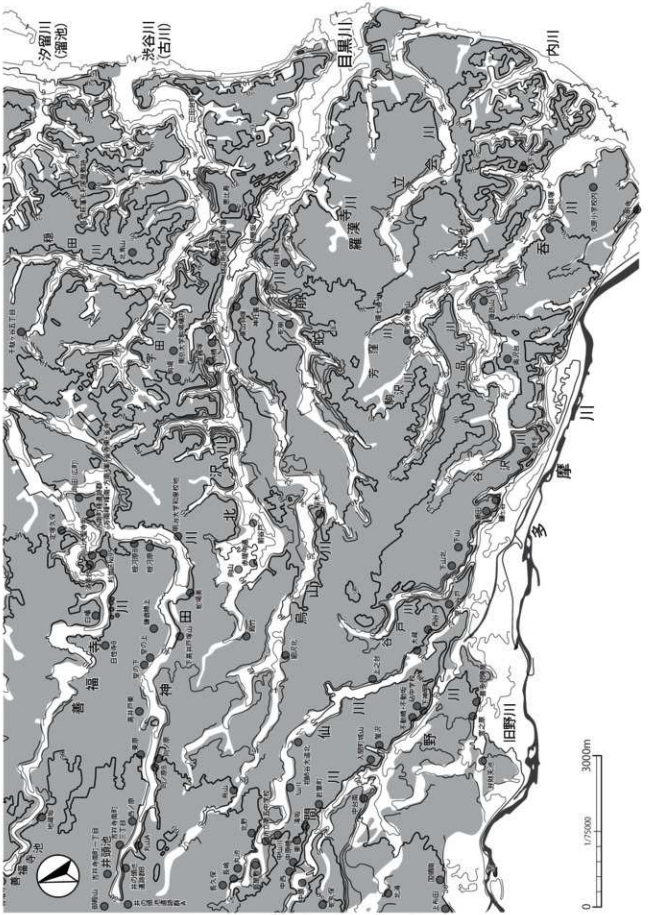
野口淳は武蔵野台地を中心とした東京都内の遺跡分布の粗密を概観し、武蔵野台地内をはじめとしいくつかの遺跡の密度が粗の範囲があることを指摘している（野口 2022）。第 30 図では、目黒川下流域と立会川とに挟まれた範囲からさらに西側へのび、目黒川支流の蛇崩川とさらに西のこれも目黒川の支流である烏山川にはさまれた台地まで、東西 10km、南北３km ほどの範囲に遺跡の非常に少ない範囲が見受けられる。北側の淀橋台と南側の荏原台という標高のより高い下末吉面に挟まれて、この範囲が周囲より低い地形面の目黒台面となっている範囲である。現在の行政区でいうと、品川区の西部から目黒区の南部、世田谷区の東部にかけての範囲である。目黒台面といわれる範囲の中央から東側部分にあたる。早い時期の土地開発のために遺跡が湮滅した可能性もあるが、各時代にわたり土地利用頻度が低いことがわかる。一方細かく時期を見ていくと、活発な利用も認められる時代がある。以下、目黒川上流域の遺跡についてはⅡ章において概観したので、ここでは下流域もふくめた流域全体の動向とともに、南の多摩川沿いや北の神田川沿いの遺跡分布も少し加味して、遺跡の動向を時代別にみておきたい。

1）　目黒川流域を中心とした旧石器時代の遺跡（第 31 図）

殿竹遺跡は目黒川の支流である北沢川の最上流域に位置し、石器は剥片２点と焼礫 21 点からなる石器・礫集中部地点１か所が検出された。殿竹遺跡の周囲では東側の北沢川のより下流に、向山・赤堤・前谷戸などの遺跡が点在するのみで、さらに下流に向かうと、烏山川の合流地点付近の左岸に大橋遺跡や氷川遺跡、右岸に東山遺跡が位置し、両者はいずれも目黒台面に位置する。蛇崩川流域にも数遺跡展開するが、下流右岸の羅漢寺川沿いの目黒台面では遺跡は全く見られず、左岸側の



第 30 図　目黒川流域の遺跡 (全時期)



第 31 図　目黒川流域の遺跡 (旧石器時代)

標高の高い淀橋台面では目黒区と渋谷区との境付近で遺跡が点在するものの、それより下流域では旧石器時代の遺跡はまったく認められていない。

一方、多摩川沿いのいわゆる国分寺崖線沿いでは世田谷区下野毛遺跡付近から西に向かい旧石器時代の遺跡が連続的に並び、野川流域の仙川面にそって遺跡が連なる。北側の神田川流域や善福寺川流域でも旧石器時代の遺跡は密集しており、目黒川流域の遺跡分布とは好対照である。

2）目黒川流域を中心とした縄文時代の遺跡（第 32 図）

今回の第 4 次調査では、縄文時代の明確な遺構は少なく、3 区において小穴が 44 基が確実であり、1・2 区でも柱穴は検出されているが縄文時代と限定できなかった。

これまでの調査の遺構を振り返ってみると、まず遺構は、第 2 次調査で竪穴住居は縄文時代中期後半の加曽利Ｅ 3 式期を中心とし 7 棟と土坑 22 基及び不明遺構としたもの 3 基、小穴は 269 基ある。縄文時代は本遺跡の最盛期にあたる。

縄文時代になると目黒川流域は下流域はもちろんながら、上流域の支流である北沢川や烏山川まで展開するようになる。しかし、一歩目黒台地の奥に入ると遺跡の展開は認められず、無人の空閑地が広がる。

大きな傾向としては、草創期と晩期はほとんど遺跡がなく、草創期では根津山遺跡で隆起線文土器が出土し、晩期では松原羽木遺跡で小片が出土している程度である。

早期・前期・後期は下流域がもっぱらの中心で、上流域の集落は点々とした密度の低く、小規模な集落が主体である。一方、中期になると目黒川上流域に新たな集落が多数展開するようになる。この時期の中心集落が烏山川流域の桜木遺跡で、中期の住居跡が 400 棟以上検出されている。目黒川上流域だけでも、松原羽木通遺跡、羽木山田邸内遺跡、向山遺跡があり、中・下流域ではこれも大規模な大橋遺跡、東京大学駒場構内遺跡、東山貝塚、烏森遺跡、中目黒遺跡、目黒不動遺跡、油面遺跡、鉢山町・猿楽町 17 番遺跡があり、支流の蛇崩川沿いには蛇崩遺跡がある。

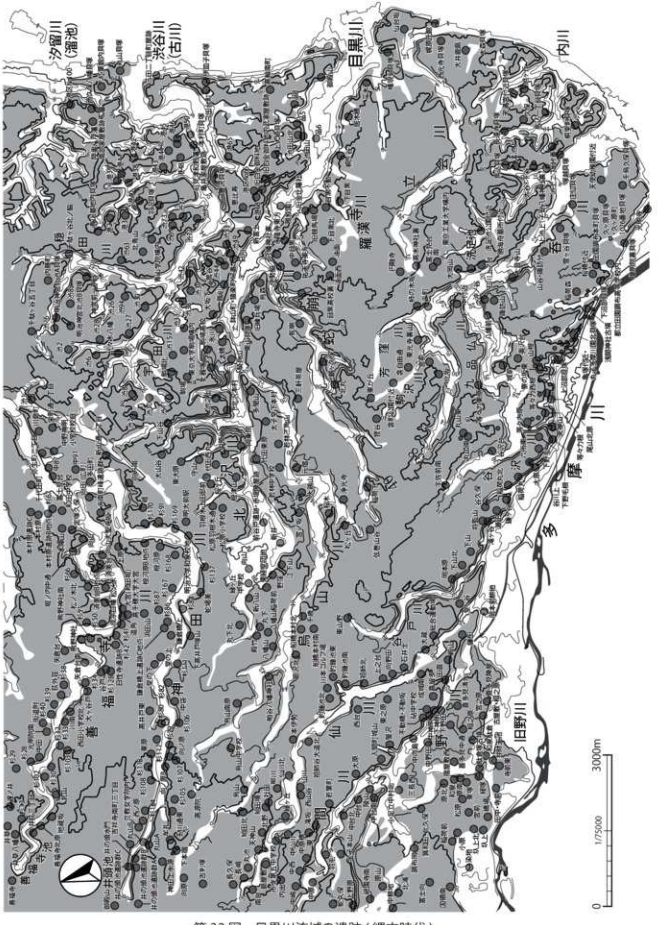
多摩川沿岸でも集落は多数が認められ、国分寺崖線だけでなく、府中崖線沿いにも遺跡が林立する。東京湾岸の東部では、前期を中心とし貝塚の形成が活発になる。渋谷川流域でも神田川流域でも遺跡は増加する。しかしながら、目黒川流域以外でも、草創期と晩期の遺跡は極めて少ない。

3）目黒川流域を中心とした弥生時代の遺跡（第 33 図）

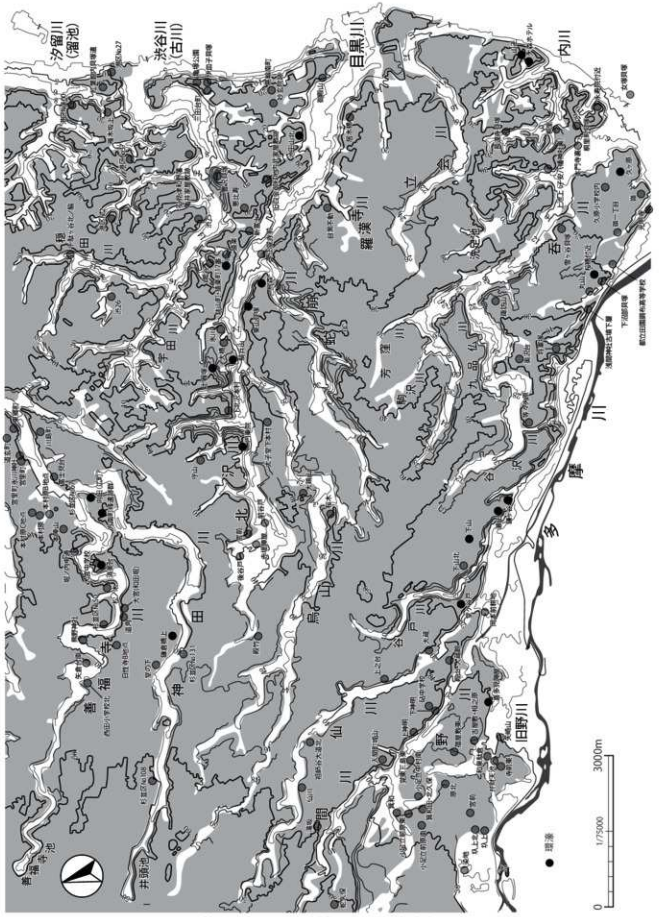
今回の第 4 次調査では弥生時代後期の遺構も遺物も検出されなかったが、第 2 次調査において後期後半の住居跡 2 棟が報告されている。

この時期は目黒川流域に環濠が密集することが特徴であり、こうした環濠集落からの派生した上流部開拓集落の一つが殿竹遺跡と考えられる。環濠以外の集落も上流域から下流域まで比較的満遍なく検出されているが、中期の遺跡は桜木遺跡や新富士遺跡などわずかで、縄文時代晩期以来、目黒川流域の土地利用は低調であった。こうした状況は弥生時代後期に大きく変わる。その主体は後期でも後半である。この時期に環濠を伴う集落が爆発的に目黒川流域に広がり、その余波が支流の北沢川の最上流域の殿竹遺跡にも及んだのである。

殿竹遺跡に最も近い環濠集落は円乗院遺跡で、約 3 ㎞離れた位置にある。これを環濠の最上流域とし、最下流の池田山北遺跡まで約 6 km の間に、左岸のより標高の高い台地上に上流域から、円乗院遺跡、土器塚遺跡、騎兵山遺跡、鉢山町遺跡、鉢山町・猿楽町 17 番遺跡、池田山北遺跡とな



第 32 図　目黒川流域の遺跡（縄文時代）



第 33 図　目黒川流域の遺跡 (弥生時代)

らび、右岸の低い目黒台面には、東山（貝塚）遺跡、烏森遺跡が位置する。非常に接近した立地であり、環濠の密集地帯となっている。

同様の環濠分布は神田川や善福寺川の中流域にも認められている。図の範囲の中でも神田川流域では鎌倉橋上遺跡、善福寺川流域では済美台遺跡、峰南町峯遺跡・向田（広町）遺跡、川島町遺跡などが5 km の範囲内に密集する。これらの環濠はいずれも全掘されてはいないものの規模の小さい環濠と考えられる。一方東京湾沿岸から多摩川中流域にかけても環濠が並ぶが、これらは規模の大きなものが多いようである。

4）目黒川流域を中心とした古墳時代の遺跡（第 34 図）

殿竹遺跡では古墳時代の遺構は後期後半（7 世紀）のカマド持ちの竪穴住居跡が 1 棟検出されたのみである。弥生時代に目黒川上流域まで広がりを見せた遺跡も、古墳時代には継続せず、集落も大きく減少する。この傾向は古墳時代前期から中期まで続く。烏山川の流域の桜木遺跡で中期の集落形成が認められるのみである。

再び集落が目黒川流域に戻るのは古墳時代後期になってからである。しかし、この時期の古墳や横穴墓は大塚山古墳と梅が丘横穴のみであり、大規模な拠点的集落の展開は望めない。なお、第 34 図では、目黒川流域は集落と古墳の点を落とし、他の流域は集落のみ点を落とし、古墳や横穴墓は省略している。

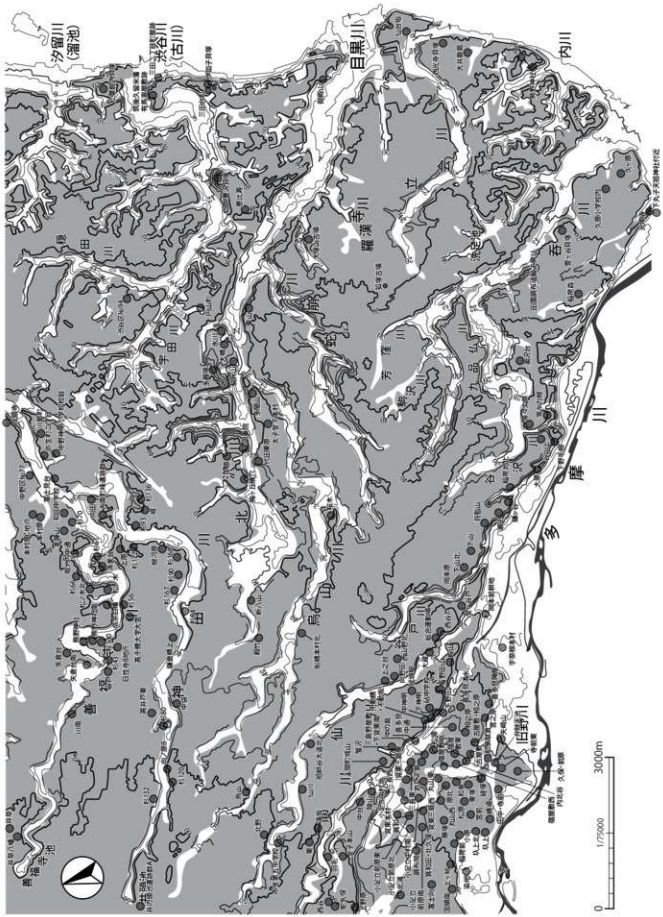
古墳時代は武蔵野台地縁辺の多摩川流域の遺跡数が爆発的に増え、弥生時代終末期以降、古墳時代前期から中期、さらに後期へと集落が増加するとともに、立川面や沖積面への集落が大きく広がる。特に古墳時代中期以降、多摩川左岸の沖積地では活発な土地利用が始まる。一方、呑川や立会川下流の東京湾岸側では、古墳や横穴墓は多数検出されるのに対し、集落の検出が極めて少なく、非常にアンバランスな状態である（松崎 2022）。江戸時代以降の大規模削平も考えられるが、おそらく、海岸段丘下に集落が進出していると思われ、今後海岸部でも集落の検出が予想される。こうした状況は、渋谷川の下流域でも同様であり、多摩川流域と大きな違いである。神田川・善福寺川流域でも遺跡数は増加するが、ここでも古墳時代中期の集落が明確ではなく、前期の集落形成の後、中期に集落の再編がありこの流域からは一度撤退し、その後古墳時代後期に再び集落が展開し、古墳や横穴墓が構築されるようになる。

5）目黒川流域を中心とした奈良・平安時代の遺跡（第 35・36 図）

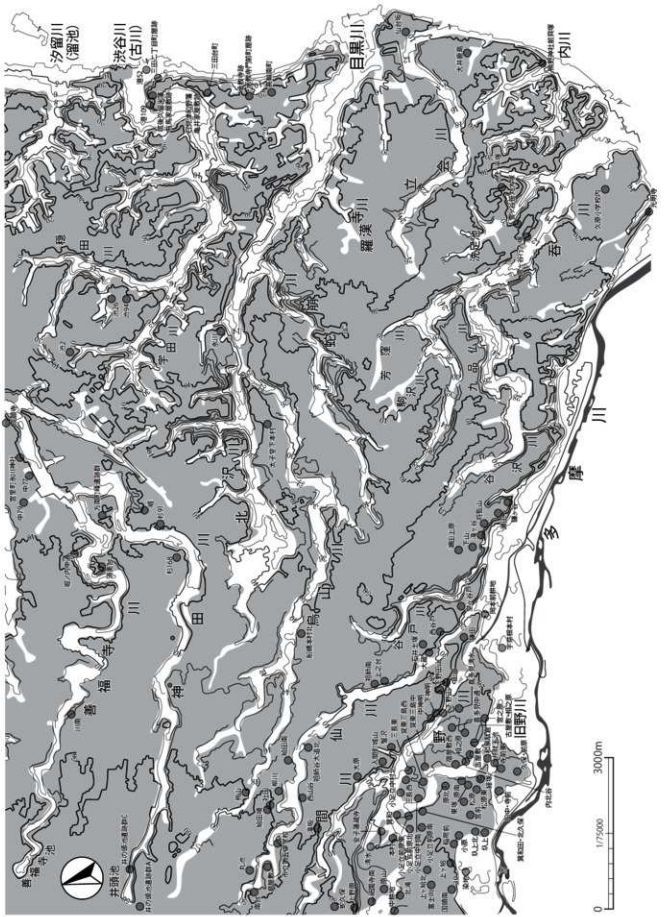
この時期、殿竹遺跡では明確な遺物は出土しておらず、集落の遺構も明確ではない。目黒川流域の遺跡をみても、奈良時代の遺跡はわずか 4 遺跡を数えるのみであり、古墳時代後期にこの流域に進出した人々も、奈良時代の集落の再編から、この流域から離れていったようである。平安時代も同様で遺跡の数は増えるものの、活発な土地利用は認められない。

一方、古墳時代に大規模に開発された多摩川流域は奈良時代でも土地利用が活発で、特に世田谷南西部から狛江・調布市にかけての下位段丘面や沖積面に遺跡が広がる。武蔵国府や多摩郡衙が現在の府中市付近に位置することから、多摩川流域の大規模開発が行われたと思われる。

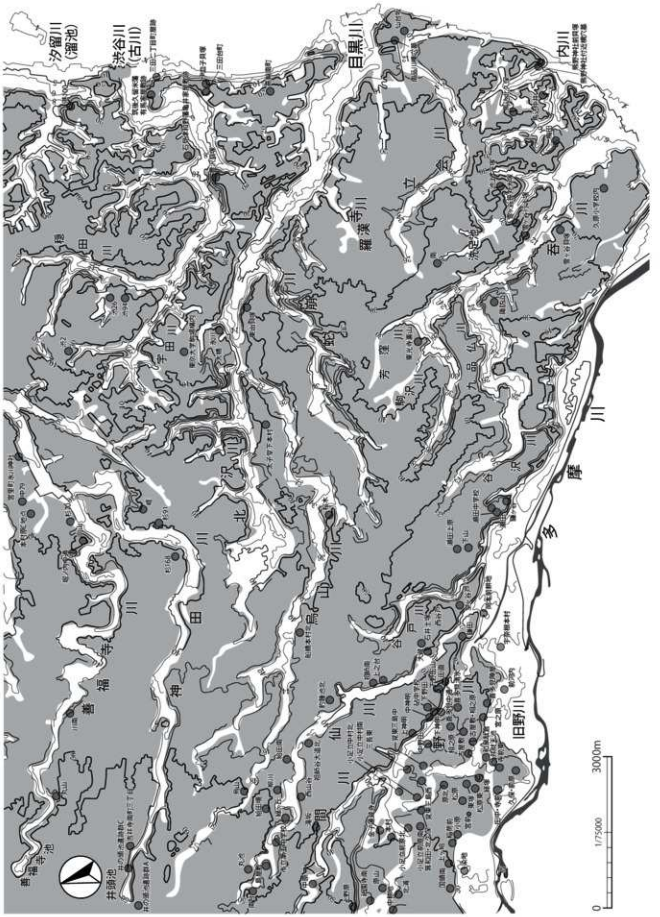
東京湾沿岸域の小河川の下流域では、相変わらず集落の実態が不明である。一部の火葬墓と思われる墳墓が検出されているのみである。今回、図の都合で多摩川の下流域の遺跡を図示していないが、十二天遺跡や女塚貝塚などで遺構や遺物が検出されており、こうした海岸部にも、海を生業とする



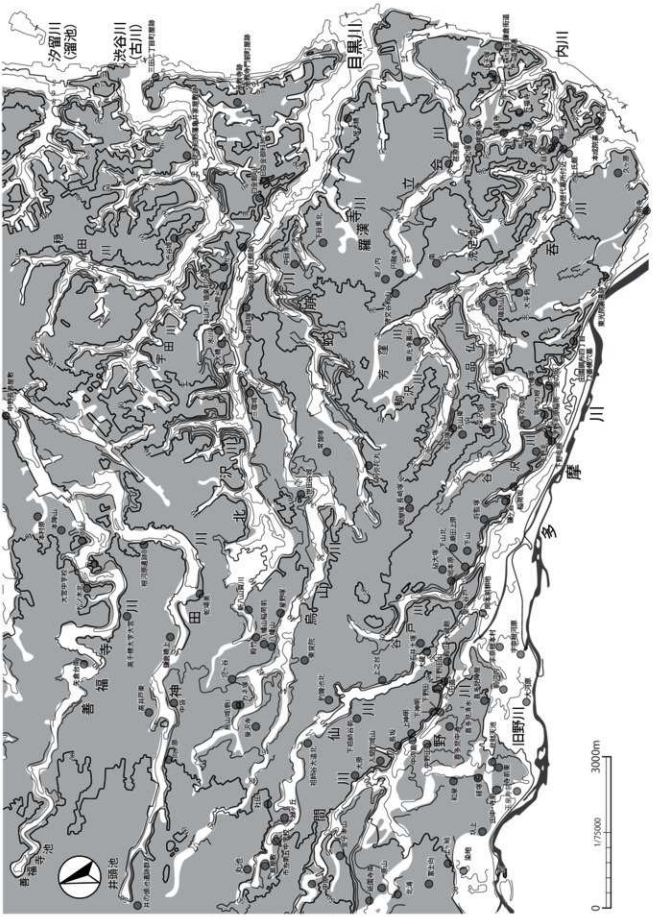
第 34 図　目黒川流域の遺跡（古墳時代）



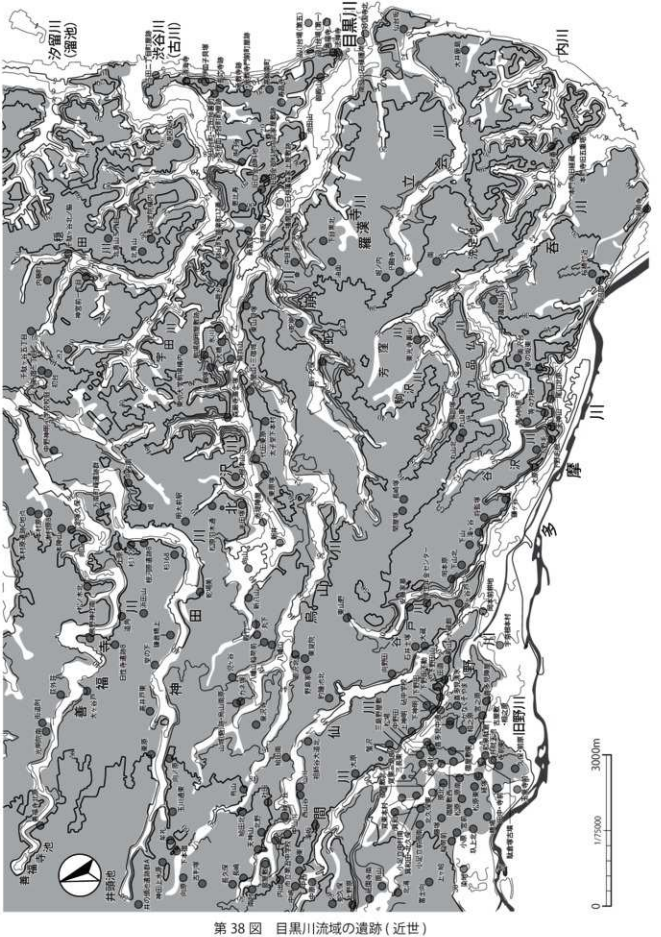
第 35 図　目黒川流域の遺跡（奈良時代）



第 36 図　目黒川流域の遺跡（平安時代）



第 37 図　目黒川流域の遺跡 (中世)



第 38 図　目黒川流域の遺跡 (近世)

集落や、物資の運搬にかかわる集落や施設が展開している可能性が高い。

神田川や善福寺川では目黒川同様集落は奈良時代には上流域では減少し、中下流域に集落の主体があるようである。平安時代には再び上流域にも集落が広がるが、拠点となるような大規模集落は現状では検出されていない。

6）目黒川流域の中・近世（第37・38図）

今回の殿竹遺跡では、かわらけや、陶器小片が出土したのみであるが、多数の柱穴群は中世以降と考えられる。第2次調査においても地下式坑を始め、多くの土坑や井戸が出土しており、中世の集落であることは間違いない。

この時期の目黒川流域は再び土地利用が活発に行われるようになり、支流の烏山川に面して吉良氏により世田谷城が構築される。また、従来原始・古代においては集落遺跡等の構築が行われることのないような台地の中央部に、塚や石塔類の構築も認められ、道の整備が行われているようである。

目黒川流域以外でも、活発な土地利用と遺跡形成が認められる。多摩川流域では、従来の崖線沿いの台地の縁から離れ、一段低い立川面の段丘面や多摩川の沖積地に遺跡の主体が移動する。東京湾沿岸では、中世寺院を中心とし塚や石塔類が検出されている。神田川や善福寺川流域でも上流域に向かい遺跡の形成が活発に行われている。

近世は都市江戸の近郊の村落として目黒川流域も開発が進められる。とくに、中世以来の自然河川にそった自然村落に加え、玉川上水とその分水によりその土地利用が大きく変わる。目黒川の支流の北沢川や烏山川の源流部は湧水量が多いわけではなく、烏山川のさらに支流である水無川のその名前のように、常時水流があるわけではなく水の流れていない時期もあったようだ。そこに玉川上水からの分水が各所に引かれるようになり、この分水からの水が、目黒川の支流にも流れ込むようになり、支流の上流部とはいえ水量も増え土地利用も大きく変化したようである。また、分水や水量の増えた支流では水車などの新たな動力が用いられるようになり、社会生活の変化が認められたのであろう。

図に示した範囲では、大きく都市江戸に含まれる範囲、さらにそこから東海道や甲州街道に沿って伸びる宿場、さらにその近郊の農村とにわかれる。都市江戸から離れても、近世の遺跡は中世遺跡に比べても格段に多く、都市江戸が膨張するだけでなく、近隣の農村も新田開発などとともに数が増えていったと思われる。

3　北沢上水（用水）について

今回の第4次調査では調査範囲に入らなかったが、第2次調査において北沢上水（用水）を発掘調査した。

北沢上水（用水）は玉川上水から分水された用水である。この用水の一部が第2次調査のおりに15号溝として調査され、さらにこの用水の下流に位置する丸下遺跡でもその一部が2ヶ所にわかれて5号溝として調査されている。そこで、以下簡単に北沢上水（用水）について述べてみたい。

1）はじまり

江戸時代の承応3年（1654）に完成した玉川上水は、主に江戸市中の飲料水対策として掘削された。取水口は多摩川の羽村、終点は四谷大木戸、総延長はおよそ13里52㎞である。北沢上水（用水）は、

万治元年（1658）に玉川上水から分水が許可された。当時の上北沢村の地頭であった旗本中根壱岐守の家老長谷川団左衛門が、当村の富農鈴木左内・榎本文右衛門と図って、幕府に許可を得たもので、住民の飲料水確保を理由とした。寛文10年（1670）には玉川上水の拡張工事が行われ灌漑用にも使用できるようになり、北沢分水は北沢上水（用水）として下流の村々も利用できるようになった。

構造　玉川上水からの取水口は何度か変更があり、当初は上北沢地内の牛窪に設けられ、樋口1尺4寸（約42cm）、長さ9尺（約273cm）であったが、天明8年（1788）上高井戸村第六天前に移され、樋口は方1尺（約30cm）となったという（『世田谷の河川』P80より）。明治4年（1871）4月には玉川上水に通船が開設され、川幅が広げられこととなり、取水口も久我山村に移された。

用水は久我山で取水した後、玉川上水に並行して上高井戸村第六天まで東南方向へ流れ、第六天前で南に向きを変え北沢村に入り、再び南東流して北原から谷上を経て、甲州街道を抜け、再度南流し殿竹にいる。殿竹を過ぎて、滝坂道に至ると二手に分かれ、東側は「水車堀」と呼ばれ途中に水車が設けられていた。その先は北沢川の本流に落とされていた。西側に分かれた用水は後に「江下山ドブ」と呼称され南東流し流末は赤堤村の鶴免付近でこれも北沢川に落とされていた、という。

北沢上水（用水）については『東京市史稿』上水編第一では「上北沢分水」の項目を立てて、『新編武蔵風土記稿』『郡村誌』『武蔵通誌』から引用している。

『新編武蔵風土記稿』では、武蔵国荏原郡上北沢村の記載内容の中に以下の記載がある（荏原郡巻十四）。

多摩川分水樋　此ノ分水ノ起コリシハ、万治元年村民ノ願ニヨリ、多摩川ノ水ヲワカツ〒ヨユルサレ、樋口一尺四寸四方ニ定メラル。上高井戸ヨリ北ノ方ヘ引テ、赤堤鶴而ノ間ヘ流ル。ソレヨリ所々ヘ引ワケテ用水トス。モト村民等カノミ水ノ為ニコヒ奉リシ分水ナレド、今ハミカサモマサリシカハ、此ノ水ヲ得テ新田多ク出來シト云。

『郡村誌』からは「北沢用水」という項目で

北沢用水

発源　東京府下東多摩郡久我山村地内ヨリ玉川上水ヲ分水ス。流状　久我山村地内ヨリ本郡上北沢ヲ経テ、本村（○荏原郡世田谷村）字鶴免ニ来タリ、本村ノ北隅ヲ東流シ、本村字鶴免ヨリ、同前田マデハ、水路中央村境ニシテ、北ハ上北沢村赤堤村松原村等也。字前田ヨリ同北沢窪江本村ヲ流レ代田村ニ入ル。○中略。水質　玉川上水ヲ分水スルト雖モ、少流加フルニ畦畔等ヨリ悪水流入セルヲ以テ質不良。雑項　本用水ハ、万治元戊戌年中、徳川氏ノ臣中根平十郎、上北沢村知行タルニ付、同人家来長谷川団右衛門、及同村鈴木左内、榎本文右衛門発起ニテ、同村外六ケ村組合飲料及田養水ニ供スル為メ、旧幕府ヘ出願、上北沢村地内字牛窪ヘ、方壹尺四寸、長九尺ノ樋口ヲ伏セ、玉川上水ヲ分水ス。其後天明八年中、上高井戸村字第六天前ヘ樋口場所替出願、許可トナル。猶明治四年四月中、玉川上水ェ通舟開設ニ付、川幅切広ケ、且寸積減シ方、其ノ筋ヨリ御達ニ相成、水入悪鋪、旱ニ苦シムヲ以テ、出願ノ上、現在ノ久我山村字堀向ヘ場所替ス。組合村々ニ於テ養水ニ供スル田反別五拾三町三反拾八歩、本村ニ於テハ、田反別七町四反九畝廿弐歩ナリ。

『武蔵通誌』からは「上北沢用水渠」という項目で

上北沢用水渠　東多摩郡高井戸村久我山ニ陰梶ヲ設ケ、長三間縦八寸横壹尺。以テ多摩川上水ヲ分チ、同村上高井戸ヨリ荏原郡松沢村上北沢ニ至リ、東南流同村赤堤松原ヲ経テ、世田谷村世田谷

代田下北沢三宿池尻ニ至リ、烏山用水ニ合シ、荏原川トナル。長凡貳里九町。上北沢・赤堤・松原・世田谷・下北沢・代田三宿七村・田五拾貳町壹反拾八歩ノ灌漑ニ供ス。

按ズルニ本渠ハ、万治元年戊戌上北沢村地頭中根某平十郎ノ臣長谷川某団右衛門及同村人鈴木某左内榎本某文右衛門官ニ請ヒ同村中ヨリ陰梘ヲ以テ多摩川上水ヲ分派シ、灌漑ニ資ス。天明八年戊申渠口を上高井戸村ニ移シ、明治四年辛未四月又之ヲ今ノ地ニ移ス。

『上水記』は寛政三年（1791）、幕府普請奉行上水方石野広通（いしのひろみち）によってつくられた、江戸上水の公式記録（主として、当時稼働していた神田上水・玉川上水の記録）である。上水記では

「分水引候年月、不相」

「樋口上高井戸村地先より引取申候、水口壱尺四方、上北沢村・赤堤村・世田谷村・松原村・都合五ケ村、樋口より水末まで壱里半余」

玉川上水誌では、玉川上水の右岸、烏山分水口のやや下流、投渡橋の下手に「一リ半ヨ」と付記されている。

2）丸下遺跡と殿竹遺跡

丸下遺跡（世田谷区№241）は殿竹遺跡の南東側に位置する（世田谷区教育委員会丸下遺跡第3次調査会 2004）。両者で検出された溝は約 130 m離れるが、ともに北沢上水（用水）の一部と評価されている。

殿竹遺跡は2次調査 SD15 が該当し、長さは 45 mを検出している。規模は幅が約 1.5 m、深さは 0.8 mで断面形は梯形である。両側に杭を打って土留めをしている。この点は後述する丸下遺跡の5号溝とは構造が異なる。出土遺物は覆土中から統制陶器やビニールが出土するという。昭和30年の地図上にこの溝が記されていることから、完全な埋没は昭和30年代と推定している。また、この溝に接続する陶管の存在から用水路から排水路として機能した時期もあることを指摘している。

丸下遺跡で検出された5号溝は3次調査B‐3区と3次調査C区に分かれており、両者の地点は 39 m離れているが、走行や形状の類似から同一の溝と認定している。しかし、両者の間が北西側に位置するC区と南東側に位置するB‐3区とでは 39 m離れるのに対し、両者の底面高の差が報告者は 0.62 mもありとしており（報告書図ではC区では≒ 42.90 m、B‐3区で≒ 42.25 m）やや不自然である。報告者はこのC区の東端付近に攪乱があり、溝に段差があった可能性があることから、地図に描かれた水車のマークの位置が、このC区の東端からB‐3区の間に位置すると推定しているようである。この指摘であれば、深さの差の問題も解消する。水車用に用水の深さを変えていた可能性が高く、逆にこうした深さが急に異なる場合には近くに水車などの施設があった可能性を指摘できるのかもしれない。

3）本田創『水のない川』

この北沢上水（用水）を構成する溝について、近年注目すべき論考が示された。本田創氏による「ひと昔前の郊外の記憶」という章で北沢川と北沢分水を取り上げ、その歴史と特徴を述べている（本田 2022）。まず取水口の問題で、取水口は3つの時期に分かれる。最初の取水口の位置は不明であるとする。次いで現在殿竹遺跡を走る用水は、2番目の取水口からで、天明8年（1788）以降に伴うものであるという指摘である。この2番目の段階は、北沢川と一体化した北沢用水として川治い

全域の水田灌漑に利用されていくという。しかも、現在の八幡山駅の北側の字矢野で上水路は二手に分かれ、下堀と上堀となり、それぞれ甲州街道を横断する。下堀は北沢川と並行して東側を流れ、川幅は広いところで３～４ｍほどあったという。一方上堀は幅が２ｍ程で、北沢川の谷の西側微高地上の荒れ地を流れ、下流で水車堀と江下山堀に分かれる。

上記のように、本田氏によると殿竹遺跡の溝 SD15 や丸下遺跡の溝 SD5 は、北沢上水（用水）の上堀に該当することになる。また、廃止の時期は昭和 40 年（1965）の玉川上水の送水停止と同時に廃止されたとしている。

近年玉川上水本体だけでなく、その分水についても考古学的な調査が行われるようになってきており（国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 2019）、世田谷区内でも分水の流れがいくつもあることから、調査対象範囲内に、こうした分水が走っていないか今一度見直す必要があろう（注１）。

4　まとめ

殿竹遺跡は旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であり、特に従来検出されることのなかった、旧石器時代の石器と礫の集中部を検出した点は大きな成果であった。なお、遺跡内のローム層はいずれもいわゆる水漬きロームとなることについては、世田谷区の北烏山から南烏山、八幡山、経堂、桜、世田谷、上馬、野沢にかけての一帯にローム層中に宙水が存在し、地表から２～４ｍに位置するという（世田谷区みどりとみず政策担当部みどり政策課 2013）。本遺跡の水漬きロームもこの宙水の影響の現われの可能性が高い

縄文時代前期は諸磯ｂ式土器が少量出土したのみで、集落等を構成する遺構は検出されなかった。

縄文時代では中期の集落の広がりが判明し、集落の西限が第２次調査と今回の第４次調査の境付近に位置することが判明した。今回の第４次調査の範囲は縄文時代中期集落の縁辺部に位置し、出土量は多くはないが土器や礫の廃棄場所の一つであった。

弥生時代後期は今回の調査区内では検出されず、第２次調査区の東側付近にまとまることが判明し、しかも小規模な集落であることもまた明らかとなった。目黒川流域の弥生時代遺跡の集落動向で示した通り、源流域開発集落であったのであろう。農耕集落のなかでも水稲農耕集落は水利を重要視していたと推定されることから、本遺跡はまた、源流域の水源を守る集落でもあったと思われる。目黒川下流域の集落にとって、源流部の水源の確保と保全は重要であるとともに、農閑期には農耕以外の狩猟や採集の拠点にもなり、また他の水系の集落との交流の中継地点にもなりえたと思われる。

古墳時代後期の集落はこれも、今回の調査区には及ばず、第２次調査の範囲の中に納まる小集落であることが判明した。この時期も遺跡分布で示したように、集落の形成は上流域では低調であり、主体は下流域であるが、波状的に上流部開発の波が及ぶようで、７世紀代にも開拓の試みが行われていた。しかしこの試みも単発的で、古墳時代末から奈良時代にかけては上流部は閑散とした遺跡展開を示すようになることは、遺跡分布で示した通りである。

奈良時代・平安時代は遺構・遺物は検出されなかった。また今後検出されたとしても小規模な集落であろう。

中世以降では、多数の柱穴群が検出されている。明確な建物遺構の復元は今回は明確にできなか

ったが、この時期の集落や３次調査で検出された地下式坑の検出から集落の存在は間違いない。目黒川上流域では中世になると集落が再度出現するようになり、活発な開発が行われるようになる。殿竹遺跡の地名の起こりの一つの説として、世田谷城の防御施設の一端を示す竹藪の存在が記されたが、今回検出された柱穴群は建物跡の存在より、区画などの機能を持つ施設の存在を予想させた。しかしながら調査範囲が狭く、しかもこの区画は２次調査区内では柱穴群は密集しないことが全体図から判明しており、今後の調査をまち再度検討する必要があろう。

近世では北沢分水（用水）の敷設とその用水に隣接した集落の展開が注目される。上水は飲料水とともにその後農業用水として用いられたことは疑いない。また明治時代の地図に記された水車の存在は、江戸時代にもさかのぼり、地域の重要な動力源としての機能を果たしていた可能性が高い。

なお、2003 年に玉川上水は国の史跡に指定され、その他の分水では、国分寺市が恋ヶ窪分水の一部が市重要史跡に指定されているが、多くは暗渠となり地表から姿を消しているため、単独の遺跡として登録されることはない。

今後は、こうした無数に展開する玉川上水の分水も埋蔵文化財として把握していく必要があろう。特に分水の時期が遺構や遺物の年代の定点となることが明らかなので、数 km 以上の広範囲にわたる遺構であることから、広範囲の集落や遺構の同時存在などを考慮する際には最適の遺構となり、遺構論や遺跡論に有効な施設と云えよう。

遺物では近世瓦の出土が注目されるが十分な検討ができなかった（注２）。この瓦が本遺跡に直接関連する建物跡に由来するものなのか、本遺跡の周辺からゴミとともに持ち込まれたものか今回の調査では判断できなかった。被熱しているところから火災にあった後の片付けゴミの一部である可能性と転用による被熱の可能性が考えられた。

以上、殿竹遺跡の第４次調査の成果とこれまでの調査成果を簡単にまとめた。特に北沢上水（用水）については今後の検討が必要と思われ、大きな課題である。（及川）

注

注１　この他に廻沢北遺跡では烏山川の支流である水無川に関連する「悪水堀」の調査が廻り沢北遺跡の予備調査の際に一部行われている。規模は上幅２ｍで、30 m以上伸び角を確認している（世田谷区教育委員会 1984）。

注２　内野　正氏のご教示によると、本遺跡の桟瓦は尻と頭に切り込みが入る A 形桟瓦であるが、多摩地域も含めた在地産の可能性も考えられるという（内野 2014）。

引用・参考文献

蘆田伊人校訂 1981『新編武蔵風土記稿』大日本地誌体系　雄山閣出版

石川博行・宮崎博 2012「目黒川低地の自然地形」『居木橋遺跡（A 地区）―居木橋遺跡第 11 次発掘調査報告書』三菱地所レジデンス・加藤建設株式会社

石野広通 1791『上水記』東京都水道局・内閣文庫蔵　（東京都水道局編 1965）

内野　正 2014「近世から近代の多摩の瓦」『多摩のあゆみ　特集多摩の瓦』公益財団法人たましん地域文化財団

遠藤邦彦ほか 2019「武蔵野台地の新たな地形区分」『第四紀研究』58　日本第四紀学会
大槻信次他 1985『中野田・松原羽根木通遺跡他』世田谷区教育委員会
柏書房 1983　『東京一万分の一地形図集成』
柏書房 2001　『正式二万五千分の一地形図集成　東日本』
喜多見陣屋遺跡調査会 1989『喜多見陣屋遺跡Ⅰ』世田谷区教育委員会・喜多見陣屋遺跡調査会
喜多見陣屋遺跡調査会 1996『喜多見陣屋遺跡Ⅲ』世田谷区教育委員会・喜多見陣屋遺跡調査会
共和開発株式会社 2015『廻沢北遺跡－東京都世田谷区千歳台四丁目２６番の発掘調査記録－４』共和開発
国分寺市教育委員会ふるさと文化財課 2019『恋ヶ窪村分水　市重要史跡指定記念　歴史講演会「国分寺市内の玉川上水分水・水車」資料集』
坂詰秀一他 2005『品川区の原始・古代』品川区教育委員会
桜木遺跡第３次調査会 2007『桜木遺跡Ⅱ東京都世田谷区桜一丁目 31 番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
桜木遺跡調査会編 2008『桜木遺跡Ⅰ東京都世田谷区桜一丁目 34・35・36 番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
桜木遺跡第４次調査会 2009『桜木遺跡Ⅲ東京都世田谷区桜一丁目 48 番の発掘調査記録（その 1）』世田谷区教育委員会
桜木遺跡第５次調査会 2009『桜木遺跡Ⅳ東京都世田谷区桜一丁目 48 番の発掘調査記録（その 2）』世田谷区教育委員会
桜木遺跡第８次調査会編 2011『桜木遺跡Ⅴ東京都世田谷区桜一丁目 27･28･29 番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
桜木遺跡第８次調査会 2012『桜木遺跡Ⅵ東京都世田谷区桜一丁目 27 番の発掘調査記録』
桜木遺跡第 10 次調査会編 2012『桜木遺跡Ⅶ東京都世田谷区桜一丁目 30 番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
桜木遺跡第８次調査会編 2014『桜木遺跡Ⅷ東京都世田谷区桜一丁目 27 番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
品川裕昭他 2009『太子堂下本村遺跡Ⅱ－東京都世田谷区太子堂３丁目 34 番地の発掘調査記録―』世田谷区教育委員会太子堂下本村遺跡第４次調査会
鈴木理生 2003『江戸・東京の川と水辺事典』柏書房
十菱駿武・寺田良喜他 1979『八幡山遺跡』世田谷区教育委員会・世田谷区遺跡調査会
下山照夫 1998「世田谷地域の中小河川」『武蔵野』第 76 巻第１号　武蔵野文化協会
世田谷区教育委員会・殿竹遺跡調査会 1987『殿竹遺跡予備調査報告書』
世田谷区教育委員会 1987『八幡山遺跡　Ⅱ』
世田谷区教育委員会八幡山遺跡第４次調査会 2007　『八幡山遺跡　Ⅲ』
世田谷区教育委員会丸下遺跡第３次調査会 2004　『丸下遺跡』
世田谷区教育委員会世田谷区遺跡調査会 1979　『松原遺跡』
世田谷区教育委員会 1984『廻沢北遺跡　Ⅰ』

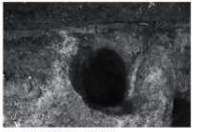
世田谷区教育委員会 1988『廻沢北遺跡　Ⅱ』
世田谷区教育委員会 1981『廻沢北遺跡・第６次調査概報』
世田谷区教育委員会・共和開発 2016『八幡山遺跡－東京都世田谷区八幡山二丁目 14 番の発掘調査記録－４』野村不動産
世田谷区教育委員会明治薬科大遺跡調査会 2000『明治薬科大遺跡』
世田谷区立郷土資料館編 2002『平成 14 年度特別展図録 世田谷最古の狩人たち -3 万年前の世界』
世田谷区政策経営部政策企画課区史編さん編 2017『世田谷 往古来今』
世田谷区みどりとみず政策担当部みどり政策課 2013『宙水をご存じですか』
東京都世田谷区役所 1951『世田谷区史　上巻』
武田浩司他 2005『東京都目黒区東山貝塚遺跡（Z 地点発掘調査報告）』目黒区埋蔵文化財調査報告書第 19 集
武田浩司他 2007『東京都目黒区土器塚遺跡（第３次調査）』目黒区埋蔵文化財調査報告書第 20 集
竹内秀雄 1977『世田谷区史跡散歩』東京史跡ガイド⑫　学生社
東京都教育委員会 1986『玉川上水文化財調査報告－その歴史と現況－』東京都教育委員会
東京市役所 1919『東京市史稿』上水編第一
東京都埋蔵文化財センター 2010a『世田谷区殿竹遺跡（第３次調査）―都立松沢病院外構整備工事及び公園整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第 244 集
東京都埋蔵文化財センター 2010b『殿竹遺跡（第２次調査）―東京都医学系総合研究所（仮称）の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第 245 集
東京都埋蔵文化財センター編 2016『桜木遺跡Ⅸ 補助第 128 号線（桜）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告　310 集
東京都埋蔵文化財センター編 2017『桜木遺跡Ⅹ 補助第 128 号線（桜）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告　329 集
特定非営利活動法人井草文化財研究所 2021『八幡山遺跡－東京都世田谷区八幡山二丁目３番の発掘調査記録－５』トーセイ
トキオ文化財株式会社 2021『八幡山稲荷前遺跡－東京都世田谷区八幡山１丁目 25 番の発掘調査記録－２』大和ハウス工業
長佐古真也 2007「続・お茶碗考－近代・現代の中形碗に飯碗を探る－」『考古学が語る日本の近現代』同成社
野口　淳 2022「国分寺市の成り立ちと史跡武蔵国分寺」『歴史講座「武蔵国分寺の成り立ちと史跡武蔵国分寺跡」記録集』国分寺市教育委員会ふるさと文化財課
長谷川　渉・品川裕昭他 1985『向山遺跡』世田谷区教育委員会・世田谷区遺跡調査会
八幡山稲荷前遺跡調査会 1995『八幡山稲荷前遺跡－東京都世田谷区八幡山１丁目 25 番の発掘調査記録－』世田谷区教育委員会埋蔵文化財係
本田　創 2022「ひと昔前の郊外の記憶　北沢川・北沢分水」『水のない川　暗渠でたどる東京案内』山川出版社
松崎元樹 2022『東京の古墳を探る』歴史文化ライブラリー 551　吉川弘文館

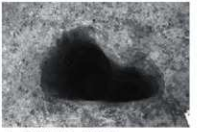
三田義春 1977『世田谷の河川と用水』東京都世田谷区教育委員会
三田義春 1984『世田谷の地名（上）』世田谷区教育委員会
廻沢北遺跡第 7 次調査会 2010『廻沢北遺跡Ⅲ－東京都世田谷区船橋七丁目 24 番の発掘調査記録－』世田谷区教育委員会
森田信博 2006『騎兵山遺跡（世田谷区池尻四丁目 8 番における発掘調査記録）』鹿島建設株式会社・加藤建設株式会社
山本典幸 2000「（付編）目黒区内の縄文時代遺跡分布の動態」『東京都目黒区油面遺跡（C 地点）』目黒区埋蔵文化財調査報告書 16 集
横山昭一・村松　篤 1983『目黒不動遺跡』目黒区埋蔵文化財調査報告書第 2 集
吉田　格・武田浩司 1998『東京都目黒区東山南遺跡』目黒区埋蔵文化財調査報告書第 13 集

玉川上水誌　都立中央図書館「東京誌料」所収文書

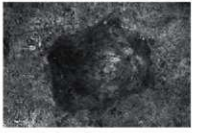
図版 1

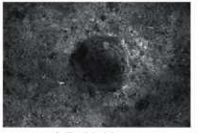
1. P001全景（南東）

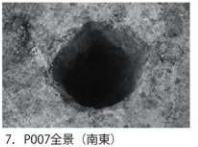

2. P002全景（南東）

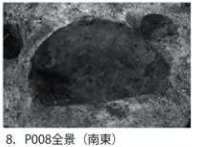

3. P003全景（南東）

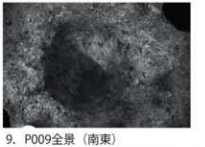
4. P004全景（南東）

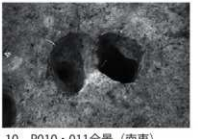

5. P005全景（南東）

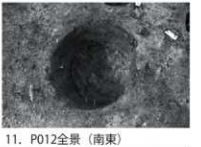

6. P006全景（南東）

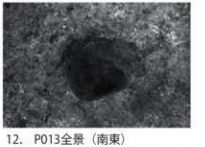

7. P007全景（南東）


8. P008全景（南東）

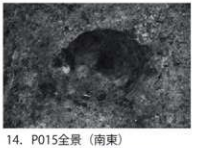

9. P009全景（南東）

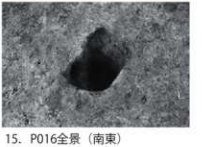

10. P010・011全景（南東）

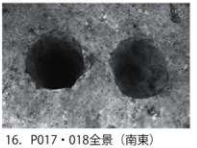

11. P012全景（南東）

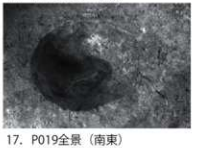

12. P013全景（南東）

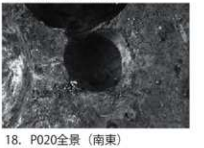
13. P014全景（南東）


14. P015全景（南東）


15. P016全景（南東）

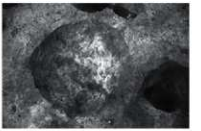

16. P017・018全景（南東）


17. P019全景（南東）

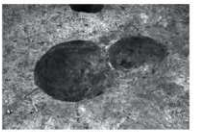

18. P020全景（南東）

図版 2

1. P021全景（南東）

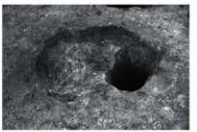

2. P022全景（南東）

3. P023全景（東）

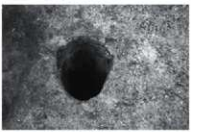

4. P024・025全景（東）

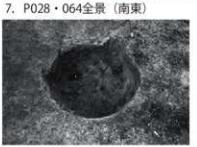
5. P026全景（東）

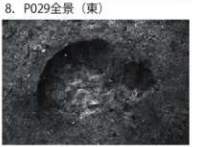
6. P027全景（東）

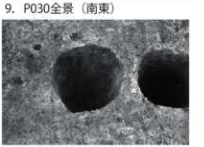

7. P028・064全景（南東）

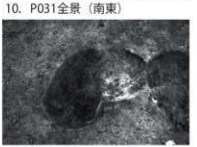
8. P029全景（東）

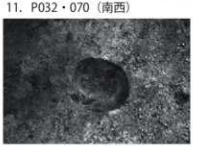

9. P030全景（南東）

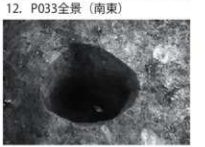

10. P031全景（南東）

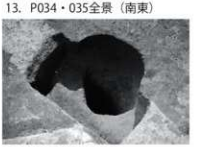

11. P032・070（南西）

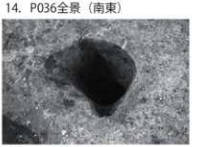

12. P033全景（南東）


13. P034・035全景（南東）


14. P036全景（南東）

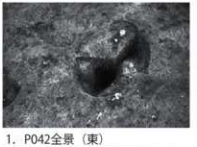

15. P037全景（南東）

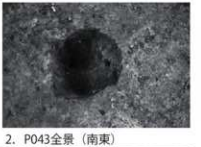

16. P038全景（北東）

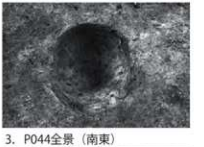

17. P039全景（東）

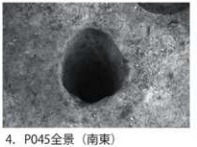
18. P040・041（南）

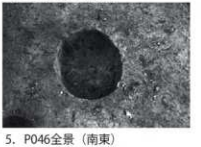
図版 3

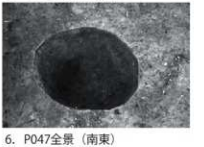

1. P042全景（東）

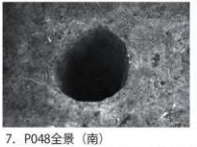

2. P043全景（南東）

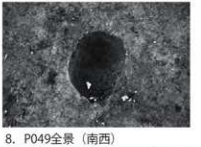

3. P044全景（南東）

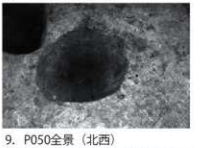

4. P045全景（南東）

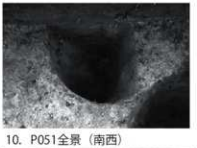

5. P046全景（南東）

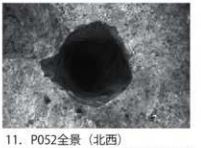

6. P047全景（南東）

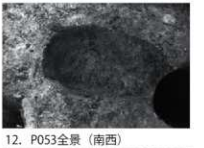

7. P048全景（南）

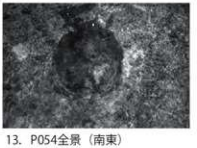

8. P049全景（南西）

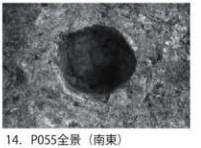

9. P050全景（北西）

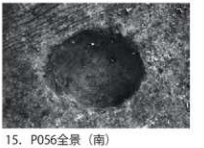

10. P051全景（南西）

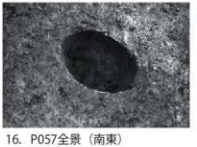

11. P052全景（北西）


12. P053全景（南西）


13. P054全景（南東）


14. P055全景（南東）


15. P056全景（南）

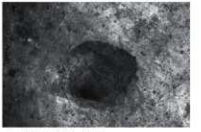

16. P057全景（南東）

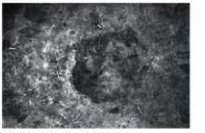
17. P058全景（北東）

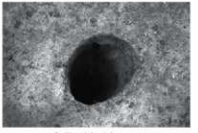
18. P059全景（北東）

図版4

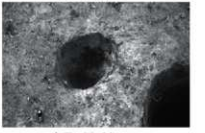
1. P060全景（北）

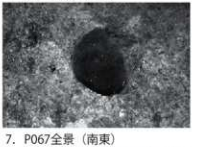

2. P061全景（東）

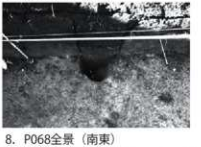

3. P062全景（南東）

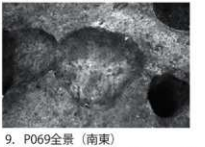

4. P063全景（南東）

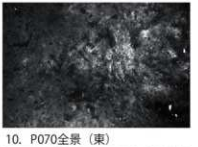
5. P065全景（南東）

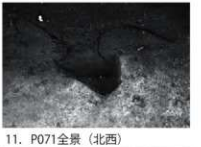

6. P066全景（南東）


7. P067全景（南東）

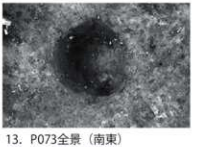

8. P068全景（南東）

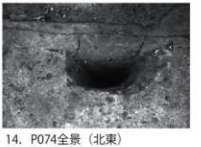

9. P069全景（南東）

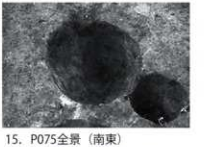

10. P070全景（東）

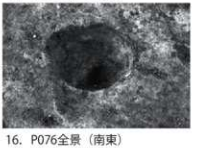

11. P071全景（北西）

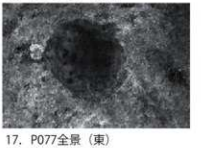
12. P072全景（南東）

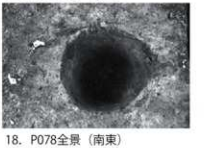

13. P073全景（南東）


14. P074全景（北東）

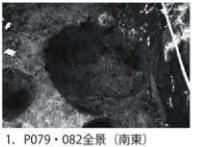

15. P075全景（南東）

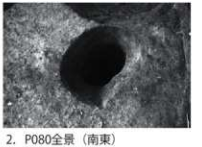

16. P076全景（南東）

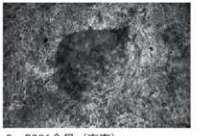

17. P077全景（東）

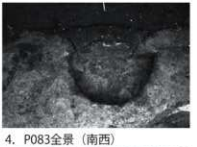

18. P078全景（南東）

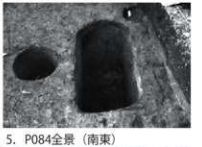
図版 5

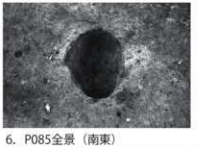

1. P079・082全景（南東）

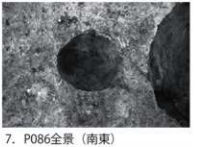

2. P080全景（南東）

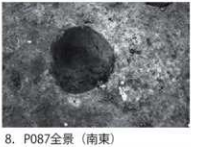

3. P081全景（南東）

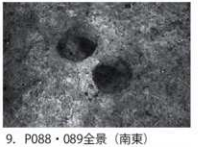

4. P083全景（南西）


5. P084全景（南東）

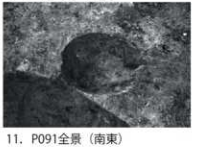

6. P085全景（南東）

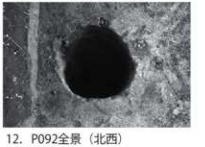

7. P086全景（南東）

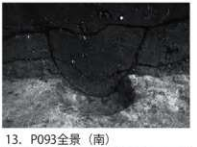

8. P087全景（南東）

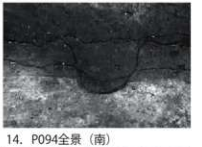

9. P088・089全景（南東）

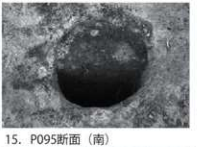
10. P090全景（北西）

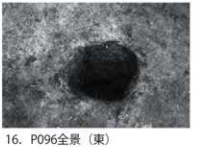

11. P091全景（南東）

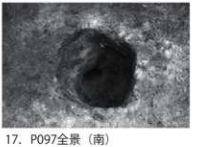

12. P092全景（北西）

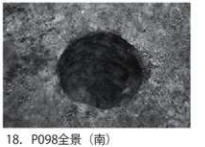

13. P093全景（南）


14. P094全景（南）

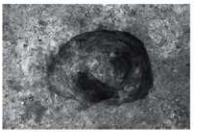

15. P095断面（南）

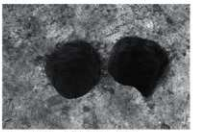

16. P096全景（東）

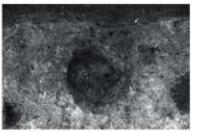

17. P097全景（南）


18. P098全景（南）

図版6

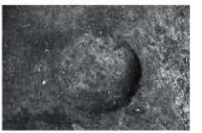

1. P099全景（東）


2. P100・101全景（東）

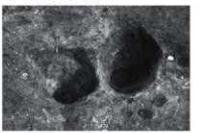

3. P102全景（北）

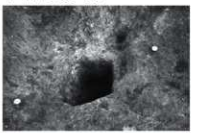
4. P103全景（東）

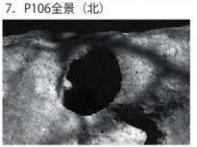
5. P104全景（東）

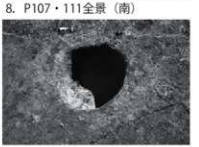

6. P105全景（東）

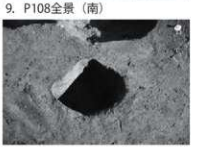
7. P106全景（北）

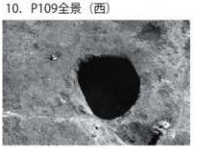

8. P107・111全景（南）

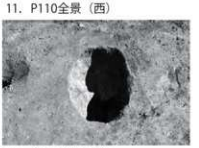

9. P108全景（南）

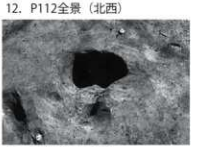

10. P109全景（西）

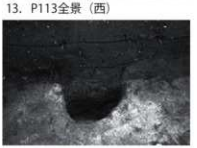

11. P110全景（西）

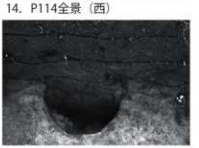

12. P112全景（北西）

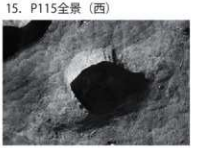

13. P113全景（西）


14. P114全景（西）


15. P115全景（西）


16. P116全景（西）


17. P117全景（西）


18. P118全景（西）

図版 7

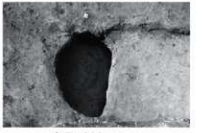
1. P119全景（西）

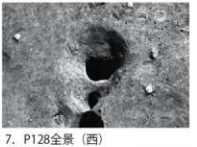
2. P120・121全景（北西）

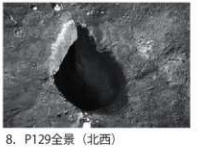
3. P122・127全景（北西）

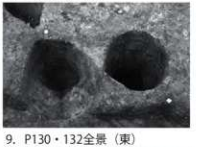
4. P123・124全景（北）

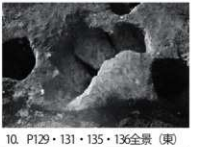
5. P125全景（西）


6. P126全景（東）

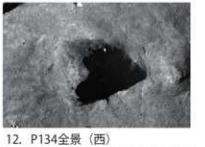

7. P128全景（西）

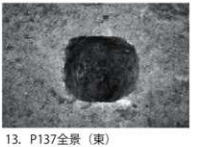

8. P129全景（北西）


9. P130・132全景（東）

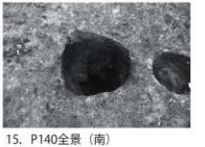

10. P129・131・135・136全景（東）

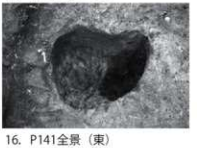
11. P133全景（西）

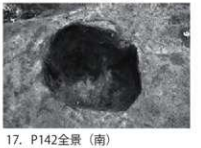

12. P134全景（西）

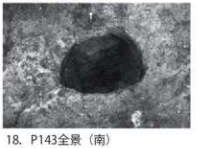

13. P137全景（東）

14. P138・139全景（東）

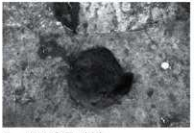

15. P140全景（南）


16. P141全景（東）


17. P142全景（南）

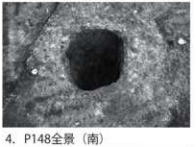

18. P143全景（南）

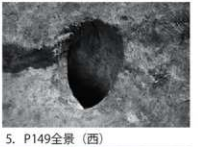
図版８

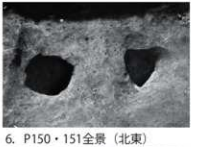

1. P145全景（南）

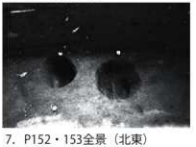
2. P146全景（南）

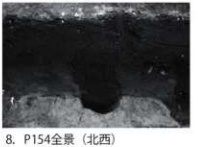
3. P147全景（南）

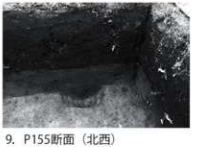

4. P148全景（南）

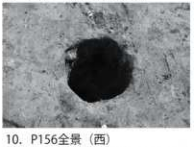

5. P149全景（西）

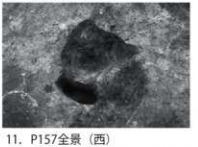

6. P150・151全景（北東）

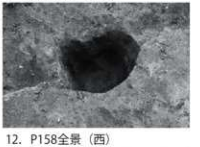

7. P152・153全景（北東）

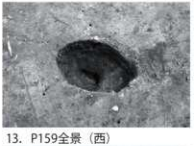

8. P154全景（北西）

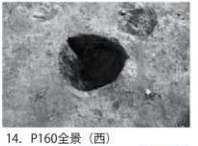

9. P155断面（北西）


10. P156全景（西）

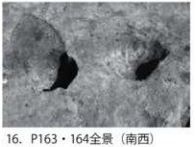

11. P157全景（西）

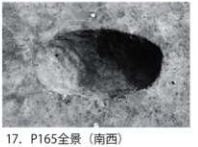

12. P158全景（西）

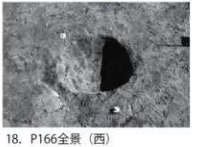

13. P159全景（西）


14. P160全景（西）

15. P161・162全景（南西）


16. P163・164全景（南西）


17. P165全景（南西）


18. P166全景（西）

図版 9

1. P167全景（西）

2. P168全景（北東）

3. P169全景（北）

4. P170全景（西）

5. P171全景（北西）

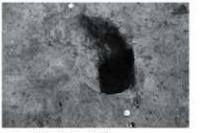
6. P172全景（西）

7. P173全景（西）

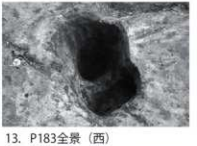
8. P174・175・176・177全景（北西）

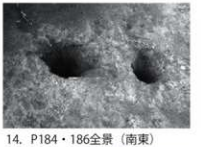
9. P178全景（西）

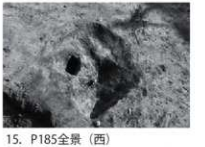
10. P179全景（西）

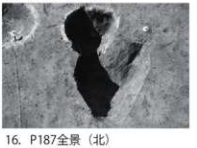

11. P180全景（西）

12. P181・182全景（東）

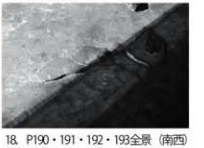

13. P183全景（西）


14. P184・186全景（南東）


15. P185全景（西）


16. P187全景（北）

17. P188・189全景（南東）


18. P190・191・192・193全景（南西）

図版 10

1. P194・195全景（南東）

2. P196・197全景（南西）

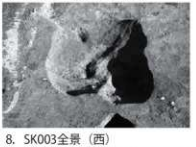
3. P198全景（西）

4. SD001～003全景（南）

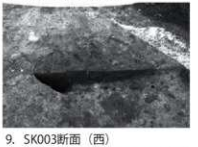
5. SD001～003全景（西）

6. SK002全景（南東）

7. SK002アップ（北東）



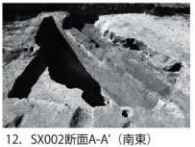
8. SK003全景（西）



9. SK003断面（西）

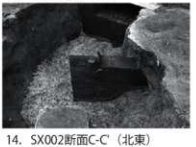
10. SX001全景（北）

11. SX002全景（西）

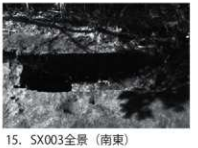


12. SX002断面A-A'（南東）

13. SX002断面B-B'（南西）



14. SX002断面C-C'（北東）



15. SX003全景（南東）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	とのたけいせき
書　　名	殿竹遺跡（第４次調査）
副　書　名	東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	東京都埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第380集
編 著 者 名	及川良彦・山口慶一・尾田識好・大網信良・大八木謙司・両角まり
編 集 機 関	公益財団法人東京都教育支援機構　東京都埋蔵文化財センター
所　在　地	〒206-0033　東京都多摩市落合一丁目14番２　　TEL 042 - 374 - 8044
発行年月日	西暦　2023年　11月　30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
とのたけいせき 殿竹遺跡	とうきょうとせたがやく 東京都世田谷区 かみきたざわ2ちょうめ1ばんち 上北沢二丁目１番地	13112	57	35°39′59″	139°36′55″	20221205 ～ 20230331	381㎡	東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
殿竹遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 ～ 近世	石器・礫集中部 ピット198基 溝３条 土坑３基 不明遺構３基	縦長剥片、剥片、焼礫 縄文土器（前期後半、中期後半） 縄文石器（石匙）、焼礫 中世～近代（陶磁器類、土器類、瓦、煉瓦、ガラス）	４回目の調査ではじめて旧石器時代の文化層を発見

要　約

殿竹遺跡は目黒川の上流部である北沢川の源流域に展開する集落跡。今回の調査で旧石器時代の縦長剥片や焼礫がまとまって出土した。縄文時代の集落は今回の調査地点にまでは及ばないことが明らかとなった。同様に、弥生時代後期、古墳時代後期の集落も西側には広がらないことが判明した。中世以降はピット群が検出されたが、明確な間尺の建物跡の復元が不可能であり、柵列などのより簡易な区画施設が長期にわたり重複している可能性が高いが、調査範囲の関係でその規模や方向などは明確にできなかった。

これまでの１～４次調査の成果をまとめるとともに、目黒川流域の各時期別の遺跡動向を概観し、北沢上水（用水）について研究の現状についても簡単ながら触れている。

印刷仕様

表紙	レザック	215kg（四六判）
見返し	上質紙	135kg（四六判）
巻頭	マットコート紙	90kg（四六判）
本文	マットコート紙	90kg（四六判）
写真図版	マットコート紙	90kg（四六判）
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準適合	
製版線数	150 線（カラー 175 線）	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

世田谷区
殿竹遺跡　（第 4 次調査）
－東京消防庁世田谷消防署上北沢出張所庁舎改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査－
東京都埋蔵文化財センター調査報告 第 380 集

2023 年 11 月 30 日　発行

編集・発行　公益財団法人東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
東京都多摩市落合一丁目 14 番 2
TEL 042 - 374 - 8044

印刷　株式会社サンワ
東京都千代田区飯田橋 2-11-8